

令和2年度指定

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム 構築支援事業

研究報告書・第2年次 (令和3年度)

研究開発構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版AL ネットワーク



令和4年3月

長野県教育委員会

カリキュラム開発拠点校 長野県上田高等学校

目 次

はじめに	学びの改革支援課長 長野県上田高等学校長	曾根原好彦 北澤 潔	1 2
【1】 事業の概要	構想概要 令和3年度事業実施計画書 イメージ図 令和3年度事業完了報告書		3 5 11 12
【2】 管理機関の取組	ALネットワークの構築 1 文理融合のカリキュラム開発 2 より深い学び 3 国際的な学び 4 高度な学び		22
【3】 拠点校の取組	上田高等学校 I ALネットワークの構築 1 カリキュラム開発拠点校 上田高校におけるWWL事業の教職員支援体制 2 北陸新幹線サミット 3 信州WWL高校生国際会議実行委員会 4 研究発表交流 II 文理融合のカリキュラム開発 1 令和3年度WWL研究開発活動 2 グローバルスタディ I 3 グローバルスタディ II J (日本語) 4 グローバルスタディ II E (英語) 5 グローバルスタディ III 6 (株) KDDI共同プロジェクト「課題研究テーマの見つけ方」 7 JICA * ICAN連携による国際理解教育「世界が100人の村だったら」 8 JICEとの連携授業「地域に暮らす定住外国人との共生について考える」 III より深い学び(探究的な学び) 1 県内フィールドワーク(1年) 2 探究の日(2年) 3 第1回アカデミックプレゼンテーション 4 第2回アカデミックプレゼンテーション 5 研究発表 長野県上田高等学校グローバルスタディ報告会 IV 国際的な学び 1 上田高校の海外研修概要 2 台湾 高級中学オンライン交流 3 香港 高校生オンライン交流 4 ヒューマン アクト イン マニラ(令和2年度の研修報告) 5 ボストンスタディプログラム(令和2年度の研修報告) 6 海外留学・進学セミナー V 高度な学び 1 松尾ゼミナール 2 1年生課題研究入門講座 VI 主体的な学び Take Action—課題研究から発展した生徒たちの様々な自主活動 VII 特色ある取組 校外における研究発表		31 32 35 35 37 38 41 45 48 51 52 53 54 56 58 58 59 62 63 65 66 67 68 69 70 71 72

【4】 共同実施校の取組	松本県ヶ丘高等学校	74
【5】 連携校の取組	須坂高等学校	77
	長野高等学校	78
	長野西高等学校	79
	篠ノ井高等学校	80
	屋代高等学校	81
	上田染谷丘高等学校	82
	野沢北高等学校	84
	諏訪清陵高等学校	87
	諏訪二葉高等学校	89
	伊那北高等学校	90
	伊那弥生ヶ丘高等学校	91
	飯田高等学校	92
	飯田風越高等学校	94
	松本深志高等学校	96
【6】 評価	WWL事業の評価と考察	
	1 生徒によるWWL活動に関するアンケート	99
	2 WWL活動がどのような能力を高めているかについてのアンケート	100
	3 WWL事業に関する教職員アンケートの分析と考察	102
	4 WWL事業に関する保護者アンケートの分析と考察	103
	5 GPS-Academicテストによる3つの能力評価についての分析と考察	103
おわりに	カリキュラムアドバイザー	内堀 繁利
		106
資料	第1回運営指導委員会議事録	107
	第2回運営指導委員会議事録	118
	第3回運営指導委員会議事録	126
	信州WWLコンソーシアム構築支援事業令和2年度検証会議のまとめ	135

令和3年度信州WWLコンソーシアム構築支援事業研究開発報告書に寄せて

学びの改革支援課長 曾根原好彦

文部科学省指定事業であります、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）構築支援事業の2年目を終えようとしています。昨年度に引き続き、カリキュラム開発拠点校の上田高等学校、共同実施校の松本県ヶ丘高等学校を中心に取り組み、連携校は初年度の9校から15校になりました。県内全域から様々な特色をもつ学校が加わっており、私立高校にもネットワークが広がりました。それぞれの学校の多様な学びを県内の高校生に提供できる可能性が、さらに広がったものと考えています。

本県のWWL事業構想は『「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク』をテーマに掲げています。SDGsを切り口に、単独校では得られない「深い学び」「国際的な学び」「高度な学び」「主体的な学び」の機会を、県内の高校生たちに提供するALネットワークを構築し、自らのアクションにより、新しい価値や社会を主体的に創造していくイノベティブなグローバル人材の育成を目指しています。

本報告書には、管理機関とそれぞれの学校における令和3年度の実践を掲載しました。「主体的な学び」「深い学び」については、探究学習に取り組み主体的にアクションを起こす生徒が増えてきています。「国際的な学び」に係わっては、コロナ禍で海外渡航も難しい中、オンラインを活用した海外の高校との交流が行われ、「高度な学び」についても、大学と連携した講座の実施など、各学校で工夫した取組をしています。それぞれの学校の取組がALネットワーク内で共有される事例も増えてきています。指定最終年度にあたる令和4年度には、これらの取組をますます盛んにするとともに、高校生国際会議や、大学講義の先取履修の実施に取り組みするとともに、指定終了後に向けてこれまでの検証とまとめをしていく必要があります。

これまでは、決められた問いに対して決められた方法で決められた答えに辿り着くまるでジグソーパズルを早く作るような習得的な学びが主流でした。しかし、今は、自分なりの問いに自分なりのやり方で取り組み、自分なりの答えに新たな価値を見出す、いわばレゴを作るような学びに変わってきています。本県においても、幼稚園・保育園の段階から高校の段階まで、「探究」を中軸とした学びの改革に取り組んでいるところです。本事業の成果を広く県内に共有し、22世紀を目指して生きていく生徒たちが探究する力を身につけ、未来を切り拓くことができるよう、引き続き研究開発を進めてまいります。

最後になりましたが、学校関係者の皆様をはじめ、運営指導委員の皆様、評価委員の皆様、連携先の皆様には、日頃より、本事業に御理解・御協力をいただき感謝申し上げます。引き続き御指導くださいますようお願い申し上げます。

困難な時代の中で可能性を求めて

長野県上田高等学校長 北澤 潔

本校は、平成 26 年度の S G H（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイト校、27 年度から令和元年度までの S G H 事業指定校としての 6 年間、グローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的教養を身に付けることを目的とした学びを、長野県の先頭を走る気概をもって推進してまいりました。

そして、これまでの取組の成果を基礎として、本校における取組の継続と発展、県内各校において学びのスタンダードとなってきた「探究的な学び」をネットワーク化する必要性を踏まえ、令和 2 年度、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校に申請し、指定に至ったわけです。

本校は、S G H としてグローバル人材育成に係る県内における重要な拠点としての役割を果たし、21 世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきました。この成果をベースとして、「『いのち』を拠点に、統合的・全体的アプローチによって S D G s を探究する」A L ネットワークの構築を、管理機関である長野県教育委員会、共同実施校である松本県ヶ丘高等学校、さらに県内 15 の連携校（指定当初は 9 校）等とともに進めていこうとスタートをきりました。

しかし、令和元年度末からの新型コロナウイルス感染症による教育活動への影響は、当初想像した以上に大きく、また長期に及んでいます。当初の計画通りに諸企画を推進することが困難な状況ではありますが、6 月 12 日の「北陸新幹線サミット」は参集とオンラインのハイブリッドで開催いたしました。9 月の 2 学年の「探究の日」、1 学年の県内 F W、11 月の 2 学年の台湾高級中学とのオンライン交流（台湾研修旅行の代替企画）、2 月の G S（グローバルスタディ）報告会などは、オンラインで開催いたしました。中止するのではなく、可能な方法を模索して実施する、というのが現在のスタンスであるように思います。リアルに勝るものはないとはいえるものの、オンラインであれば、このような状況下ではあっても、国内・国外の高校生、大学生、大人と簡単に会議を行い、また交流することができます。生徒及び教員のスキルもここ 2 年で飛躍的に向上しています。オンラインの併用という手法は、今後も効果的に活用していくことが必要といえるかもしれません。令和 4 年 6 月に開催予定の「高校生国際会議」もその方向で検討しています。オンラインの積極的活用は、新型コロナが生み出したプラスの副産物といえるでしょう。

3 年目の令和 4 年度に向けて、事業のさらなる推進に努めていきたいと思っております。

期間	ふりがな	ながのけんきょういくいんかい	都道府県番号
令和2年度 ～	管理機関	長野県教育委員会	長野県
令和4年度	ふりがな	ながのけんうえだこうとうがっこう	20
	事業拠点校	長野県上田高等学校	

**令和3年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
構想計画書（概要）**

構想名（30字程度以内）

「SDGs未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

構想概要（400字以内）*テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを3年後までにWWLコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてこれまでグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成をめざす。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名		
管理機関		長野県教育委員会						原山 隆一		
		長野県上田高等学校 (公立)						北澤 潔		
事業拠点校		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模			
	対象:	全日制普通科	320	320	320	960	960			
						0				
対象外:					0					
事業共同実施校	①	長野県松本県ヶ丘高等学校 (公立)						杉村 修一		
			学科・コース名	1年	2年	3年	計			学校規模
		対象:	自然探究科・国際探究科・英語科	81	80	39	200			953
			普通科	241	234	278	753			
対象外:					0					
事業協働機関 (国内外の大学、企業、 国際機関等)	①	(株)KDDI						松野 茂樹		
	②	一般財団法人日本国際協力センター(JICE)						山野 幸子		
	③	台湾高雄市政府教育局						王 進焱		
	④	ミネルバ大学						杉本 亜美奈		
	⑤	長野県知事部局各課						阿部 守一		
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	長野県長野高等学校 (公立)						宮本 隆		
	②	長野県篠ノ井高等学校 (公立)						小金 典子		
	③	長野県屋代高等学校 (公立)						高澤 邦明		
	④	長野県上田染谷丘高等学校 (公立)						石川 裕之		
	⑤	長野県野沢北高等学校 (公立)						山崎 裕史		
	⑥	長野県伊那北高等学校 (公立)						埋橋 浩		
	⑦	長野県飯田高等学校 (公立)						齊藤 則章		
	⑧	長野県松本深志高等学校 (公立)						塩野 英雄		
	⑨	長野県長野西高等学校 (公立)						小松 容		
	⑩	長野県須坂高等学校 (公立)						本多 健一		
	⑪	長野県伊那弥生ヶ丘高等学校 (公立)						松村 明		

【別紙様式4-1】

⑫	長野県諏訪二葉高等学校	(公立)	浅井 秀俊
⑬	長野県諏訪清陵高等学校	(公立)	小口 雄策
⑭	長野県飯田風越高等学校	(公立)	新津 志保美
⑮	長野日本大学高等学校	(私立)	添谷 芳久
⑯	延平高級中学	(私立)	張 漢鏞
⑰	苗栗高級中学	(国立)	劉 瑞圓
⑱	新竹女子高級中学	(国立)	呂 淑美
⑲	科学工業園区実験高級中学	(国立)	李 健維

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長

住所 長野県長野市南長野幅下 692-2

管理機関名 長野県教育委員会

代表者名 教育長 原山 隆一

1 事業の実施期間

契約締結日～令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 長野県上田高等学校

学校長名 北澤 潔

3 構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版AL ネットワーク

4 構想の概要

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版AL ネットワークを実施3年間でWWL コンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてこれまでグローバル人材育成にかかわる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』AL ネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成をめざす。

5 令和3年度の構想計画

Ⅱ AL ネットワークの形成

1 組織強化・拡充

- (1) 令和2年度に形成したAL ネットワーク（拠点校、共同実施校、連携校、連携先、大学等）の連携を更に強める。
- (2) 2校（須坂高校、伊那弥生ヶ丘高校）が新たに連携校に参加、更にネットワークの拡充を図る。
- (3) 学校ごとに探究のためのプラットフォームの整備に着手する。
- (4) 運営指導委員会、検証委員会の実施。

2 情報共有体制の整備

- (1) 高等学校間での定期的な推進会議を継続して実施する。
- (2) ウェブサイトにてこまめな情報発信を行う。拠点校に続き、共同実施校にも本事業に係るウェブサイトを設置する。

3 修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた計画

- (1) 海外進学・留学ワークショップ

ア NPO 法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップの協力を得て、海外進学・留学講座を引き続き実施する。令和2年度はオンライン実施だったため、令和3年度は対面でも実施する。

イ HLAB OBUSE 等が企画するサマースクール等にAL ネットワーク（拠点校、共同実施校、連携校）生徒の参加を勧める。

(2) 「学びの指標」の試行の検証

令和3年度を全県共通質問を実施・活用する試行期間とし、生徒・教員の意識改革や学ぶ意欲の向上について検証を行う。

(3) グローバルな活躍をしている講師による講演会

拠点校・共同実施校でグローバルに活躍する講師や地域に住む外国人による講演会を引き続き実施。講演会はAL ネットワークの高校間で遠隔配信し、希望生徒の参加を可能とする。

(4) 生徒の自主活動の推進

共同実施校が主催する全県対象の生徒会交流会を引き続き実施。

(5) ポートフォリオの作成指導

引き続きコアリッションアプリケーションの研究を行う。

4 カリキュラムを研究開発する人材の配置

(1) カリキュラムアドバイザー

引き続き県教育委員会高校改革推進役の内堀繁利氏に依頼。AL ネットワーク会議等で助言をいただく。

(2) 海外交流アドバイザー

配置は初年度で終了となるが、海外研修が難しかったところから、令和2年度のアドバイザー（JICE、ICAN、松本空港国際化特別顧問）に引き続き講師として助言をいただく。

(3) グローバル（外国人）講師：拠点校に外国人講師を引き続き配置。日本人教師と協力してカリキュラム開発を継続。

(4) 事務職員：非常勤職員を拠点校に配置する。

5 テーマと関連した高校生国際会議の開催に向けた計画

(1) 国際会議実行委員会の立ち上げ

ア AL ネットワークの生徒による国際会議生徒実行委員会を立ち上げる。

イ 定期的に会議を持ち、テーマ設定、実施方法などに生徒のアイデアを取り入れて、最終年度に実施予定の高校生国際会議の形を作っていく。

ウ AL ネットワーク参加校のある各地域でミニ国際会議を実施して、テーマについて研究を深める。

(2) 北陸新幹線サミットの実施

ア 6月に拠点校で行っている北陸新幹線サミットを国際会議に向けて、外国の生徒や留学生が参加できる形に変えていく。

イ 生徒実行委員会が運営等に参画する機会を作る。

ウ SDGs 探究サポーター等連携機関がアドバイザーとして参加する機会を設ける。

(3) 海外連携先との交流

AL ネットワーク各校がすでに連携している海外の高校等とのつながりを活用し、オンライン等も用いて交流していく。

6 フォーラムや成果報告会等の実施に向けた計画

(1) 学習成果報告会・アカデミックプレゼンテーション

ア 2月に拠点校ですべての2年生生徒が課題研究の成果をポスターセッションの形式で発表する学習成果報告会を行う。令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で拠点校と共同実施校生徒の発表のみだったが、令和3年度はAL ネットワーク全体の成果報告の場とする。

イ 拠点校で引き続き年2回のアカデミックプレゼンテーションを実施。AL ネットワーク参加校にも配信し、意見交換を行う。

(2) 「高校生学びのフォーラム長野」

県教育委員会が主催する高校生学びのフォーラム長野（マイプロジェクト）にAL ネットワークからの積極的な参加を促し、探究的な学びを更に深める機会とする。

(3) 全国高校生フォーラム

拠点校、共同実施校だけでなく、連携校にも積極的な参加を呼びかける。

(4) 県のSDGsの取組と連携した高校生の探究・発表機会

「SDGs 未来都市」である本県の施策に関わって国内外での発表の機会の提供を依頼。

7 情報収集・提供等、その他の取組に関する計画

(1) 教員研修会

ア 令和2年に実施した「学びの指標」「探究的な学び」「探究学習の評価」「ルーブリック」の研修会に加え、「カリキュラムデザイン」などをテーマに教員向けの研修会を開催する。

イ 「学びの改革」フロンティアスピリッツ事業（教員の国内外での自主的な研修）

(2) 海外の高等学校との姉妹校提携

令和2年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で進んでいないが、海外の学校と協働のための姉妹校提携に向けて協議していく。

III 研究開発・実践

1 テーマとして設定するグローバルな社会課題

『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』

SDGs 探究サポートプラットフォームを活用し、外部機関とも協働しながら、SDGsを「いのち」という視点で探究する。

2 関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

(1) KDDI との連携による授業開発

令和2年に株式会社KDDIと県教育委員会が包括連携協定を締結。この連携を活用し、デザインシンキング授業等を継続的に実施する。

(2) 国際関連機関、学術機関、民間企業等でのフィールドワーク

拠点校が連携協定を結んでいる東京外国語大学を始め、JICAや佐久総合病院、県内外の大学など学術機関及び民間企業等で拠点校・共同実施校ともフィールドワークを行い、学びの深化を目指す。

(3) 教育現場の課題解決を目的とした海外大学の学生インターンシップ受入れ

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で受入れられなかったが、海外大学生のインターンシップ受入れに向けた協議を行う。

3 新たな教科・科目の設定(令和2年からの継続)

(1) 地球市民としての感性や価値観の養成を目的に、教科等横断的な学びの視点を取り入れた教科「グローバルスタディーズ」の開発を拠点校で継続するとともに、令和4年度の新教育課程の実施に向けた文理融合科目、CLIL等の研究を進める。

(2) AL ネットワークの生徒が参加できる仕組の構築。

◆1年次 「グローバルスタディⅠ」（1単位・学校設定科目）

探究的な学びを通して、協働性・可塑性や国際感覚などの汎用的な能力を養成する。個々のSDGsの課題の背景となる構造的で複雑な側面を教科等横断的な視点で探究する。県内のフィールドワークやJICAによる講演会を実施。

◆2年次 「グローバルスタディⅡ」（2単位・学校設定科目）

「グローバルスタディⅠ」で育んだ資質・能力の更なる養成を図る。1学年で取り組んだ課題を県外のフィールドワーク等を通じて更に深め、議論し、解決策を校内外で提言する。その際、課題の中にある対立・ジレンマに特に着眼しながら、全体性・統合性という視野の中で、否定性受容力の向上をはかる。ICT機器を駆使した調査やプレゼンテーションの技術を身につける。2単位のうち1単位を英語で行うことで発信力

の向上を図る。また、KDDI によるデザインシンキングの単元を設け、答えのない課題へのアプローチ方法を体験する。

- ◆新教育課程で実施予定の新科目「グローバルシチズンシップ」「デザインシンキング」「グローバルスタディⅢ」の導入に向けた研究・準備を行う。

4 カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

以下の海外研修については、渡航が不可能となった場合でも、なるべく同等の成果が得られるよう、オンラインでの代替プログラムについても同時に準備していく。

(1) 台湾研修旅行【海外研修】【拠点校・共同実施校】

総合的な探究の時間の一環として、2年次の秋に全員が台湾での研修を実施する。現地でのフィールドワーク、研修先での研究課題をテーマに英語による発表や討議を行う。

(2) 拠点校・共同実施校との海外研修の合同実施

拠点校・共同実施校が従来から、独自に実施してきた以下のプログラムについて、相互乗り入れを検討する。一般財団法人日本国際協力センター（JICE）の協力を得て、プログラムの充実をはかる。

- a ポストンスタディープログラム【短期留学・拠点校】
- b ヒューマン アクト イン マニラ【海外研修・拠点校】
- c カンボジア井戸プロジェクト【海外研修・拠点校】
- d ニュージーランド語学研修【短期留学・拠点校及び共同実施校】
- e マレーシア研修【海外研修・共同実施校】
- f ネパール研修【海外研修・オンラインとの併用・共同実施校】（新規）

共同実施校・松本県ケ丘高校のある松本市とネパール・カトマンズ市が姉妹都市であることから、市の総合戦略課国際交流担当者とも連携し、途上国の社会課題解決に取り組むPBL型海外研修を実施する。令和2年度にはオンライン研修で、現地のと結び、ネパールの社会課題解決策の提案を試みた。今後、渡航が可能になれば現地へ赴き、解決策の提案にとどまらず、実際に行動に移せるよう、探究活動を深める。

(3) 高校生海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」の活用

県が整備する留学プラットフォーム「信州つばさプロジェクト」、環境政策課による「信州環境カレッジ×信州つばさプロジェクト」（COP26 への高校生の参加）を活用。海外での探究活動を希望する生徒の支援。

5 バランスよく学ぶカリキュラムの編成

人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野の科目をバランスよく学ぶことのできるカリキュラムの研究。

6 工夫された学習活動の実施に向けた計画

(1) 県立高校「未来の学校」構築事業【管理機関】

県独自事業において、先進的・先端的な研究開発に5年間取り組む実践校6校に指定されている連携校の野沢北高等学校・松本深志高等学校・須坂高等学校の取組を共有していく。

(2) 連携校間での自由選択科目群の共同実施や教員の相互乗入計画

各校間で、遠隔通信を活用するなどして、自由選択科目の履修を可能にするシステムについて研究、調整。可能であれば、令和4年からの実施を目指す。

(3) 外部講師として民間の知見を活用し、より実践的な課題解決の方法を学ぶ

PBL 型の学びに協働機関から講師を招いたり、フィールドワークの受入を依頼し、実践的な学習ができる環境を整備する。

(4) 信州版AL ネットワークで育成する力の明確化

取組を通じて育成する力を明らかにし、ルーブリックを作成する。

7 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

(1) 県内大学による「高度な学び講座」の実施

県内大学等と連携し、高校では学べない学びの機会を提供する。

ア 「総合的な探究の時間」研修会と「主体性を育む夏合宿」

イ 高校生対象講座の開催（大学教員による特別講座など）

(2) 県内大学との先取履修の実施に向けた研究

長野県立大学との先取履修に係る研究を進めていく。また、松本県ケ丘高等学校探究科生徒が、信州大学松本キャンパスでの聴講あるいは科目等履修をカリキュラム内に設置できるかについて、大学側と研究協議を継続していく。

(3) より高度な内容を学びたい高校生のため拠点校・共同実施校の条件整備

JMOOCのようなオンライン講座のカリキュラム化について、拠点校で研究する。

8 留学生受入れのプラットフォーム

AL ネットワークで留学生を受け入れ可能家庭のリストを作成する。

IV 財政等支援

1 自己負担額の支出計画

事業名	内容	予算 (千円)
高校生海外留学支援事業 「信州つばさプロジェクト」	県内高校生の留学支援事業。「企業版ふるさと納税」（H31年3月内閣府認定）も活用し、県・民協働で高校生の主体的な留学を支援する。	34,791
高校生学びのフォーラム 長野	「探究的な学び」の成果を発表し合う場とし、「マイプロジェクト・サミット(仮)」地方大会として位置づけ、全国大会へ出場のチャンスを与える。拠点校・共同実施校の生徒の研究を全県に発表する機会となることを期待。	3,915
県立高校「未来の学校」構築事業	先進的・先端的な研究開発に概ね5年間取り組む実践校を指定。連携校との交流を推進。	6,334

2 人的又は財政的な支援、研修やセミナー等の実施に向けた計画

(1) グローバル講師の配置

授業の一部を単独で行う特別非常勤講師のALTを拠点校に配置する（県費負担）

(2) 教員の研修等への財政支援

a 「学びの改革」フロンティアスピリッツ事業

選考によって選ばれた教職員が国内外で研修する際の費用を一部負担する。

b 「海外での学び」推進事業「信州つばさプロジェクト」

県が企画する1週間程度の高校生短期留学プログラムの引率に、今後活躍が期待される若手教員を充て、教員のスキルアップの研修機会ともなるよう設定する。

<添付資料>

- ・令和3年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
AL ネットワーク組織強化	学びの改革支援課	宮下美和
情報共有体制	学び・上田・県ケ丘	宮下・市川・徳永
海外進学講座	学びの改革支援課	宮下美和
学びの指標	学びの改革支援課	小山田佳代
グローバル講演会	上田・県ケ丘	白鳥敏秀・羽賀規真
生徒の自主活動の推進	松本県ケ丘高校	宮下達郎
ポートフォリオ作成指導	上田高校	高野芙美

人的配置	学びの改革支援課・上田	宮下美和・高野芙美
海外高校との連携	上田・県ヶ丘	高野芙美・羽賀規真
国際会議生徒実行委員会	学びの改革支援課	宮下美和
北陸新幹線サミット	上田高校	松田大輝
成果発表会	学び・上田・県ヶ丘	宮下美和・白鳥敏秀・近藤慎
学びのフォーラム長野	学びの改革支援課	宮澤美郷
全国高校生フォーラム	学び・上田・県ヶ丘	宮下美和・白鳥敏秀・近藤慎
SDGs 探究発表(外部)	学びの改革支援課	宮下美和
先進的なカリキュラム開発	上田高校	市川格・高野芙美・小林まゆ子
新たな教科・科目	上田高校	市川格・高野芙美・小林まゆ子
海外研修	上田・県ヶ丘	白鳥敏秀・羽賀規真
カリキュラム編成	上田高校	市川格
未来の学校	学びの改革支援課	前山和志
工夫された学習活動	学びの改革支援課	宮下美和
A P	学びの改革支援課	宮下美和
留学生受入れの体制整備	学びの改革支援課	宮下美和

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ALネットワーク組織強化	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
情報共有体制	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外進学講座			→						→			
学びの指標	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
グローバル講演会		→					→				→	
生徒の自主活動推進	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
ポートフォリオ作成指導	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
人的配置	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外高校との連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
国際会議実行委員会		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
新幹線サミット	→	→	→									
成果発表会			→				→				→	
学びのフォーラム長野	→	→	→	→	→	→	→	→	→			
全国高校生フォーラム							→	→	→			
先進的なカリキュラム開発	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
新たな教科・科目	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
海外研修									→			→
カリキュラム編成	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
未来の学校	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
工夫された学習活動	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
A P	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
留学生受入れ体制整備	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

8 再委託先の有無 無

9 所要経費

別添のとおり

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	TEL	026-235-7435
氏名	宮下美和	FAX	026-235-7495
職名	主任指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

長野県で育成する
イノベーターな
グローバル人材に
求められる資質・能力

「SDGs 未来都市長野」から世界へつながる信州版 AL ネットワーク

- 混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる資質・能力
- 社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力
- 信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力

信州学びの改革 アドバンス・ラーニング・ネットワーク

長野県教育委員会

探究的な学び・STEAM カリキュラム開発

海外留学・高校生国際会議

高大連携・AP 構築

企業等との連携

信州 SDGs

◆ 拠点校

長野県上田高等学校

◆ 共同実施校

長野県松本県ヶ丘高等学校

「私のプロジェクト」発表大会



リニア中央新幹線

GO! for 2030



- ◆ 地球市民としての完成や価値観の養成を目的とした新教科「GS(グローバルスタディ)」「デザイン・シンキング」
- ◆ 文理融合科目、CLIL による編成



- ◆ ミネルバ大学・高雄市政府教育局との連携
- ◆ フィリピン、ボストン等海外研修実施
- ◆ 留学フェローシップ「海外大学進学講座」
- ◆ 留学生受け入れプラットフォーム整備



- ◆ 長野県高大連携プラットフォームとの連携
- ◆ 長野県内大学との単位先取履修の研究
- ◆ JMOOC 等オンライン講座のカリキュラム化



- ◆ 株式会社 KDDI と連携した STEAM 授業開発
- ◆ JICE による海外交流アドバイス
- ◆ JICA 等国際関連機関、学術機関、民間企業でのフィールドワーク



- ◆ 「SDGs 未来都市」県の事業との連携
- ◆ 「信州SDGsプラットフォーム」との連携
- ◆ 地方創生応援税制(企業版ふるさと納税)で留学「信州つばさプロジェクト」の推進

すでに長野県にある“学びのプラットフォーム”を再構築し、イノベーターなグローバル・リーダーに必要な資質・能力の育成をめざす



高校生に高度な学びを提供する
持続可能かつ進化し続ける信州版 AL ネットワークの構築

事業完了報告書

1 事業の実施期間

令和3年4月1日（契約締結日）～令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 長野県上田高等学校

学校長名 北澤 潔

3 構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

4 構想の概要

長野県では、従来から WWL コンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベーティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを3年後までに WWL コンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH 校としてグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない学びの機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成を目指す。

5 教育課程の特例の活用の有無：有（拠点校）

1年次 世界史A（2単位）現代社会（2単位）

→GSI（グローバルスタディーズⅠ）（1単位）IR（国際関係論）（3単位）

2年次 社会と情報（2単位）→GSⅡ（グローバルスタディーズⅡ）（2単位）

6 管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
実施体制の整備	ALネットワーク会議		第1回	第2回		第3回		第4回	第5回			第6回	
	運営指導委員会		→	第1回			→	第2回			→	第3回	
	情報共有体制	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	新しい評価（学びの指標）	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	未来の学校	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
人的配置	カリキュラムアドバイザー	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	G講師	通年	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
	事務職員										→	→	→

グローバルな学びに係る取組	海外進学・留学講座				海外進学・留学講座	信州グローバルセミナー					海外進学・留学講座		
	グローバル講演会									第1回			第2、3回
	海外研修代替プログラム支援							→		→	→	→	→
より深い学び(探究)に係る取組	成果発表会			アカデミックプレゼンテーション					アカデミックプレゼンテーション			成果報告会	
	マイプロ長野県Summit				StartUp&BrushUpプログラム				中間報告会		Summit		
	全国高校生フォーラム							→	→	フォーラム			
高度な学びに係る取組	大学との先取履修に向けた協議	県立大打合せ	県立大打合せ	高等教育コンソーシアム					県立大打合せ			信州大・県立大打合せ	
	講演会												第1回 第2回
高校生国際会議に向けた取組	国際会議実行委員会							募集	第1回	第2回		第3回	第4回
	北陸新幹線サミット	→	→	サミット									

(2) 実績の説明

ア 実施体制の整備

(ア) 組織的な研究開発・実践に取り組む体制の整備状況

- ・連携校が令和2年度より6校増加。計17校のALネットワークとなった。
- ・拠点校では、教頭やグローバル講師(外国人講師)を含む10名のWWL推進係を組織した。

(イ) 情報共有体制の整備

- ・カリキュラム開発拠点校、共同実施校、連携校の担当者すべてのメーリングリストを作成し、直接情報提供ができる体制を整えた。

(ウ) 運営指導委員会の開催実績

- ・運営指導委員を令和2年度から引き続き6名に依頼し、令和3年6月21日、10月11日、令和4年2月5日に計3回の委員会を実施した。

運営指導委員(敬称略)

信州大学 教職支援センター 准教授 荒井 英治郎
ベネッセ教育総合研究所 主席研究員 小村 俊平
ライフイズテック株式会社 取締役 讃井 康智
東京インターナショナルスクール理事長 坪谷 ニュウエル 郁子
長野県立こども病院 感染症科部長 南 希成
公益財団法人国連大学協力会 常任理事兼事務局長 森 茜

(エ) 卒業生の卒業後の進路を追跡・把握する仕組み

高校生国際会議実行委員会のため、大学生サポーターをALネットワーク校の卒業生ネットワークを通じて募集。18名がサポーターとして活動している。

(オ) 留学生受け入れの状況

共同実施校の松本県ヶ丘高校及び連携校の長野西高校で、アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を受け入れている。

イ ALネットワークの形成

(ア) 運営組織の活動

- ・カリキュラム開発拠点校、共同実施校、カリキュラムアドバイザー、管理機関それぞれの担当で運営組織を作り、必要に応じて連絡会を行った。

(イ) 情報共有体制の整備

- ・AL ネットワークの高等学校間で定期的な会議や打合せを年間6回実施した。
- ・拠点校・管理機関の本事業に係るウェブサイトから随時情報発信を行った。

(ウ) 修了生の国内外へのトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた取組

① 海外進学ワークショップの実施

特定非営利活動法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップによる海外進学・留学講座を年間4回実施した。参加者は合計で94名であった。

② 「新しい学びの指標」の活用による進路選択への転換

信州版「新しい学びの指標」の試行期間として、理念を教員、生徒、保護者と共有し、全県共通質問を全ての県立高校で実施した。回答について対話により生徒にフィードバックするとともに、学校や教員へのフィードバックにも用いて、教育活動のさらなる充実、改善につなげた。

③ グローバルな活躍をしている講師による講演会

2月に運営指導委員の長野県立こども病院医師南希成氏によるオンライン講演会「小児科医として国境なき医師団に参加して」を実施した。8校から45名の教員・生徒がオンラインで参加し、国際医療支援の講演を拝聴し、講師と対話した。

④ 生徒の自主活動の推進～教科の学習以外の「個人的経験」を積む機会を保障

- ・共同実施校で「生徒会オンライン交流会」を実施した。令和2年度に引き続き、文化祭の運営をテーマに、松本県ヶ丘高校の生徒を中心に県内の生徒会役員とオンラインで結び、意見交換を行った。
- ・課題研究からアクションを起こす生徒が増加した。

(例) ・教室のDIY断熱工事

- ・市内の商業施設でのエシカル消費イベントの実施
- ・中学生への学習支援

(エ) カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

① カリキュラムアドバイザー

長野県教育委員会高校改革推進役の内堀繁利氏に依頼した。運営指導委員会やALネットワーク会議において、広い見地から助言を得た。

② 海外交流アドバイザー（拠点校で依頼）

海外に強いネットワークを持つ以下の2人に依頼。令和2年度はCOVID-19の影響で対面での交流を中止し、代替となるプログラムを実施した。

NPO法人 ICAN 代表 直井恵氏（フィリピン）

松本空港国際化特別顧問 恵崎良太郎氏（台湾）

③ グローバル講師

IB等の指導経験豊富な県直接雇用のALTをグローバル講師として拠点校に配置した。2年生のGS（グローバルスタディ）のうち1単位を中心になって指導にあたる。

④ 事務職員

拠点校にて、取組の評価、報告書作成等にあたる事務職員を雇用した。

(オ) テーマと関連した高校生国際会議

- ① 令和4年6月の高校生国際会議に向けて、令和3年10月から実行委員会を開催した。生徒実行委員会には、ALネットワークの7校から56名が参加した。月1回程度のオンライン実行委員会で、会議の計画を立案している。
- ② 上田高等学校で課題研究発表会「北陸新幹線サミット」をオンライン形式で実施した。令和4年度の高校生国際会議に向け、分科会の一つを英語使用分科会とし、海外高校生を招待して実施した。

期日	令和3年6月12日
テーマ	“いま”を生きる地球市民～変化に適応し持続可能な社会をつくるためのアクションプランとは～
分科会テーマ	I 環境 II まちづくり III いのち健康 IV Post-COVID-19 (IVのみ使用言語は英語)
助言者	I 吉村牧氏 (長野県環境部環境政策企画課 主任) II 西嶋光さん (Hometown Trip Japan 代表) III 中田覚子さん (佐久大学看護学部 講師) IV 藤原智子さん (長野県環境部環境政策課 主事)
参加校・高校生	県内高校 ALネットワーク6校 県外高校 (3校) 国外高校生 (米・台湾・豪・仏)

(カ) フォーラムや成果報告会等の実施

①学習成果報告会

<拠点校>

2月に拠点校で学習成果報告会を実施した。生徒全員が在宅でオンライン参加とし、午前中は2年生全員が1年生に対して2年間の課題探究の成果を発表した。「国際/人権/文化/地域/ビジネス/保健/教育/技術/環境」の9つのカテゴリー、30のブレイクアウトルームに分かれ、ポスターセッションを行った。

午後は拠点校についての課題を挙げ、その本質を見極めて自分たちができることを考えるというワークショップや、英語のみの発表及びディスカッションの分科会を実施した。第3回の運営指導委員会を同日開催し、運営指導委員や、ALネットワークの職員からも指導を受けた。

<共同実施校>

3月に「Kenryo Researchers Grand-Prix2021」として課題探究発表会を実施。地元の企業関係者にも審査を依頼し、直接講評をいただいた。

②アカデミックプレゼンテーション

4月と10月に拠点校でアカデミックプレゼンテーションを実施した。探究学習から発展した自主活動や、海外での学びについてプレゼンテーションを行った。コロナ禍でできることが限られる中、工夫した取組に対して活発な質問が出され、充実した議論が行われた。

第1回 4月17日(土)上田高校にて

テーマ「世界から、地域から、課題解決を考察する」

- 1) 「ニュージーランド留学体験」
- 2) 「ヒューマン アクト イン マニラ研修報告」
- 3) 「ボストンスタディプログラム研修報告」
- 4) 「発展途上国の現状と私たちにできること」

第2回 10月9日(土)上田高校にて

テーマ「世界から、地域から、課題解決を考察する
—多文化共生社会について考える—」

- 1) 「民話と演劇」
- 2) 「外国ルーツのこどものための日本語教室
希望—学習支援ボランティアに参加しませんか—」
- 3) 「上田市の外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ

③マイプロ長野県 Summit(高校生学びのフォーラム長野)

「探究的な学び」の成果を発表する場として設定した。AL ネットワーク校10校から19プロジェクトが参加した。

(キ) 情報収集・提供等、その他の取組

①探究 Frontiers 講習

- ・教員向けに「『探究』について探究する」研修を実施した。受講者が自ら研修テーマや研修内容を決め、グループ内外の様々な人との対話や協働を通して教育実践を行うことで、その過程で得た経験や新たな視点をもとに、これからのSTEAM教育や「教科等横断的な学び」などの「探究」のあり方について提案することを目指した。

②県環境政策課主催「国際学生ゼロカーボン会議」

- ・令和4年2月実施の会議についての情報をAL ネットワークに提供し、実行委員や学生プレゼンターとして高校生が参加した。

7 研究の実績

(1) 実施日程

業務項目 実施日程 (令和3年4月1日～令和4年3月31日)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①IR	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
②GSI	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③GSIⅡ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④GSIⅢ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑤フィールドワーク						→						
⑥台湾交流						→	→	→	→			
⑦問いの立て方		→				→						
⑧ワークショップ							→			→	→	
⑨GS報告会											→	
⑩アメリカ研修									→	→	→	→
⑪フィリピン研修										→	→	→
⑫カボネビア研修									→	→	→	→
⑬プレゼンテーション	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑭外国人講師	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑮留学促進				→							→	
⑯研究成果普及	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(2) 実績の説明

(ア) 「いのちをテーマに据えた SDGs 探究」

ア 授業内での取組

1年のGSIでSDGsについて学び、課題研究の際に関連づけてテーマを設定する。

イ JICA・ICAN 国際理解協力（「世界が100人の村だったら」）

1学年全員。クラスごとにワークショップを実施後、講義で世界の実状を学ぶ。クラスに1名、2年生がファシリテーターとして参加。10月9日。

ウ 1学年課題研究入門講座（対面）

各専門分野15名の講師を招聘、研究内容やその手法を伺う。10月28日。

(イ) 外部機関との連携

ア 外部との交流

- ・早稲田大学井上ゼミ×上田高校生クロストーク（6月28日～9月16日）
大学のゼミ活動を見学し、高校生の課題研究をプレゼンテーション
- ・金沢泉丘高校×上田高校 共同オンラインコミュニティ「MeETree」（通年）
2校の生徒に限定した匿名のネット掲示板。双方の生徒が自由に交流。

イ フィールドワークやワークショップ

フィールドワークを以下の形で代替して実施した。その他、同窓会と連携、2年生の課題研究テーマと同窓生の専門分野が重なる場合、双方をマッチングし、同窓生からオンラインやメールによるインタビューを行った。

1) 1学年県内フィールドワーク（9月15日）

- ・1年生8クラスが16コースに分かれ、それぞれ市内の企業・NPO法人から事前に頂いた課題について探究した内容についてプレゼンテーションを行った。

2) 2学年「探究の日」(9月14日～15日)

- ・首都圏フィールドワークに替えて、2日間実施。
- ・初日は全員が自宅から参加して、全員が課題研究についてグループで中間発表、協議。
- ・翌日午前は台湾高級中学とのオンライン交流に向け、グループでリサーチ。
- ・午後は2日間の内容をふまえ、情報の本質を見抜く力について講演会を実施。

3) ワークショップ

ア 断熱DIYワークショップ(12月19日)

- ・教室の断熱効果が低いことに課題意識を持つ生徒が中心になり、企画、実施。
- ・NPO法人等と連携、有志生徒16名が参加。
- ・自習室の壁に断熱材を入れ、化粧板を張り付けて二重窓を組み立て。
- ・作業途中にゼロ・カーボンに関する講義を実施。
- ・工事前後の室温変化調査や使用生徒へのアンケートを継続実施中。

イ JICE連携授業(2月14、15日)

- ・昨年度に続き、「内なる国際化」をテーマに全1年生にオンラインで実施。
- ・JICE職員の講義、現地連絡調整員(日本在住の外国人)による自己紹介・課題提起後、自分たちにできることについてグループワーク実施。

(ウ) 新たな教科・科目の設定

SGH指定期間から開発している以下の科目の充実を図った。

ア IR(国際関係論)[1年全員 3単位、学校設定科目]

- ・「世界史A」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、3単位で行った。
- ・地歴公民科の基礎知識を習得させグローバル課題の理解と考察を深めた。
- ・GSIと連携してグローバル課題についての背景まで含めた多角的な学習。

イ GSI(グローバルスタディⅠ)[1年全員 1単位、学校設定科目]

- ・「世界史A」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、1単位で行う。
- ・「IR」と「総合的な探究の時間」「英語」と科目横断・融合型授業を展開。
- ・課題研究の基礎となる学習。

ウ GSⅡ(グローバルスタディⅡ)[2年全員 2単位、学校設定科目]

- ・「社会と情報」2単位を学校設定科目とし再編成し実施。
- ・生徒個々の課題研究について、多角的に検討させ探究を深めた。
- ・共通の課題を持つ生徒同士がグループ学習を進めた。
- ・台湾オンライン交流やGS報告会を通して研究発表の実践的な取組を行った。

エ GSⅢ(グローバルスタディⅢ)[3年希望者 1単位、学校設定科目]

- ・選択者は増加単位分として、放課後や休日などを利用して調査研究を行う。
- ・実情に即した政策提言でその影響評価まで含めて研究を行った。
- ・「北陸新幹線サミット」(オンライン)を主催。6月12日開催。国内は9校、海外は4か国・地域から参加。他、各校教員、講師、管理機関職員等。
- ・他のWWL指定校が主催する発表会で取組の成果普及と共有を図った。

(エ) カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修

本年度の海外研修もすべてオンラインで実施となったが、代替プログラムには以

下の工夫を行った。

ア オンライン台湾交流プログラム（11月23日、12月8、9日）

- ・2学年全員計318人。台湾研修で行う現地の高級中学訪問に代え、両校がオンライン交流。数か月前に双方の紹介動画を送り合い事前学習。当日は折り紙体験・食文化・学校生活、コロナ対策などについて情報交換を実施した。
- ・交流校4校 国立科学工業園区実験高級中学、台北市立中正高級中学、国立苗栗高級中学、私立延平高級中学

イ ポストンスタディプログラム（12月7日～令和4年3月20日）

- ・世界最先端の知性に触れ、今後必要になる学びを理解する。オンラインで実施。
- ・グループでPBLに取り組み、探究成果を米ハーバード大の教授等に英語でプレゼンテーション、質疑応答、指導助言を受けた。12月～基礎研修、3月17～20日に現地とのセッション。拠点校生徒12名参加。

ウ ヒューマン・アクト・イン・マニラ（令和4年1月31日～3月20日）

- ・NPO法人アイキャンが行う支援活動を学ぶ体験プログラム。オンラインで実施。
- ・2月14日に海外交流アドバイザーによる事前学習、3月17～20日に現地とのセッション。拠点校9名、連携校2校から6名、計15名参加。

エ カンボジア井戸プロジェクト（通年）

- ・現地に渡航し井戸を掘って寄付する体験プログラムで、生徒の自主活動が発展。
- ・運営は生徒中心で、毎年度4月に組織が発足、3月に解散。
- ・2019年度に、井戸2基分の資金を集めた。2019年度以降、実際の渡航はできていないが、資金集め（バザーや書き損じ葉書集め等）や広報を継続。

オ 香港の中等教育学校とオンライン交流（6月23、29日）

- ・1年生1クラスが、慕光英文書院生徒30名とオンラインで交流。両校の紹介プレゼンテーションや、生徒による広東語と日本語の会話講座を実施した。

カ ネパール オンライン スタディツアー（12月11日～2月5日）

- ・ネパール・カトマンズ市（松本市の姉妹都市）とオンラインで結び、ネパールの課題解決に取り組むPBLプログラムを実施した。
- ・地元でネパールの教育支援に携わる市川博美先生（グローバル教育支援センター）、国際NGOプラン・インターナショナル、JICA駒ヶ根と連携して事前学習を実施した。
- ・2月5日にはネパールの人々へのインタビュー等を行い、課題発見・解決のプロセスを学んだ。カトマンズ市の高校生ともオンラインで交流した。
- ・連携校の諏訪二葉高校から1名、屋代高校から2名の生徒が参加した。

(オ) 各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成

ア KDDI との連携による授業開発

- ・デザインシンキング 2年生
昨年度、KDDI 講師で実施した内容を、担当教諭が実施
- ・「課題研究テーマの見つけ方」 1年生
5月6日 進路を考える第一歩として、自分が興味を持つ「ワクワク」を探す。
9月27日 課題研究テーマの見つけ方

題研究の問いの立て方の陥りがちな例と、分解することで解決につなげていくことを演習および講義で提案。

イ 令和4年度からの教育課程の編成

これまでの教育課程を見直し、新科目グローバルシチズンシップ、GSⅢを全員必修科目とする。

(カ) 高大連携による大学教育の先取履修を可能とする取組

長野県立大学との協議を令和2年度から継続して行い、令和4年度の集中講座「コミュニティデザイン」に高校生の参加が可能になった。また、令和4年度秋から、信州大学での受け入れを目指して協議を行っている。

(キ) より高度な内容を学びたい学習環境の整備

- ・高校で扱う以上の内容を学べる特別講座の実施。

第1回 ミネルバ大学生 清水悠太郎氏「ミネルバ式思考法～バイアスと内省」

第2回 ライフイズテック株式会社 讃井康智氏「2040年から逆算した今の中高生の可能性」

- ・JIBUN 発旅するラボ

所属する高校の枠を超え、参加する他の高校生だけでなく、企業経営者や学生等年長の他者との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究（探求）を通して、自分が何者であり、何を実現したいのかを明らかにする。

8 目標の進捗状況、成果

目標の進捗状況については、コロナ禍で特に海外研修は計画した通りのプログラムの実施はできなかったが、オンラインを活用するなどして、代替のプログラムを実施し、本年度の目標はほぼ達成された。他は予定通りの進捗の状況である。

拠点校では、学習の成果を以下のような機会に発表し、共有を図った。

ア 新入生 WWL ガイダンス 4月7日

- ・上級生が、自らの探究成果を1年生にプレゼンテーション。1年生は、今後の学習イメージを持つ。

イ アカデミックプレゼンテーション [各学年希望者及び関係者] 校内開催

- ・第1回 4月17日 ・第2回 10月9日

ウ 上田市長に課題研究についてプレゼンテーション (8月27日)

- ・上田市役所にて3年生1名が実施。
- ・外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリの開発について発表。

エ 金沢大学附属高校主催高校生国際会議 (8月6日)

- ・2年生4名参加し、うち、1名が午前中に発表。
- ・午後の分科会では英語でディスカッションを実施。国内10校、海外1校参加。

オ Learn by Creation プレーヤーズコネクト2021 (オンライン) (12月18、19日)

- ・Learn by Creation Nagano 主催。テーマ「違いを味わう特色ある学び」
- ・地域と連携した探究的な学びの事例紹介。本校3名出演、県内外4校参加。

カ 文化祭 WWL 企画 (生徒が探究活動を発表) (7月3日)

- ・カンボジア井戸、エシカル消費、フードバンク、御代田子ども食堂、外国ルーツの子どもたちへの学習支援、国際問題研究班の6つが発表。

- ・卒業生が助言者でオンライン参加。生徒がバザー、フェアトレード商品販売。
- キ 共同実施校主催「まつもと高校生国際会議」（8月19日）
 - ・テーマ「多文化共生」。共同実施校主催、2年生2名が参加、発表。
 - ・両校で探究内容が共通するので、意見交換、互いの現状や課題を認識。
- ク 課題研究合同発表会（STUDENT WORKSHOP）（令和3年3月5日）
 - ・青山学院大学地球社会共生学部 GSC 学生連合主催、佼成学園女子中学高等学校、同連合、本校の3校で実施。1、2年生11名参加
- ケ WWL・SGH×探究甲子園（関西学院大学等主催）（11月応募）
 - ・拠点校から2年生が応募
- コ JIBUN 発 旅するラボ（5月29日～令和4年3月12日）
 - ・経営者の話を伺い、対話をとおして問いを深める。1年生1名参加。
- サ 長野県環境学生コミュニティ（6月12日～通年）
 - ・長野県環境部環境政策課主催。1年生6名参加。
- シ 「こんにちは県議会です」（12月2日）
 - ・県議との意見交換。ICT教育の進め方等についてなど。2年生2名参加。
- ス エシカル甲子園（11月書類審査）
 - ・地元商業施設で行ったエシカル消費イベントの取組を1、2年生3名で応募。
- セ ゼロカーボンシンポジウム in 信州上田（1月7日）
 - ・校内のゼロカーボンにつながる取組の発表やパネルディスカッション。
- ソ 第1回国際学生ゼロカーボン会議（1年生1名）（2月22日）
 - ・12月に実施した断熱DIYワークショップの内容、その後の展開について発表。

9 次年度以降の課題及び改善点

- ・大学の講義の先取履修については、具体的な履修の方法、単位習得について等引き続き協議していく。
- ・令和4年6月に実施する高校生国際会議の企画・運営を、生徒実行委員会を中心に進める。
- ・AL ネットワークの各学校の取組を共有し、協働していくことには、地理的な条件や、日程が異なることなどの課題がある。さらに連携を密にして、オンラインやオンデマンド配信を活用することも視野に生徒同士、教員同士が繋がる機会を作っていく。
- ・次年度が指定の最終年度になることから、継続していくプログラム等を精選し、指定終了後の自走に向けた準備を進める。
- ・COVID-19の影響で引き続き海外研修を実施することが困難であることが予想されるので、同様の成果が見込まれる代替プログラムも引き続き検討していく。
- ・新学習指導要領に対応したGSⅡ、GSⅢの新しいシラバス作成。

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	T E L	026-235-7435
氏 名	宮下 美和	F A X	026-235-7495
職 名	主任指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

管理機関の取組

AL ネットワークの構築

○組織作り

1 高等学校間のネットワーク

カリキュラム開発拠点校	長野県上田高等学校	
共同実施校	長野県松本県ヶ丘高等学校	
連携校	長野県須坂高等学校	長野県長野高等学校
	長野県長野西高等学校	長野県篠ノ井高等学校
	長野県屋代高等学校	長野県上田染谷丘高等学校
	長野県野沢北高等学校	長野県諏訪清陵高等学校
	長野県諏訪二葉高等学校	長野県伊那北高等学校
	長野県伊那弥生ヶ丘高等学校	長野県飯田高等学校
	長野県飯田風越高等学校	長野県松本深志高等学校
	長野日本大学高等学校	

指定初年度より、連携校が6校増加し、17校となった。特色学科を置く学校、SSHや地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定校、長野県「未来の学校」構築事業実践校などの県の研究指定校が多く参加しており、それぞれの特色をALネットワークに共有していく。

ネットワーク校の連携強化のため、連絡会議を2か月に1回程度実施した。

第1回	5月11日（オンライン）	新規参加校紹介、担当者顔合わせ、情報交換
第2回	6月21日（オンライン）	第1回運営指導委員会終了後 連絡会
第3回	8月30日（オンライン）	高校生国際会議実行委員会、SDGs、諸プログラムについて
第4回	10月11日（参集）	第2回運営指導委員会終了後 連絡会
第5回	11月29日（オンライン）	新規参加校紹介、国際会議実行委員会募集の報告
第6回	2月5日（オンライン）	第3回運営指導委員会終了後 連絡会

2 運営指導委員会

(1) 運営指導委員（令和2年度から継続）

(座長)	小村 俊平	ベネッセ教育研究所	主席研究員
(副座長)	荒井英治郎	信州大学教職支援センター	准教授
	讃井 康智	ライフイズテック株式会社	取締役
	坪谷ニューエル郁子	東京インターナショナルスクール	理事長
	南 希成	長野県立こども病院感染症科	部長
	森 茜	公益財団法人国連大学協力会	常務理事兼事務局長

(2) 第1回委員会

期 日 令和3年（2021年）6月21日（月）14:00～16:00

実施方法 オンライン

内 容 取組報告

生徒を交えた意見交換・委員と教員の意見交換

(3) 第2回委員会

期 日 令和3年(2021年)10月11日(月)14:00~16:45
場 所 松本県ケ丘高等学校
内 容 事業の進捗報告
討議(国際会議、取組についてなど)
授業参観

(4) 第3回委員会

期 日 令和4年(2022年)2月5日(土)13:00~16:00
場 所 オンライン
内 容 事業の進捗報告
授業参観
意見交換

県立高校「未来の学校」構築事業との連携

1 目的

県教育委員会「高校改革～夢に挑戦する学び～」実施方針に基づき、「未来の学校」として先進的・先端的な研究開発に取り組む6種別の実践校を指定することにより、県高校教育をけん引する新たな学びの場、学びの仕組みを構築する。

2 事業内容

令和元年度は研究校を指定し、有識者であるアドバイザーの指導・助言・協働により研究開発計画を策定した。この計画を具体的に実践する実践校は、令和2年度以降、概ね5年間研究開発に取り組み、検証・評価を行いながら成果の普及に努める。

3 WWL との連携の状況

AL ネットワークには、「未来の学校」実践校の須坂高校、野沢北高校、飯田風越高校、松本深志高校が参加している。これら4校の先進的な取組をAL ネットワークの連絡会などで報告し、他校と共有する。令和4年1月31日に実施した「未来の学校」構築事業の成果報告会には、実践校以外からも多くの学校が参加し、参加者からは、「教科の取組だけではできないことで、改めて総合的な学び、異年齢の人たちと協働した学びの機会の大切さを感じた。」「学校目標を軸に活動が精選されていくと、シンプルで実効性の高い実証になると感じた。」「ルーブリックを用いて、生徒自身が目指す目標をはっきりさせることが、学習意欲の向上に重要になると感じた。」などの感想が寄せられた。

「未来の学校」種別	構想及び目標(令和元年3月策定)
卓越した探究的な学びを推進する高校 (スーパー探究校) ＜野沢北高校＞	佐久市内外の病院や企業、大学等と連携し、それぞれの分野の最先端を学びながら、地域や社会の課題解決につながる卓越した探究活動を行い、「広い知識と教養及び未来を担う自覚」「論理的思考力と主体的課題解決能力」等を備えた、地域や日本、世界で活躍し未来社会の核となる人を育成
信州に根ざしたグローバルな学びを推進する高校 (信州グローバルハイスクール) ＜須坂高校＞	「地域の知と創造の拠点～大学のないまちの大学のような高校Super Academic High school (SAH)」を目指し、須坂市や国内外の大学等と連携して、世界と地域を関連づけた教科横断的な課題解決型学習や実践的英語学習を行い、グローバルな視野をもちながら地域や社会に貢献できるリーダーを育成
国際的な教育プログラムを研究する高校 (国際教育プログラム研究校) ＜飯田風越高校＞	リニア新時代を迎え、地域に根ざしたアイデンティティとグローバルな視野をもって、地域や世界の未来を創造できる人を育成するために、国際的な教育プログラムの長所を活かした独自のカリキュラムや指導・評価法を開発するとともに、他校にも開かれた海外大学進学プログラムを構築
高度な産業教育を推進する高校 (高度産業教育推進校) ＜木曾青峰高校＞	「高校での学び(地元への愛着を深め、自己の生き方をデザインし、木の新たな価値を見出す力等を育む)」と「卒業後の学び」を結びつけ、地元企業や上級学校等と一貫した教育プログラムを構築し、高度な技能・技術と創造性、経営者感覚を備えた、地域の未来を担う産業人を育成
少人数学級を研究する高校 (少人数学級研究校) ＜坂城高校＞	自らキャリアをデザインし、地域社会に主体的に貢献できる人を育成するために、多様な生徒に対応できる「個別最適化学習」や「地域連携型探究活動」等を取り入れた少人数学級のあり方と、教員の指導力を最大限に活かす学校運営のあり方を研究
自治の追求により骨太のリーダーを育成する高校 (骨太リーダー育成校) ＜松本深志高校＞	校是としての“自治”を問い続け、その理想をすべての場面で追求・具現化することにより、高い志や使命感、未解決の課題への挑戦心、学問的真理を追求する意欲等の資質・能力を身につけ、他者と協働して新たな価値や社会を創造できる骨太のリーダーを育成

実践校の取組例

スーパー探究（野沢北）

- ◆地元企業や病院、大学等と日常的に連携し、リアルな地域・社会課題解決に繋がる探究の実践
- ◆持続可能な体制に向けたコンソーシアム構築、コラーニングスペースの整備

信州グローバルハイスクール（須坂）

- ◆外国人講師の集中講座・ワークショップ、国内外で活躍する日本人との対話等を通して英語力+グローバルな視点育成
- ◆哲学対話により、合意形成や問題解決プロセス等を探究活動に活用

国際教育プログラム研究（飯田風越）

- ◆全国の特徴ある国際的な教育プログラムを参考に、全ての教育活動でディプロマポリシーに基づいた指導・評価法へ
- ◆現役海外大学生を含む講師による海外大学進学講座の実施（他校へ開放）

高度産業教育推進（木曾青峰）

- ◆哲学・環境（SDGs）・地域理解×デザイン教育の導入
- ◆地元企業や上級学校との一貫した教育プログラムを研究開発。その実現に向けたコンソーシアム構築

少人数学級研究（坂城）

- ◆1人1台端末やEdTechを活用した個別最適な学び、大学生メンターを活用した探究活動等の取組と少人数学級を組み合わせることによる効果検証
- ◆少人数に伴う学校組織の見直し・改善

骨太リーダー育成（松本深志）

- ◆多様な分野からなる信大連携ゼミ、教員企画の教養ゼミを中心とした課題探究
- ◆生徒主体の部活動運営等、生徒が学校づくりに参画。大学研究者との自治に関する研究（生徒の自治力の向上）



実践校6校の研究開発計画概要図は、県教育委員会のHPに掲載

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/gakko/saihen/joho/documents/200324-mirai-gaiyouzu6.pdf>

○新しい評価

新しい「学びの指標」試行期間の実施内容

1 各校における実施内容

(1) 考え方（理念）等の共有〔通年、特に年度当初〕

① 教員との共有

「学びの指標」を有効に活用するために、校内全体で「学びの指標」の目指すもの、考え方（理念）について共通理解を図ることによって、学校全体が同一歩調で進めていく。

○一人ひとりの存在、個性を大切にしながら、学校を活力のある、すべての生徒にとって居心地のいい空間にするために、熟議等を通じてまずは教員が考え方（理念）を理解・共有し、活用できるようにする。

② 生徒・保護者等との共有

生徒が、他者との比較ではなく、自分自身の過去と現在を見つめ、現在の自己を認識する大切な機会であるため、生徒と考え方（理念）を丁寧に共有することによって、生徒の自己認識の深まりにつなげる。

○事前に教員から生徒に対して「学びの指標」について丁寧に説明し、考え方（理念）を共有する。

○保護者等とも考え方（理念）を共有し、学校と家庭が一体となって、子どもたちを支える体制を作る。

(2) 全県共通質問の実施

〔9月及び2月〕

全県共通質問の集約結果の提出時期を踏まえ、各校が実施時期、実施方法を設定。

(3) 全県共通質問実施後の活用

〔実施後～随時〕

① 対話等を通じた「生徒へのフィードバック」

○生徒の回答、特に「理由」の記述に着目する。

【全県共通質問】

〈質問内容〉

- 自分なりの価値観や考え方をもっている
- これから先、どのように生きていきたいかを考えている
- 自分にはよいところがあると思う

〈生徒回答内容〉

- ①選択肢 1：そう思う 2：どちらかといえばそう思う
3：どちらかといえばそう思わない 4：そう思わない
5：回答できない・回答したくない

②選択した理由

○面談や日常の対話など（必ずしもクラス担任でなくてよい）を通じて、まずは生徒の自己認識を尊重し、その認識に寄り添い、さらに、生徒の変容・成長を受け止め、支える対話や声掛けを大切に
する。

○現状を否定的に捉えた話し方や、一定の方向に誘導する、価値観を押し付ける等の指導は避ける。

② 「学校・教員の教育活動へのフィードバック」

○職員会や学年会等を通じて、自校の教育内容や学校教育目標（「スクールポリシー」）等の検証に
用いるなど各校が工夫することで、教育活動のさらなる充実・改善につなげる。

○教員個々の指導の振り返りに活用する。

(4) 全県共通質問の集約結果の提出

① 提出時期 2月下旬

② 提出内容 1回目と2回目の回答パターンごとの人数と代表的な理由記述

③ 提出用ファイルの形式 Excel シート

(5) 学校独自質問の検討・設定〔通年・可能であれば〕

○学校が、生徒等とともに検討しながら設定する

○学校が生徒とともに設定した複数の質問の中から、さらに生徒が選択する

○生徒が自分で設定する

(6) 検証〔通年〕

より効果的な実施・活用に向けて各校が行う検証内容の具体例

○考え方（理念）の共有の方法、その理解の浸透度

○全県共通質問に係る、質問内容、実施方法、活用方法

○学校独自質問の設定方法

○「学びの指標」のしくみ全体に対する改善点

○「学びの指標」の活用全体に係る教育的効果や課題 等

2 本課での検討・検証事項

(1) 実施状況の分析・情報共有

(2) 取組の好事例について全県へ情報提供

(3) 「学びの指標」全県共通質問の内容の妥当性の検証

(4) 対話の場の継続（考え方（理念）の共有と意見聴取と意見交換）

(5) 全県共通質問回答状況の分析・検証

I 文理融合のカリキュラム開発

信州グローバルセミナー（小布施サマースクール）

1 目的

(1) 世界を身近に感じ、地域に根差しつつ世界を視野に入れた生き方を体験し、自分の将来がより
開かれたものであると知ること、多様な生き方を考える機会を設ける。

(2) 自分が普段生活している地域社会の中に自ら飛び込み、世界を視野に入れた視点と、自らの生
活を結びつけることで、グローバルな視点から進路選択ができる人を育成する。

(3) 長野県教育委員会が主催者となり、小布施町教育委員会及び一般社団法人 HLAB の協力のもと
夏休みを有効活用する体験的な学びとして、レジデンシャル・エデュケーション（寮のような共
同生活をとおしての体験的な教育活動）を実施し、しなやかでたくましいマインドを育て、将来
長野県をリードしていく人へと導く。

2 実施内容

文部科学省委託事業「地域における青少年の国際交流推進事業」により、長野県にいながらし

て世界を知ることができるセミナーを実施し、世界を視野に入れた生き方をメンターとなる海外大学の大学生等から直接学ぶことで、長野県や日本の未来を拓く生き方を考える。

期間中、高校生は海外大学生から専攻する学問領域やその生き方について英語で学ぶ少人数講義（「セミナー」）や様々な分野の第一線で活躍する社会人からの講演会（「フォーラム」）、自分自身の将来像を描くワークショップ、地域の伝統に触れたり地域の方とともにワークショップを行ったりし、グローバル・ローカル双方の視点や価値観を学ぶことができる多様な取り組みを体験する。

3 成果

- (1) 大学生や社会人から、具体的な経験に基づく話を聞くことにより、自身の将来像を想像し、主体的な進路選択を行おうとする意識を高めることができた。
- (2) それぞれの参加者の地域における価値観や課題を知り、理解するなかで、自分の地域との関わりに対する意欲や、自分の可能性を広げたいという思い、グローバルな視点を持つことにつながられた。
- (3) 多様な価値観を肌で感じ、自分の環境を相対化したり、他者に対する想像力を持つ中で、それぞれに抱える課題を見出し、具体的な行動へ向け決意を持つことができた。

4 期 日 令和3年8月13日～8月17日

5 実施方法 新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインで開催

6 参加者 高校生 33名（うち長野県内高校生 11名）

2 より深い学び

マイプロ長野県 Summit（高校生学びのフォーラム長野）

令和元年度からマイプロジェクト事務局と連携し、全国高校生マイプロジェクトアワードの地域サミット（県大会）として「マイプロ長野県 Summit」を実施しており、令和3年度は WWL 関係高校をはじめとした県内 24 校から、43 プロジェクト、91 名の県内高校生が参加している。

マイプロジェクトとは、高校生が「主体性」をもって、つくりたい未来に向けて「アクション」を行っていく学びのプロセスであり、そのプロセスを通して自分自身の興味関心を発見することはもちろん、他者と協働することで社会の価値発見・創造に向かう姿勢を養い、正解がない中で試行錯誤し探究することで不確かな時代の中でも未来への創造力を育むことなどを目的としている。

長野県では、平成 28 年度からすべての県立高校で地域に根差した探究的な学びとして「信州学」に取り組んでいるが、学校の枠を超えて発表し合い学び合う場としてこの Summit を位置づけ、生徒の主体的な課題の発見や、自らの力で解決することに向けて試行錯誤する学習の楽しさを共有するとともに、他者のアドバイスを受けて自分を成長させる機会にしてきた。

令和3年12月の Summit に向け、7月にテーマを発見したり、課題を掘り下げるための「StartUp&Brush Up プログラム」、10月にこれまでの活動を振り返り、今後の活動を見通すための「中間報告会」を実施するなど、年間を通して、マイプロ OB の大学生や、地域で活動する社会人など校外の多様な他者から、探究をすすめるためのサポートを受けている。また、教員に対しても「伴走者フォーラム」（教員対象研修会）として、他県の先進事例を学び、マイプロジェクトの活用方法について協議する場を設けている。

令和3年度に参加した WWL 関係高校生徒のテーマは次のとおり

学校名	プロジェクト名
須坂	高齢者が安心して生活できる地域にするためにはどうすれば良いのか
須坂	キャッシュレス化によって、お金の動きはどう変わるか
篠ノ井	Ethview
屋代	温泉街の路地裏に明かりを灯す活動

上田	多世代が集まる海野町商店街にするために～集まれ!!うえだいきっこ!!わちゃわちゃ大作戦!!～
上田	教員の働き方改革を実現するために
上田	LGBTと向き合う社会と教育現場の現状・ありのままを尊重できる世の中へ
上田	「誰もが」わかる、できるを目指して
上田染谷丘	おけまる食堂「ぱんとリーソメヤPJ」～フードパントリーで人を支え隊～
上田染谷丘	そめや工房～県立大生と一緒に商品開発をし隊～
野沢北	音楽が勉強に与える影響
下諏訪向陽 諏訪清陵	Fream
伊那北	高校再編計画に私たちの声を!
松本県ケ丘	みんなのぶしつ・高校生のための放課後の居場所に挑む・
松本県ケ丘	PR ってなに?
松本県ケ丘	食品ロスに紙回答
松本県ケ丘	体も環境も喜ぶ入浴剤とは? 目指せ!環境にやさしい着色料
松本県ケ丘	クローバーの突然変異 ~幸せを増やすために~
松本深志	持続可能な木材利用

探究 Frontiers 講習

令和3年度は、県教育委員会が主催し、前例や常識にとらわれることなく、「『探究』について探究する」研修を実施している。受講者が自ら研修テーマや研修内容を決め、グループ内外の様々な人との対話や協働を通して教育実践を行うことで、その過程で得た経験や新たな視点をもとに、これからの「STEAM教育」や「教科等横断的な学び」などの「探究」のあり方について、提案することを目指すものである。

県立高校11校の教諭12名が受講を希望し、各グループ3人のメンバーで「他教科とコラボレーションした授業づくり」や「知的好奇心」「デザイン思考」をキーワードに探究活動を実践する取組、「教員集団」の仕組みやあり方から探究活動を考えるなど、多様なテーマに取り組んでいる。

また、本研修は軽井沢風越学園校長の岩瀬直樹氏を伴走者に迎え、第1回全体会(スタートアップ)で基調講演をしていただいた他、11月には受講者全員で風越学園を訪問し、校舎・校地を案内してもらったり、児童・生徒の自発的な学びに向かう仕掛けやその姿、教員の接し方等を見学したりすることで、刺激を受けるとともに、高校の学びにどう取り入れることができるかを考える契機とした。

今後、各グループでの研究について、3月に成果報告会を実施し、その後も講習受講者は「探究Pioneers」として、講習を通して得た人的ネットワーク(外部講師等やメンバー)等を、生徒の探究学習をはじめとした、教育活動全般に活用しながら、研究を継続する予定である。画期的な教員研修の取組ではあるものの、成果については3月の報告会意向を待つことになるが、これからの高校教育をけん引する意欲ある教員が集い、「探究とは何か」という本質に向き合うことで「生まれる想い」や「描く未来」に期待したい。

JIBUN 発 旅するラボ

1 目的

所属する高校の枠を超え、参加する他の高校生だけでなく、企業経営者や学生等年長の他者との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究(探求)を通して、自分が何者であり、何を実現したいのかを明らかにする。

2 主催 長野県教育委員会、長野県立大学、KDDI株式会社、長野県中小企業家同友会

3 参加生徒数 32名

4 主な活動内容

- ・キックオフキャンプ(5月29日、オンライン開催)
チームビルディング、JIBUN発信講座、問いの種探しワークショップ 等

- ・サマーキャンプ（8月7日・8日、オンライン開催）
高校生同士や大学生・大人との対話を通して探究する「自分発の問い」を固め発表、「自分発信」に向けたホームページ作成講座、SNS情報リテラシー講座 等
 - ・スプリングキャンプ（3月12日実施予定）
参加生徒からそれまでの活動と到達点に関する報告・他校生や年長者からのフィードバック 等
 - ・ラーニング・ジャーニー（12月4日、㈱エヌワイビー本社（長野市）、㈱牛越製作所（岡谷市）
経営者を訪ねストーリーを聞き、その体験をグループや個人で深掘り
 - ・Nagano Startup Study（オンラインベンチャー起業家講演）
 - ・ユニット（高校生3～4名、大学生・大人2名からなる活動の単位）ごとのオンライン対話
- <サマーキャンプの振り返りアンケートより>
- ・対話を通して様々な考え方に触れる中で、自分の問いが深まっていった。
 - ・対話を通して、自分は本当にこの問いでいいのか疑問に感じ、思い切って問いを変えた。
 - ・普段話せない他のユニットの人と話したり交流できて楽しかった。 等

『JIBUN発旅するラボ 2021』（イメージ） 長野県立大学×KDDI×長野県中小企業家同友会×長野県教育委員会

目的:所属する高校の枠を超え、参加する他の高校生だけでなく、企業経営者や学生等年長の他者(以下、「先輩」との交流を図り、身近な事柄から自ら立てた問いを自ら考える探究(探求)を通して、自分が何者であり、何を表現したいのかを明らかにする。

●全員参加

キャンプ



・キックオフキャンプ(6月)で仲間たちと出会う。
・「自分の身近な事柄から生まれる問い」を定め(夏キャンプ)、自分が何者であり、何を表現したいのかを発表する(春キャンプ)。
・WEBデザインを学び(キックオフ)、各自がHPを制作し続け、成長のプロセスを振り返られるようになる。(希望者は公開)

○ラボ活動/参加推奨

オンライン講座



素敵な大人たちの生き方、考え方に触れ、それを仲間たちとの対話を通じて深めるオンライン講座。ベンチャー起業家講演会、長野スタートアップカフェ、哲学対話などに加え、スキルに関するセミナー等の開催も検討。

ラーニング・ジャーニー



若手経営者や地域活性化に取り組む方などを訪ねストーリーを聞き、その体験を個人やグループで深掘りする。合わせて自分と向き合う体験を行う(県内4カ所想定)。

ユニット 他的高校生と先輩から構成する活動の基本単位(年長者2名に対し高校生同数以上) #slack

オンライン部室 ユニットの枠を超え、オンライン上で参加メンバーが任意で集う場所(当面は、週1回程度日時設定)
・活動の振り返り、日ごろのモヤモヤを多様な先輩たちとオンラインコミュニケーション
・起業志望を持った生徒に対しては、起業向けの個別サポートを実施。

スケジュール例		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
キャンプ	全員参加				●		●							●
オンライン講座	参加推奨		○						○		○		○	
ラーニング・ジャーニー				○					○		○		○	

募集期間
 専業期間にキックオフイベント(4月24日午後予定)

WEBデザイン

講座開講

自分を表現する「JIBUN発HP」各自継続アップデート

発表

参加対象者

- 希望する高校生(選考はしない予定)
- 希望する教員(オブザーバー参加)

3 国際的な学び

長野県海外進学・留学講座

1 目的

グローバル化が加速する社会において求められる豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を涵養するため、多様な価値観に触れる機会を設定し、高校生に国

際的な視野を持たせ、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材の基盤を形成する取組の一環として、海外大学の学生や留学経験者等による海外進学・留学講座を実施する。

2 主催 長野県教育委員会

3 事業内容

- (1) 日本人の海外大学生による海外進学及びグローバルな学びに関する講話・ワークショップ
- (2) 海外進学等に関する個別相談

4 実施期日及び会場（第1回、第2回はオンラインに変更）

- 第1回（東北信地区生徒向け） 令和3年7月24日（土）13:30～16:30 会場：篠ノ井高等学校
 第2回（中南信地区生徒向け） 令和3年7月25日（日）9:30～12:30 会場：松本深志高等学校
 第3回（東北信地区生徒向け） 令和4年1月5日（水）9:00～12:00 会場：長野県庁
 第4回（中南信地区生徒向け） 令和4年1月5日（水）14:00～17:00 会場：松本市中央公民館

5 実績

新型コロナウイルス感染症感染拡大により、第1回、第2回はオンラインで実施した。参加者は4回の合計で94名で、保護者の参加もあった。参加者のプログラムに対する評価はいずれも5点中平均4.5点以上で高く、留学についての知識を得るだけでなく、自分のやりたいことと向き合えたなどのコメントもあった。

高校生国際会議実行委員会

令和4年6月に実施予定の高校生国際会議については、生徒実行委員会がその企画・準備・運営の中心を担うこととし、令和3年10月に実行委員会を立ち上げた。ALネットワーク校に周知を依頼し、8校から57名の生徒が申し込んだ。また、ALTサポーター7名、大学生サポーター18名から登録があった。これまで、月1回程度のオンライン会議を実施し、分科会のテーマ選びやテーマに即した勉強会などを行ってきた。引き続き、参集の会議も行いながら、準備を進めていく。

・高校生国際会議実行委員会

生徒57名（上田、野沢北、諏訪二葉、須坂、篠ノ井、伊那北、松本県ヶ丘）

11月6日	自己紹介、課題意識の共有、分科会検討、基調講演講師検討
12月5日	英語レッスン、分科会ごとに話し合い
1月23日	分科会ごとにミニレクチャー。大学生サポーターがファシリ役 講師 木島史暁さん JICA 長野デスク 直井恵さん NPO 法人アイダオ 藤原智子さん 環境政策課 北林郁子さん くらし安全・消費生活課 西嶋宏太さん、光さん 佐久病院、Home Trip Japan 合同会社 高橋真理奈さん NPO 法人 e-education
3月16日	参集（上田セントミューゼ）

・高校生国際会議サポーター（教員2名、大学生14名、ALT7名）

国際学生ゼロカーボン会議

環境政策課主催。気候変動や環境問題に関心のある学生が他国の同世代とそれぞれのアクションや課題を共有することでお互いの地域や取組を学び合うとともに、国を超えた仲間づくり、次のアクションへつなげることを目的に令和4年2月に4日間開催。ALネットワークから3名の高校生が学生プレゼンターとして参加した。

4 高度な学び

高度な学びに触れる特別講座

高校では学ばない、「より高度な学び」に触れる機会として、特別講座を実施した。

運営指導委員による講座

令和4年2月28日	南希成氏	小児科医として国境なき医師団に参加して
令和4年3月9日	讃井康智氏	2040年から逆算した今の中高生の可能性

海外大学生による講座

令和3年12月25日	清水悠太郎氏	ミネルバ大学	ミネルバ大学授業体験 「内省とバイアス」
令和4年3月12日	外村万里子氏 村上花氏	ワシントン大学 メルボルン大学	海外の大学について知 ろう
令和4年3月13日	高島崇輔氏 ほか2名	ブリティッシュコロンビア 大学ほか	オンラインカレッジ

大学の先取履修

長野県立大学及び信州大学と協議を進めている。令和4年度から高校生の大学への授業の参加が認められる見込みである。単位習得、参加方法など、詳細については、引き続き協議していく。

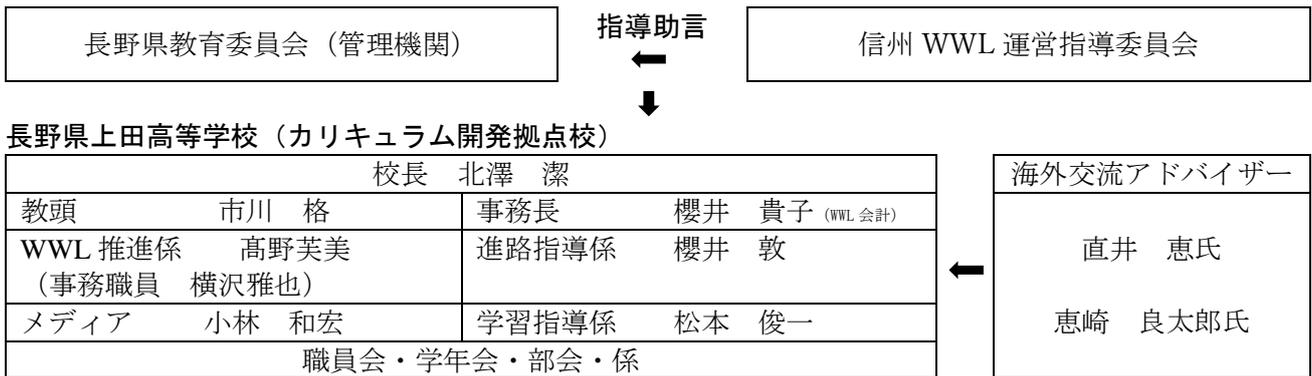
(例)

長野県立大学 「コミュニティデザイン」 集中講座4日間

信州大学 「繊維科学の基礎」 オンライン+サマーキャンプ

I ALネットワークの構築

カリキュラム開発拠点校 上田高校におけるWWL事業の教職員支援体制



WWL 推進係分担 WWL 業務の企画運営

教頭	市川 格	管理機関・AL ネットワークとの連絡調整・予算など	
WWL 推進係（9名） ※校務分掌上の係として位置づけ ○印：責任者 カテゴリー担当			
英語	高野 芙美 ○	総務 他校連携 研究報告集 台湾研修旅行 高校生国際会議 カリキュラム開発	GSII（英語）○ 保健医療
数学 情報	小林 まゆ子	2年首都圏フィールドワーク ヒューマン・アクト・インマニラ NPO アイキャン・(株) KDDI 連携	GSII（日本語）○ 子どもスポーツ・国際協力
地歴 公民	白鳥 敏秀	1年県内フィールドワーク 松尾ゼミナール JICE 連携	GSI ○ 人権ジェンダー・ビジネス都市
国語	中澤 東樹	GS 報告会 校外発表 アカデミックプレゼンテーション 高大連携 ビジョン委員会	GSII（日本語） 保健医療
地歴 公民	伊藤 光葉	JICA・NBL (長野ビジネス外語カレッジ) 連携 アンケート作成	GSI 歴史アート
地歴 公民	内田 清隆	GPS-Academic 生徒研究集録	アンケート分析 歴史アート
数学	清水 真治	北陸新幹線サミット 松尾祭 WWL 発表	GSIII ○ 生命情報・テクノロジー
英語	北澤 有里子	ボストンスタディプログラム 海外留学・海外交流	GSI 国際協力・国際理解
GI	Andrew Parkinson (グローバル講師)	Website 管理 台湾研修旅行、国際交流	GSII（英語）○ GSIII（英語） 国際理解

↑ 総合的な探究の時間、グローバルスタディーズやWWL行事を連携して推進

1 学年会 WWL 推進係：白鳥 敏秀		2 学年会 WWL 推進係：小林 まゆ子	
地歴公民	丸山 賢一 (学年主任)	英語	竹内 光礼 (学年主任・台湾高校交流担当)
保健体育	酒井 拓也	地歴公民	吉川 泰
理科	大石 隆裕	数学	横澤 克彦 (台湾研修旅行担当)
数学	土屋 稔	芸術 (美術)	高柳 剛士
数学	御子柴 恭介	国語	中山 希久子 (進路指導キャリア教育担当)
国語	母袋 由紀 (進路指導担当)	国語	宮原 永津子 (人権教育担当)
英語	北澤 有里子 (県内 FW・国際交流担当)	理科	小林 和宏 (ICT メディア担当)
英語	菊原 健吾 (進路指導キャリア教育担当)	英語	西村 晃洋 (進路指導・台湾高校交流担当)

I ALネットワークの構築

2 北陸新幹線サミット

(1) ねらい

上田市は北陸新幹線の起点東京～終点金沢の中間点に位置し、上田駅から徒歩6分の交通の便が良い場所に立地している。そこで、その立地の良さを活かし、新幹線沿線にある高校の生徒を中心とした課題研究発表会・意見交換会をし、関東甲信越北陸地域の高校生が課題研究発表を通じて切磋琢磨する場にしたい。また、学校設定科目の「グローバルスタディⅢ」(GSⅢ) 選択生徒とボランティアの生徒が企画・運営をすることで、企画・運営に必要なスキルを身につけさせたい。

(2) 日程

日時：6月12日(土) 10:00～15:00
 日程 10:00～10:15 開会行事
 10:15～10:50 基調講演
 11:00～12:30 分科会 セッション①
 (昼食)
 13:20～14:00 分科会 セッション②
 14:00～14:20 分科会 まとめ
 14:30～15:00 閉会行事

(3) 参加者

講師

全体会基調講演 小村俊平氏 (ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)
 第Ⅰ分科会 吉村 牧氏 (長野県環境部環境政策課企画係 主任)
 第Ⅱ分科会 西嶋 光氏 (Hometown Trip Japan 代表 ハイカラコモロ発起人)
 第Ⅲ分科会 中田覚子氏 (佐久大学看護学部)
 第Ⅳ分科会 藤原智子氏 (長野県環境部環境政策課企画係主事)

参加高等学校

県外校	生徒数	県内校	生徒数
筑波大学附属坂戸高等学校	9	長野県松本県ヶ丘高等学校	2
東京学芸大学附属国際中等教育学校	5	長野県長野高等学校	1
金沢大学附属高等学校	1	長野県篠ノ井高等学校	2
石川県立七尾高等学校	7	長野県伊那北高等学校	1
海外	参加者数	長野県上田染谷丘高等学校	5
America	1	長野県上田高等学校	13
Australia	1		
France	1		
Taiwan	2		

この他にも、各校教員、講師、管理期機関職員等が接続



I ALネットワークの構築

(4) 実施内容

開会行事

学校長挨拶・生徒代表挨拶・講師紹介

基調講演

小村 俊平氏 未来をつくる「探究的な学び」とは？
～ベネッセ STEAM フェスタから学ぶ3つの方向性～

分科会



北陸新幹線サミット

<p>第Ⅰ分科会 テーマ「一歩踏み出そう地球の未来を守るためのアクション」</p> <p>プレゼンテーション ①「環境問題の“いま”」 森遥花 高田綾乃 ②「古着の活用」 小坂眞生 ③「エシカル消費」 森遥花</p> <p>ディスカッション ①「私たちのどのような行動と意識が環境問題を引き起こすのか」 ②「地球環境を守り、持続可能で豊かな生活を実現するために私たちにできるアクションとは」</p>
<p>第Ⅱ分科会 テーマ「今日からできる住み続けられるまちづくりのためのアクション」</p> <p>プレゼンテーション 問題提起 金井元美 佐藤優衣</p> <p>ディスカッション①「地域社会の希薄化が及ぼしている影響とは」 ②「地域社会を活性化するために私たちから始める小さな一歩」</p>
<p>第Ⅲ分科会 テーマ「いのちのかたち、助け合いのかたち」</p> <p>プレゼンテーション① 「学生の幸福について」横山そよ花 ② 「フードパントリーの取り組み」菱沼幸歩</p> <p>ディスカッション①「わたしたちの健康・いのちに対する意識と今必要とされる“助け合い”とは何か」 ②「私たちにもできる助け合いのかたちとは」</p>
<p>第Ⅳ分科会 テーマ「International Comparison of COVID-19 Countermeasures」</p> <p>プレゼンテーション 問題提起 神谷日奈子 宮崎あずさ</p> <p>ディスカッション① Discuss how Covid19 has affected -Your city ② Discuss what changes you would like to keep after Covid19 is no longer affecting us.</p>

閉会行事

分科会まとめ発表 生徒代表挨拶 講評

I ALネットワークの構築

(5) 生徒の感想・アンケート

第I分科会

評価	割合 (%)
大変良い	31.3
良い	56.3
やや不足	12.5

第II分科会

評価	割合 (%)
大変良い	54.5
良い	45.5

第III分科会

評価	割合 (%)
大変良い	45.5
良い	45.5
やや不足	9

第IV分科会

評価	割合 (%)
大変良い	80
良い	10
普通	10

寄せられた感想	今後の課題
<p>○一人での参加だったので、初めはとても緊張していたのですが、他校の方と意見交換をするという滅多にない経験をする事ができてとても良い時間を過ごすことができました。また、自分が今まで進めてきた研究に対して意見をもらえる事ができてうれしかったです。</p> <p>○生徒にとっては同年代の様々な活動や考え方を知ることができ、大変有意義だったと感じます。対面で熱量などを感じながらディスカッションしたり、休み時間等にコミュニケーションをとったりできるのがやはりこうした交流の魅力の一つかと思えますので、コロナが落ち着き、来年度は直接お伺いできることを楽しみにしております。</p>	<p>○これ以上をこの1日のサミットの中で深めていくということであると、ゴールを明確にする必要があり、明確になったものについて、必要であればこの場以外でも準備をして臨むこともしなくてはいけないのかなと思いました。</p> <p>○オンラインは接続テストをいくらやっても当日問題が起こるし、事前準備もとても大変でそれプラス内容も考えないととなると生徒の負担は大きかったです。自分でもよくあれでテストもやって乗り越えたなと思います。その分達成感も大きかったので良かったです。来年もまた生徒が実行委員になるならばどうにか全て対面で国際会議が開けるといいなと思います。</p>

(6) 成果と課題

今年度もコロナ禍による開催であったため、対面で参加した生徒とリモートで参加した生徒がいる状況だった。その中でも、生徒が企画・運営を行い、サミットを作り上げることができた。生徒にとって貴重な経験になったと考える。また、リモートを使うことで、海外からの参加が可能になり、多様な価値観に触れることができた。このこともサミットの参加者にとって、とても有意義な時間であったと思う。

来年度は国際会議になるが、今回得たノウハウを生かして、参加者が多様な価値観に触れることができ、有意義な時間を過ごせると良いと考える。

I ALネットワークの構築

3 信州WWL高校生国際会議実行委員会

- (1) 目的 信州WWL高校生国際会議の企画・運営を行う
- (2) 主催 長野県教育委員会（学びの改革支援課・上田高等学校）
- (3) 内容 令和4年6月に開催予定の信州WWL高校生国際会議の企画・運營業務を行う
- (4) 参加者（上田高校のみ）
37名（1月26日現在）
- (5) 活動内容（発足からこれまで）
9月下旬 実行委員募集案内
10月初旬 実行委員会募集説明会（2回実施）24名参加
11月6日（土） 第1回実行委員会（15:00-16:30）自己紹介・基調講演について
12月5日（日） 第2回実行委員会（9:00-11:00）English Lesson・分科会テーマについて
1月23日（日） 第3回実行委員会（18:00-20:00）6つのカテゴリー毎のミニレクチャー
3月16日（水） 第4回実行委員会（10:00-15:00）対面開催（予定）

(6) 実行委員会の様子



左：説明会の様子（先輩体験談を語る） 右：第2回実行委員会の様子（ALT サポーターによる English Lesson）

4 研究発表交流

- (1) 金沢大学附属高等学校高校生国際会議 Zoom out/in on the Universe～Find a New Self～

日程：8月6日（金）10:00-16:00 オンライン 午前：日本語の部 午後：英語の部

主催：金沢大学・金沢大学附属高等学校

会場：Zoomによるオンライン開催

参加者：2年5名（金沢泉ヶ丘、金沢二水、小松、七尾高校、シンガポールの高校より参加）

概要：

北信越地方の高校生が社会人や海外の高校生との議論を通じて、国や地域の枠を超えた価値観を基に、文化的・社会的背景のことなるもの通しの交流から、それぞれが設定した課題に対する認識を深めたり、解決策を構想したりする。会議を通じてそれぞれのテーマに対する課題を明確化し、会議後も緩やかに繋がりながら、それぞれのフィールドで問題解決に向けた探究を重ねる。

- (2) まつもと高校生国際会議

日程：8月19日（木）9:00-12:00 事前学習会 29日（金）10:00-15:30 高校生国際会議

主催：松本県ヶ丘高等学校（協力：松本市人権共生課 信州大学グローバル推進センター）

会場：松本県ヶ丘高校（本校生徒は Zoom オンライン参加）

参加者：2年2名

概要：

松本県ヶ丘高校の探究科2年生が松本に在住の外国人や留学生とともに多文化共生にまつわる課題について考える国際会議を開催。本校からは事前学習会に2名が参加し、日本語支援ボランティアとしての活動の様子や今後の課題について発表した。29日の国際会議にも参加し、県ヶ丘の生徒や松本市在住の外国籍市民の方と意見交換をした。

I ALネットワークの構築

(3) 筑波大学附属坂戸高等学校 第10回記念高校生国際ESDシンポジウム

日 程：11月20日(土) 9:50-12:15

主 催：筑波大学附属坂戸高等学校・筑波大附属学校教育局

会 場：筑波大附属坂戸高校(ヴァーチャル開催・本校生徒はZoomオンライン参加)

参加者：2年4名(他WWL事業、SGH指定校、インドネシア・タイ・フィリピンの高校生)

概 要：

海外の高校生およびWWL校、SGH校、地域協働事業校の生徒および教員が集い、国際シンポジウムを開催することを通して、参加者が持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題に主体的に取り組む姿を涵養し、グローバル人材としての資質を高める。さらに、学びの進化のためのネットワーク作りを進め、SDGsを実現するためのコンソーシアムを構築する。本校生徒は、ワークショップ「エシカル商品」「Think soybeans, Act SDGs!」「COVID-19」の英語によるディスカッションに参加した。

(4) 金沢大学附属高等学校 高校生探究成果発表会

日 程：2月19日(土) 9:30-15:20

主 催：金沢大学附属高等学校

会 場：金沢大学附属高等学校(Zoomによるオンライン開催)

参加者：2年2名(他 独協埼玉、大聖寺、若狭、長野高校)

概 要：

石川県内外の高校生がこれまで取り組んできた探究成果を発表する機会とする。専門家や社会人からの指摘を得ることで、専門的知見を得たり視野を広げたりする機会とする。学校の枠を超えて生徒同士が自らの探究や学びを発表し合い、同世代からの刺激を得て今後の探究活動の一助になるような機会とする。本校からは2年生2名が「多世代が集まる商店街にするために」「Black Lives Matter」というそれぞれのテーマの研究をオンラインで発表し、参加した高校生や助言者と意見交換を行った。



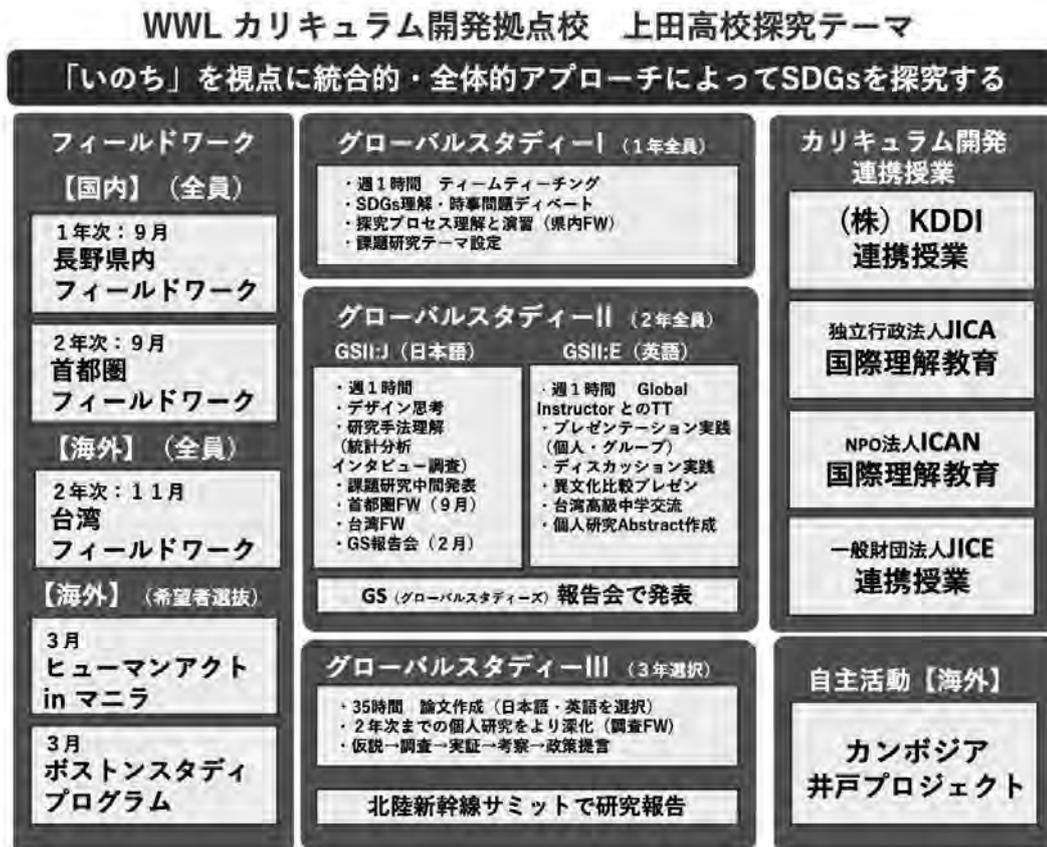
対面での発表交流の機会は少なかったが、オンラインでも他校の生徒と有意義な探究交流の場となった。

II 文理融合のカリキュラム開発

1 令和3年度WWL 研究開発活動

(1) 課題研究の概要

教科教育や進路の目標と連動した課題研究を重視し、グローバルな視点から地域を捉え、同時に地域からグローバル課題について考察できる科目横断型カリキュラムを開発する。課題研究においては自己の興味関心を掘り下げ、地域や社会、もの、ことと自分自身の関わりの中から社会課題の解決とSDGsの実現を目指し、社会に貢献しようという意識を育むことを目指し、全職員による指導体制を構築する。



(2) グローバルスタディーズの概略（詳細は次ページ以降を参照）

ア グローバルスタディーI (GSI)（1年・1単位）：授業担当とHRTによるTT

グローバル課題を題材としてレポートにまとめる力とICTスキルを身に着け、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通じて協働力を構築する。自らの設定した研究テーマに沿って課題研究をはじめ、探究力を養う。

イ グローバルスタディーII (GSII)（2年・2単位）：日本語（1時間）と英語（1時間）で行う。

・グローバルスタディーII（日本語）

GSIIで設定した個人研究テーマへの探究を深め、情報収集・データ処理、分析・考察の探究スキルを身に着ける。首都圏・台湾フィールドワークを通じてグローバル課題についての理解を深め、2月のGS報告会で年2生全員が研究報告を行う。

・グローバルスタディーII（英語）

個人の課題研究を英語で探究し、発表できるスキルを身に着ける。台湾研修においては、異文化比較発表や高校生との交流を通じて情報収集や多様なコミュニケーションツールとしてICTを活用する力を身に着ける。

ウ グローバルスタディーIII（3年・1単位）自由選択

2年間の課題研究を自身のキャリアに応じてさらに深化させる。地域で自主的に調査活動を行い、解決策の実践・検証を通して課題解決に向けたアクションプランを6月の北陸新幹線サミットで報告する。

II 文理融合のカリキュラム開発

2 グローバルスタディ I

(1) ねらい

探究的な学びを体験的に進めると同時に、協働性・可塑性や国際感覚などの汎用的な能力の養成をめざすとともに、個々のSDGsに注目しながらも、その課題を取り巻く社会や歴史などの構造的で複雑な側面を教科横断的に探究する。それと並行してICTスキルや情報リテラシーを身につける。

(2) 年間計画 (シラバス)

月	学 習 内 容	学 習 の ポ イ ン ト
4	時事問題から、社会への問題意識を持つ	<ul style="list-style-type: none"> ・写真から、近年の国内外の課題を読み取り、発表する ・PC室のPC使用ガイダンス ・意見をまとめるためのワード文書作成指示 ・図書館ガイダンス
5	問題解決策をグループで議論し、まとめ、発表する	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネット情報利用のスキルとモラル ・信毎記事検索利用案内 ・探究活動の基礎として、自分が関心を持つカテゴリー毎にグループ形成 ・グループ単位で1つの課題を取りあげ、多面的意見を基にディスカッションを行い、その解決策をまとめて発表 ・グループ内の議論や、解決策形成過程を、個人でレポートにまとめ、提出 ・FWガイダンスの実施
6		
7	フィールドワーク (FW) 事前学習	<ul style="list-style-type: none"> ・県内FWに関連して課題解決学習に取り組む。秋以降の課題研究の土台ともする。 ・事前学習のまとめさらには終了後のまとめとしての解決策、などをパワーポイントスライドにまとめる。 ・「総合的な探究の時間」枠内で実施する「課題研究入門講座」(同窓会主催)とも連動させ、問題意識を持つ。 ・フィールドワークレポート提出
8	フィールドワーク (FW) 事前学習	
9	フィールドワーク (FW) 事前・事後学習	
10	課題研究に向けての準備学習	<ul style="list-style-type: none"> ・KDDI 特別授業「課題研究テーマの見つけ方」 ・課題研究に向けての学校作成資料の読み合わせ ・図書館を利用した資料探索ガイダンス (短時間) ・文献、資料引用ルールの再確認
11	課題研究のリサーチクエスチョンの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の進路目標とも連動させて、自らテーマを設定し、課題研究テーマ設定に取り組む。
12		<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究構想ワークシートの提出 (12月上旬)
1		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを元に、担当教員の指導を受ける ・自分の構想を隣人に伝え、意見を聞く ・論文執筆開始
2	GS 報告会 JICE 特別講座	<ul style="list-style-type: none"> ・論文の1章、3章と参考文献を提出 ・地域における外国人問題を知る
3	課題研究の深化	<ul style="list-style-type: none"> ・研究構想への評価を基に1年間の総括を行い、2年次の「GSII」への土台とする。

II 文理融合のカリキュラム開発

(3) 授業の概要（主な取組）

① 時事問題学習から課題解決策を提案

授業開始時に8枚の時事問題テーマに関する写真を提示、それが何かを授業グループ毎に考えさせて発表させた。そのうえで、クラス内で本人の希望を基にA～Hのカテゴリー（↓）別に数名毎のグループに再編し、さらにそれをテーマに関する賛成、反対のグループに分け、自らの主張の根拠を調べさせたうえで、ディベートを実施した。



ディベート終了後は自らの主張と対立側の主張を整理したうえで、自らのオリジナルな解決策を作成する過程を、レポートのかたちで提出させた。

取組む課題カテゴリー	自分の主張する立場	備考
A 環境・生命	自治体による核廃棄物最終処分場受け入れに賛成	2020年秋に北海道の自治体が調査の受け入れを表明
	〃 に反対	
B 人権・ジェンダー	同性婚承認に賛成	2021年3月に札幌地裁で違憲判決
	〃 に反対	
C ビジネス・都市	テレワーク推進に賛成	コロナ禍で利用が激増
	〃 に反対	
D 国際協力・国際理解	日本の核兵器禁止条約調印、批准に賛成	2021年1月に発効するも、日本は未調印
	〃 に反対	
E 子ども・次世代	民法の「懲戒」規定廃止に賛成	改正児童虐待防止法（20年成立）が、2年以内の見直しを提言
	〃 に反対	
F 保健・医療	安楽死の容認に賛成	2020年7月に「安楽死」事件発生
	〃 に反対	
G テクノロジー①	AI兵器開発に賛成	2019年8月、国際会議で規制に合意
	〃 に反対	
H テクノロジー②	コロナ感染拡大防止のための、政府の個人情報収集推進に賛成	日本の‘COCOA’には情報集約機能はなし
	〃 に反対	

② 県内フィールドワーク事前学習、事後学習（Ⅲ-1参照）

9月15日（水）の県内フィールドワークに向けて、クラスを訪問先別に2つに分け、それをさらに3～4のグループに分け、訪問先と連絡を取らせるなかで先方から「宿題」を受け取り、その解決策を議論し、数枚のスライドにまとめ、当日発表した。終了後は訪問先からの講評を受けて、その振り返りをスライドに加えた。

II 文理融合のカリキュラム開発

③ 課題研究のテーマ設定

今年度は、(株) KDDI の支援を受けて、生徒の課題研究のテーマ設定に関する指導の改革を試みた(Ⅱ-6参照)。これまでは、10月頃に社会で話題になる時事用語(キーワード)集を配布したりしてテーマ設定の補助としたが、今回は5月以降の「ワクワク」集めやIRで取り組んだ新聞記事レポートなどを土台に、リサーチクエスションの設定に取り組ませた。さらにそれをカテゴリー別に集約し(右表)、2月のGS報告会では2年生の同カテゴリーの生徒とマッチングさせて、その発表を聞き、質疑応答を通じて刺激を受け、GSⅡでのインタビューなどを通じた本格的な研究へと繋げていくことを目指した。

また、12月半ばに集約した生徒個々人の研究テーマとカテゴリーに基づいて全教職員(除3年HRTと進路指導主事)に割り振り、テーマ設定や研究構想について指導を受け、指導終了後にはチェックカードをHRTに提出するよう指導した。

カテゴリー	人数
A 環境・防災	59
B 人権・ジェンダー	32
C 歴史・アート	3
D 農業・資源	37
E 食品・栄養	26
F ビジネス・都市	36
G 平和・貧困	17
H 国際協力	5
I 子ども・スポーツ	35
J 生命・情報	17
K 保健・医療	23
L テクノロジー	21

④ JICE 特別講座(Ⅱ-8参照)

国際性の涵養の視点で、コロナ禍での貴重な機会となった。

(4) 授業の評価(生徒より)

- ・グループワークなどを通して仮説を立てて反論を想定して仮説を立てる力が向上した。
- ・課題研究などを通して集めた情報から課題を多角的に見ることができるようになった気がする。
- ・自分が疑問に思ったことを調べるときに今までは一番上に上がってきたサイトだけをみて信じていたが、今は、色々なサイトや本を読んで信憑性があると自分が思った情報だけを集めるようになった。
- ・違う国との文化の違いを改めて感じ、理解しあうことの大切さを学ぶことができた。
- ・ディスカッションをすることで相手側の意見を尊重しつつ自分の言いたいことをしっかり言えるようになった。
- ・ディベートやプレゼンテーションを通して、情報を読み取り、まとめるスキルが上がったと思う。
- ・入学時よりSDGsに関心を持つことが出来たしスキルも全体的に向上したのでよかった。今後はもっと視野を広げ、県外や日本、世界にまで目を向けていきたい
- ・今社会で問題になっていることを自分には関係ないと思わずに考えるようになった。また、自分で考え、自分なりの解決策を考えられるようになった。

(5) 総括・課題と改善点

- ・生徒のSDGsに関する関心が年々高まっているように思われる。入学当初のオリエンテーションからSDGsの諸目標を意識して探究学習や課題研究に取り組むよう指導してきた成果と思われる。
- ・今年度は時事問題のレポートを書く前提として、グループ内でのディベートを導入した。生徒には好評で、事象を多面的に考える契機になったものと考えられる。
- ・今年度は(株)KDDIの支援も受けて、5月頃から課題研究の間を立てる土台となる「ワクワク集め」などに努めた結果、場当たりの、あるいは大きすぎるテーマ設定をする生徒は例年より減ったと思われる。
- ・その一方で県内フィールドワークなどを通じて身近な事象に関心が集まりやすくなり、難民や地域紛争などのグローバル課題に取り組む生徒が例年より少なかった。
- ・コロナ禍で県内フィールドワークも実際に現地での研修も、SGH時代に行われていた台湾高校生との交流もできなかった。生徒の「内向き」指向が懸念される。

II 文理融合のカリキュラム開発

3 グローバルスタディ IIJ (日本語)

(1) ねらい

- ・教科活動と連動し、主として探究活動、さらにはその表現活動に取り組む。
- ・1年次に現代のグローバル課題や地域課題に目を開き、その解決方法を模索し、諸問題の解決に取り組もうとする姿勢を身に付けたものを、課題に合わせて適切な研究手法を用いて深めていく。
- ・自らの問題意識を持ってフィールドワークや課題研究に積極的に取り組み、先行研究を参考にするとともに、DDP能力を養う。
- ・コミュニケーションを大切にする。

(2) 年間計画 (シラバス)

月	学 習 内 容	学 習 の ポ イ ン ト
4	課題研究テーマの確認・課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究の日本語レポート作成。 ・ICTスキル、モラルの学習。 ・テーマの再考察。SDGsと関連させて考える。 ・インターネットの引用だけにとどまらないように指導する。
5	課題研究・課題研究テーマの再設定 ICTとは	<ul style="list-style-type: none"> ・研究手法を考える ・デザインシンキング学び、調査した内容を研究に活かす。 ・なぜそうなのか、背景を確実に検証してから仮説に対する結論を導く。担当教員から助言を頂く。研究手法を学び実践する。 ・インタビュー、アンケート、文献調査。
6	課題研究 デザインシンキングとは	<ul style="list-style-type: none"> ・研究手法を学び、実践する。 ・インタビュー、アンケート、文献調査。 ・実際に行って感じた事も大切にする。
7	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・論文の仮完成 ・担当の先生の助言を頂く。
8	課題研究	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド作成の基礎を学ぶ。 ・論文からスライドを作成する。
9	課題研究 首都圏フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークでの活動を課題研究にフィードバックする。具体的に提案できる内容を考える。 ・スライドの作成。
10	課題研究 これからの時代に必要な能力について	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドの作成。
11	課題研究 台湾研修旅行事前学習	<ul style="list-style-type: none"> ・担当の先生の助言を頂く。 ・台湾での学びにつなげる。
12	課題研究 台湾研修旅行事後学習	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドの作成。 ・「GS IIE」の授業と連携しつつ、英語レポートとともに自分の課題研究をまとめる。
1	課題研究まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・発表のスキルを学ぶ。
2	GS 報告会	<ul style="list-style-type: none"> ・内外に向けフィールドワークの成果や自らの課題研究を発表し、助言をいただく。
3	課題研究報告書作成	<ul style="list-style-type: none"> ・発表への評価を基に1年間の総括を行い、キャリアに結びつける。

II 文理融合のカリキュラム開発

(3) 授業の概要（主な取組）

① 個人課題研究

各自インタビュー・アンケート・実地調査を行いながら、仮説検証を行った。

以下個人研究テーマを抜粋した。

A 環境・防災	環境税の導入	環境問題をみんなで解決するために
	プラスチックから海を守る	海なし県から出来ること
	東日本大震災から学ぶ、避難所生活の実態	避難者のストレスを減らすには
	世界に平等に雨を降らせるには	人工降雨は本当に必要か
	活火山と生きていくために	噴火への対策
	地球温暖化	御代田から解決！環境問題
	これからの自転車と環境	自転車を安全に走れる街へ
	観光公害について	相続の必要性
	日本の水問題を考える	水道民営化は必要か
	ペットとの避難	～大切な家族を守るためにできること～
	海洋汚染を在宅医療から考える	増えつつある医療のゴミ
	リサイクルは本当に環境にやさしいのか	日本人がとらわれがちな思想
B 人権	安楽死から考える死ぬ権利	死ぬ権利は自由であるべきか
	少子高齢化問題と女性の政治参加の因果関係	日本の未来に必要なもの
	台湾と比較した日本の男女平等	選択的夫婦別姓制度について考える
	芸能人の人権はどうやったら守れるか？	SNSでの誹謗中傷、週刊誌でのデマなどの問題から考える
	BLACK LIVES MATTER	今の私たちにできること
	自立年齢と少年法改正について	～18歳成人は本当に正しいのか～
	過労死をなくしていくために	一人一人の負担を減らす働き方とは
	自転車に厳しい国日本	自転車が安心して走れる国へ
	裁判員制度の未来	人と司法の関わりを広げるために
	公正な社会のために	犯罪加害者・家族の人権
	裁判員制度が抱える現代の問題	裁判員の負担軽減のために
	外国人労働者のために	ストレス社会に生きる
	「ふつう」っていったい何？	ありのままを尊重できる社会へ
	DVがもたらす社会-私が考えられること-	被害と加害に関心を寄せて
	自殺を防ぐために	コロナ禍で増加した自殺
日本における同性婚の是非	ジェンダー的選択肢の拡張	
自分が自分らしくあるためには	LGBTであることのカミングアウト	
C 歴史・アート	クールジャパンの現状	日本の素晴らしい文化を守るために
	音楽から始まる国際協力	発展途上国の子どもたちと音楽でつながりを
	「誰もが」わかる、できるをめざして	ピクトグラムからユニバーサルデザインを考える
	貧困とアート	生きがいを見つけるアートの可能性
	寺院の維持と活用	寺院を維持するための方法
	アニメ文化によって長野県を活性化	コンテンツ・ツーリズムによって観光客を増やそう
D 農業・資源	今まで農業と新しいビジネスモデル	地方の農業を未来に残すために
	高齢農業から考える日本の農業の在り方	日本の農業を魅力的なものへ変革させるために
	現状維持の日本の農業を変えるには	最先端技術の応用と世界の"農業"のイメージの変化
	農業の衰退	地域の農産物が輸入品に対抗するために
E 食品・栄養	飢餓をなくすためには	身近な食品ロスから考える解決策
	和食のとり入れ	生活習慣病にならないために
	学校給食と食育	日本の子供たちに健康な生活を
	急速に拡大する管理栄養士の役割	日本の社会問題の解決策は管理栄養士にある？
	現代を生きる女性の痩せすぎ問題	世界の考え方から考える日本のこれからの意識
	フードロスで解決する飢餓	コンビニの新しい利用方法
	地産地消によるフードマイレージ削減	食で世界を変えるために
	新型コロナウイルス感染症と雇用	地域おこしと雇用の生み出しの両立
F ビジネス・都市	持続可能な社会の実現	シェアリングエコノミーで変わる日本
	地域活性化	小諸市の魅力を社会へ
	音楽とつなぐ地域活性化	音楽のまち小諸の発展を未来に
	ベーシックインカム導入から考えるこれからの働き方	ベーシックインカム導入で誰もが働きがいを持って働けるようにする
	昔のまちと地域再生	街の歴史から"再生"の意味を考える
	暮らしやすく生きやすいまちづくり	幸せをつくるUDとバリアフリーのまちを海外から
	ESGと10年後の社会	世界のモデルとされる長野県へ

II 文理融合のカリキュラム開発

	災害復興をビジネスで	ビジネスの可能性	
	空き家で地域活性化	空き家を減らすために	
	日本の働き方を変えるために	コロナ後もテレワーク活用	
	キャッシュレス後進国 日本	世界と比較した日本のキャッシュレス化	
	別所温泉を街歩きの良い街へ	入湯手形と入湯税の引き上げで温泉街らしい街づくり	
	長野県内における路線バスの現状	知らぬ間に消えていく路線バスを維持するために	
G 平和・貧困	日韓問題解決のために若者に何ができるか。	若者が持つ両国への興味を生かし、できることはあるか。	
	平等な世界の第一歩	移民問題から考える戦争の存在	
	ロヒンギャ民族が抱える問題	ロヒンギャ民族が安心して暮らすために	
	ストリートチルドレンを社会へ	働き、お金を稼ぐために	
	発展途上国の義務教育就学率をあげるために	東ティモールの中学校就学率から	
	発展と砂漠化	エチオピアにおける砂漠化の人為的要因	
	貧困解決のための食事	子ども食堂を持続可能な活動にするために	
H 国際協力	機械に頼らずにコミュニケーションをとることのメリット	ことばが人に及ぼす力	
	広まる食の多様性への対応	全ての人が安心して楽しめる食事を目指して	
	カンボジアの子供たちの健康を守るために	母子手帳の普及に向けて	
	IT 企業と外国人労働者	日本から見た外国と外国から見た日本	
	わかりやすいデザインとは	SDGs 17 の GOALS の達成のために	
I 子ども・スポーツ	生涯スポーツと長野の長寿	生涯スポーツが長野に与える影響	
	世界で拡大するオンライン教育と日本の現状	さらに質の高い教育を求めて	
	心理学から考えるいじめ	～子供たちの学校生活から考える～	
	不登校の考え方	親子共に安心して不登校するために	
	部活動と教師の働き方改革	教員の負担とやりがいとは	
	生涯スポーツと高齢者	スポーツを通じて健康に	
	現在から考える"遊び"に代わるもの	集団社会で生きるために必要な力を養う方法	
	児童虐待の現状と解決策	苦しんでいる子供のために	
	オンライン学習から考える新しい学習方法	不登校の子にも学びへのアクセスを	
	意識を世界へ	質の高い英語教育から、グローバル人材育成の課題と展望	
	実効性のあるプログラミング教育	IT化する世界とプログラミング教育の可能性	
	発達障害と理解	現在の状況から発達障害の子どもたちとの向き合い方を考える	
	小学校における英語教育	英語が使える日本人を育てるために	
	規模による学校教育の質	統廃合から考える解決手段	
	見えざる教室の上下関係	「スクールカースト」の正体とその対処法	
	学校に行けない子どもへの光	不登校の子どもを支援するために保護者や高校生にできること	
	はなすことの大切さ	多くの人が生きやすくなるためには	
	スポーツと人種差別	誰もがスポーツを楽しめる世界に	
	学校教育で必要なこと	効果が出る授業をするために	
	日本の学力と学習意欲	より質の高い学習のために	
	モンスターペアレントを減らしていくために私達ができることとは	モンスターペアレントになりやすい人の特徴と、ならないためにすること。	
	J 生命・情報	動物実験はなんのためにあるのだろうか	動物実験の現状
		「SNS」で悩み、自殺する人を減らすために	SNS いじめ、誹謗中傷、差別問題を見つめ直そう
日本における希少生物の保全		ビオトープによる生態系の保持と人との共生	
アレルギーを持つ上田市民		みんなが食べられる食を	
K 保健・医療	チーム医療の現状と未来に向けて	理学療法士目線から考える	
	重度の障がいや病気をもつ子どもの家族と兄弟が生きやすい社会	よりよい家族関係と社会のために	
	発展途上国のスポーツ選手の健康と医療福祉	リハビリテーションの活用で世界に希望を	
	花粉と生きる社会	衛生仮説の利用によるアレルギー疾患の減少化	
	セルフメディケーションとは	医療費を圧縮するために	
	高齢化の下での在宅医療	在宅医療の介護を地域で支え合う	
	低出生体重児から考える少子化	偏見や不安をなくすために	
	優生思想を教育から考える	平等な教育の場は無意識にできる格差	
	日本の高齢化と経済	国民皆保険と経済を守る	
	次世代の医療	感染症予防のために	
	文化とコロナ	石鹸から貢献	
	息のしやすい世の中へ	「織細さん」が元気であるために	
	新型コロナウイルスと地域社会	生活の変化とこれからの社会	

II 文理融合のカリキュラム開発

	医療従事者の仕事の多忙さ	少子高齢社会とコロナウイルスに打ち勝つために
	現代社会における犯罪への認識	犯罪で溢れる社会での倫理の価値
	これからの医師、看護師に求められていること	誰もが安心して医療ケアを受けるために
	十分な睡眠とその必要性	睡眠を通して見るストレスの問題
	学校における昼食後の昼寝時間確保の必要性について	午後の思考力・集中力・記憶力を高めるために
	新生児医療を東南アジアの地域で身近にするための母子手帳の活用	母子手帳は日本から外国へと渡る中でどのように形を変えれば良いのか
	産婦人科医不足を解決するには	守ろう 子供と妊婦の命
	チーム医療 どうして医療事故減らないのか	情報共有ミスの原因
	人との大切な関わりをいつまでも	年代の幅を越えて第二の家族に
	災害現場で迫られる選択	一人でも多くの命を助けるために
	現代のストレス社会	ストレスとの共存
	子供の貧困と医療の介入	子供の貧困に気づくには
	赤ちゃんポストの必要性	赤ちゃんポストが社会に与える影響
	日本の医師不足の現状と解決策	地方で最低限の医療を受けられるように
	意外と身近な現代の病	サイレントキラーと呼ばれるワケ
	トリアージと患者	より多くの人が助かるように
	気付きで救える尊い命	児童虐待と産後うつに向き合う
	看護師のコロナストレス	看護師のメンタルケアのためにできること
	農村医療	今わたしたちにできること
	医師の多忙	医師の仕事を減らすために
	尊厳死法制化の問題点と必要性	人々の健康と考えの尊重
	変わる高齢者医療	超高齢化社会の中で認知症から考える
	感染症への迅速な対応のために	過去と今の資料を今後に生かす
	赤ちゃんポストと親	捨てられる、虐待される子供たちを救うために
	暮らしているだけで健康に！？	ナッジ理論から考える一人ひとりの行動改革
	死ぬ権利とこれからの生き方	人の尊厳のあり方
	私たちの身近にある在宅ケア	より良い在宅医療を受けるために
L テクノロジー	ナノテクを私たちの生活にどのように応用していくのか？	ナノテクを生活の中に取り入れていくメリットとデメリット
	AI との付き合い方	AI と共存していくには
	ナノテク技術を使い人々を助ける。	～動けない足から動ける足へ～
	VR 技術の発展による様々な恩恵	便利な世の中を目指して
	自分らしさ溢れる社会へ	AI と人間の拮抗
	プログラミング教育の必要性	AI が拓く未来
	ドライバーレス社会が救う人の生活と社会 in 世界・長野	自動運転が普及するにあたって人々の生活・命にどう影響するか
	視覚障害の方に触って感じてもらう世界遺産	人のためだけでなく環境のためにも
	日本の洋上風力発電の拡大	島国ということを生かす
	日常的な資源消費の軽減	生物模倣技術を使った製品の活用

(4) 授業の評価 (生徒より)

- ・物を多角的な視点から考えられるようになった。課題に対し解決策を見つけるのを積極的になった。一つの判断材料にこだわらずいろんな情報をもとに判断することができるようになった。
- ・SDGs が身近に感じられるようになり、日常から少しずつ意識するようになった。ニュースや新聞、世界の課題などに興味を持つようになった。
- ・課題に対しての反対意見も踏まえながら、課題解決のために何を、何に、どうするかを考えるということが少しできるようになった。また、それによって自分に足りていない力がわかった。

(5) 総括・課題と改善点

- ・日常生活の中で、自分の立てた課題やそれ以外の社会問題にも興味関心をもち、情報を集めようとする様子が見られるようになった。
- ・自分の意見だけではなく、他人の意見や反対意見も踏まえて考察できるようになった。
- ・課題を探究する過程で、先生に話をしたり、外部の方にインタビューをするなどの行動ができた生徒が多くいた。
- ・課題解決のために活動を行うまで到達した生徒が少なかったため、実際に効果検証をするまでつなげる展開を考える必要がある。

II 文理融合のカリキュラム開発

4 グローバルスタディ IIE (英語) Global Studies II English 2021

(1) **Aims:** The focus of the Global Studies II: English (GSII:E) activities and coursework this year was to increase students' abilities to think logically, conduct research, and share their ideas and information with others. Throughout the year students simultaneously developed their ICT skills by using computers and software to plan, prepare, collaborate, write, deliver and evaluate presentations on a variety of topics.

(2) **Year Project Schedule:** This year's four presentation projects are outline in the table below

Period	Project Contents and Description
April- June	i. Presentation and Debate Skill Level Up Project
	<p>1.English Speaking Skills Self-Assessment:</p> <ul style="list-style-type: none"> Self assess speaking skills using the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR). ICT skills introduction: Login to and navigate google classroom. Use Google Forms to enter speaking skills self-assessment data. <p>2.Individual Presentation-Informative</p> <ul style="list-style-type: none"> T-shirts self-introduction: Make a short self-introduction presentation entirely in English with handmade visual aids. <p>3. Team Presentation-Persuasive</p> <ul style="list-style-type: none"> “3 Reasons Ueda SHS is the best school in Japan”: Develop research and source-verification skills, as well as Collaboration and Presentation skills to create a persuasive presentation. Develop ICT skills: Use Google Docs to create scripts, Slides to create and present visual aids, as well as Forms to enter rubric-based peer evaluation data. Impromptu debates (Individual and Teams): Construct logical arguments in English starting with an opinion and then constructing a thesis statement with supporting points and evidence.
July	<p>★ Independent Research:</p> <ul style="list-style-type: none"> Define topic, and research the background and current situation / problems relating to an SDG.
Aug- Nov	ii. Taiwan Research Project
	<p>1.Compare & Contrast - Informative Speech</p> <ul style="list-style-type: none"> Team Research: Form teams around a topic. Plan, research and create a Taiwan presentation. Compare & Contrast Team Presentation: Share Docs and Slides, and collaborate. Develop communication skills for presentations and discussion based on rubric. <p>2.Taiwan Online Exchange</p> <ul style="list-style-type: none"> Presentations, Questions & Conversation: Design discussion questions and formats. Cultural Exchange & Opinion Sharing: Hold presentations and discussions for classmates.
Dec- Feb	iii. Independent Research Project
	<p>1. Academic Essay Writing: Compose and revise short summary essays about individual Independent Research Project topics</p> <ul style="list-style-type: none"> Research Project English Summary Interview Abstract and Title Writing: Prepare short English speeches using topic-specific technical language to explain students' research processes, information, and results

II 文理融合のカリキュラム開発

	<p>2. Academic Presentation</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Research Showcase English Presentation Q&A session: Present English speeches using summaries and outlined ideas to an audience of peers, school members, community members, and invited English teachers from other schools
Feb-March	iv. SDGs Donation Pitch & Course Reflection
	<p>1. Sales Pitch - SDGs Donation Pitch:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Identify a target SDG, problem, and place to help with ● Design a product to help with the SDG ● Create and deliver a pitch to classmate ‘donors’ to attempt to gather needed donations for the project. <p>2. Course reflection: End of course reflections were conducted with each class and feedback gathered.</p>

(3) Project overview: Projects were completed individually, in pairs, and in small groups to foster collaboration skills. Each project had its own learning goals and rubric for marking. Additionally, each had a self-evaluation and peer-evaluation component. Students completed these peer/ self-evaluation assessment forms online and gained increasing awareness of the components and skills of effective presentations as well as ICT competencies.

(4) Project samples: Below are photos of the students in the process of working on worksheets and materials related to each project, as well as using ICT, collaborating, and presenting.

i. **Presentation and Debate Skill Level Up Project.** ICT Skills, CEFR Speaking skills Self-Assessment, & Self-Introduction Presentations. The first project began with students answering questions about themselves and creating a visual aid in the shape of a t-shirt with symbols and pictures to represent their answers. Following that the ‘Ueda SHS is the Best School in Japan!’ PR Presentation Project began. Students each brainstormed three reasons to support the position that Ueda SHS is the best school in Japan. They wrote individual essays giving their reasons and examples to support the opinion. Next, they formed eight groups and worked together, combining their ideas to create a single presentation script on the topic. After that, they learned how to make visual aids using google slides and created their PR presentation. The groups rehearsed their presentations and then each presented to the class. This was followed by self and peer evaluations based on the rubric. Evaluation focused on timing, structure and content, appearance and style of visual aids. voice, eye contact and audience engagement.

ii. **Taiwan Research Project:** Compare & Contrast Presentation Project For this compare and contrast presentation project, students generated a list of topics they were interested in researching and presenting on. They then formed eight groups around those topics. In their teams they decided on three aspects of their theme to compare and contrast. They then researched and completed a presentation script, and created a visual aid using google slides. After rehearsals, all teams presented their research and were evaluated by themselves and their peers on the contents, visual aids and their presentation skills and style. Evaluation data was then entered into a google form.

iii. **Independent Research Project:** Students crafted an English abstract that summarised the contents of their year-long Japanese research in GSJ as accurately as possible. During the process they presented their work to classmates and gave mini presentations. After completing the abstract students wrote a title and then each students’ work was printed and given for their presentation. Finally, students presented their research to an audience of teachers and peers online, and participated in Q&A feedback sessions.

iv. **SDGs Donation Pitch & Course Reflection:** This exercise was to reflect on development and integrate skills learned during the year. Students were invited to notice their progress since the beginning of the course. Following that, in groups of four they identified a need in the world that related to an SDG and used their imagination to create a product to meet that need. After completing the script for the product pitch they competed for donations by pitching their product to groups and then to the class. This concluded the course for this year.

II 文理融合のカリキュラム開発

Photos of students in the process of working on project worksheets, using ICT, collaborating, and presenting.



(5) Summary and improvement for next year: Feedback from students at the end of the course indicated that they had experienced an increase in their confidence and ability to use ICT, as well as collaborate with others and deliver presentations. Additionally, it was evident in their written work and interactions that students' logical reasoning and ability to provide support for opinions had steadily increased throughout the year.

In addition to supporting students to develop their ICT, collaboration, and communication skills, next year I would like to see the students be able to produce even higher quality work with greater ease. One area which could be improved for greater success in that regard is the fostering of closer alignment between the contents of the English Communication and GSIIIE curricula. By introducing the structure and language required for each project at the same time, and mutually reinforcing them, students will likely perform at an even higher level in the coming year.

II 文理融合のカリキュラム開発

5 グローバルスタディ III

(1) ねらい

WWL 全員カリキュラム（グローバルスタディ I II）で実施した課題研究をキャリアに応じて更に深化させる。

課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。

北陸新幹線サミットを主催し、WWL 高校生と課題研究をカテゴリー別にプレゼンテーションし、ディスカッションする。

(2) 年間計画（シラバス）

月	学習内容
4	北陸新幹線サミット準備 課題研究（調査）
5	北陸新幹線サミット準備 課題研究（まとめ）
6	北陸新幹線サミット 課題研究（論文作成）
7	論文作成
その他	校外プレゼンテーション



GSIII 選択者は北陸新幹線サミット
実行委員として企画運営も担当

(3) 授業の概要（主な取組）

この授業では、課題研究と北陸新幹線サミットの企画・運営を行った。

課題研究では、週一回日本語（木曜日放課後）と英語の講座（水曜日放課後）に分かれて授業を行った。各自がテーマを設定し、休日に個人で企業や学校、市役所等に出向き、調査や提案等を行った。自分の行ってきた活動を含めて論文等を作成した。受講者の研究テーマについては、(5)に載せた。

北陸新幹線サミットでは、オンライン参加の方と会場に来て参加する方の両方がいることを念頭に北陸新幹線サミットの企画を行った。当日は4つの分科会に分かれて、SDGsの目標達成のための、アクションプランを作成した。分科会のテーマを下記に載せた。

分科会テーマ

第I分科会

テーマ	一步踏み出そう 地球の未来を守るためのアクション
ディスカッション①	私たちのどのような行動と意識が環境問題を引き起こすか
ディスカッション②	地球環境を守り、持続可能で豊かな生活を実現するために私たちができるアクションとは

第II分科会

テーマ	今日から住み続けられるまちづくりのためのアクション
ディスカッション①	地域社会の希薄化が及ぼしている影響について
ディスカッション②	地域社会を活性化するために私たちから始める小さな一歩

第III分科会

テーマ	いのちのかたち、たすけあいのかたち
ディスカッション①	私たちの健康・いのちに対する意識と今必要とされている助け合いとは何か
ディスカッション②	私たちにもできる助け合いのかたちとは

II 文理融合のカリキュラム開発

第IV分科会

テーマ	International Comparison of COVID-19 countermeasures 「コロナ対策の国際比較」
ディスカッション①	Compare and contrast COVID-19 countermeasures and experiences of different countries around the world. 「各学校の国や地域におけるコロナ対策を比較する」
ディスカッション②	What changes would we, as high school students, continue after the pandemic that help create a sustainable society? 「現在のコロナ対策をアフターコロナの時代にどのように活用していくべきか」

(4) 総括・課題と改善点

今年度のGSⅢは、北陸新幹線サミットの企画・運営を生徒主体で行うことができた。対面者とリモート出席者がいる状況は初めての試みであった。会場のレイアウトや機材の関係など、前年度のマニュアルがない状況だったが、試行錯誤をしながら、サミットを開催していくことで、リモートでのディスカッションの方法について確立することができた。

課題研究では、自分の研究に対し、自分で予定を立て時間を見つけて研究することができた。また、GSⅢでは、外部に調査に行くことが求められているため、各自が企業などの外部の団体に、アポイントを自ら取り、調査を行っていた。今年度の生徒の中には、市長へ自分の考えたアプリの提案を行った生徒や地域のショッピングモールにお願いをして、ショッピングモールに買い物へくるお客に「エシカル消費」を広めるイベントを催した生徒がいた。このように、主体的に研究をする姿がみられた。

GSⅢの課題は、今年度は週1日2時間程度（木曜日放課後）の授業を行った。この授業の内容は北陸新幹線サミットの準備であった。そのため、課題研究の時間を確保することが難しく、生徒の課題研究の振り返りや計画を見直す時間等がとれなかった。また、募集の段階で、平日の放課後に時間の都合がつかず、受講を断念する生徒もいた。上記のことを改善するために、来年度のGSⅢの授業の形態、内容について検討していく必要があると考える。

(5) 選択者の研究テーマ

1 A (女)

1年	GS I	時事問題 外国人労働者
2年	GS II	課題研究 幸せの基盤～自分の幸せと他人の幸せを守るために～
3年	GS III	課題研究 “見えない貧困”を心でみよう ～子どもの今と未来を守るために～
進路	進路先	東京学芸大学 E類 教育支援課程 カウンセリング

2 B (女)

1年	GS I	国際 メキシコ難民
2年	GS II	課題研究 発展途上国の現在と私たちにできること ～私たちの知識と技術で持続可能な支援を提供する～
3年	GS III	課題研究 How effective is the direct support that is provided to developing countries?

3 C (女)

1年	GS I	保健医療 遺伝子組み換え技術
2年	GS II	課題研究 「IoTと高齢化社会」
3年	GS III	課題研究 「水で熱中症を予防しよう」

II 文理融合のカリキュラム開発

4 D (女)

1年	GS I	時事問題 震災遺構の保存
2年	GS II	課題研究 「お薬手帳の活用について」
3年	GS III	課題研究 「出会いの場の必要性」

5 E (女)

1年	GS I	時事問題 外国人労働者について
2年	GS II	課題研究 「右利きの世界で生きること」
3年	GS III	課題研究 「自分をコントロールするために」

6 F (女)

1年	GS I	保健医療 不妊手術の強制について
2年	GS II	フィリピンと日本の医療格差
3年	GS III	小児医療における在宅医療の支援のあり方

7 G (女)

1年	GS I	時事問題 グレタさん
2年	GS II	課題研究 「エシカル消費で変わる未来」
3年	GS III	課題研究 「エシカル消費で変わる未来」

8 H (男)

1年	GS I	国際平和 核兵器禁止条約
2年	GS II	課題研究 「核兵器廃絶への動き」
3年	GS III	課題研究 「北東アジア非核兵器地帯構想の実現可能性」
進路	進路先	名古屋大学 法学部 法律・政治学科

9 I (女)

1年	GS I	国際 トランプ大統領は移民を受け入れるのか
2年	GS II	課題研究 「外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ」
3年	GS III	課題研究 「外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ」
進路	進路先	Fraser International College (カナダ)

10 J (女)

1年	GS I	国際 アメリカの移民問題
2年	GS II	課題研究 「水は子供たちの命と未来を守る」
3年	GS III	課題研究 Safe water for all children in the world
進路	進路先	金沢大学 人間社会学域 国際学類

11 K (女)

1年	GS I	地方創生と人口減少の関わり ～未来を担う私たちが考えなければならないこと
2年	GS II	課題研究 住みたくなるもどりがなくなる 長野県のまちづくり ～長野県の活性化～
3年	GS III	課題研究 WHAT IS THE REAL FAN ?

II 文理融合のカリキュラム開発

6 (株) KDDI 共同プロジェクト 「課題研究テーマの見つけ方」

(1) ねらい

今年度 GS I では問題解決学習を重視して、そのために企業の持つ柔軟性やイノベーションに学ぶこととし、連携機関である(株) KDDI の支援を得て、課題の発見や仮説の立案に焦点を当てた教育活動に取り組むこととした。

(2) 概要

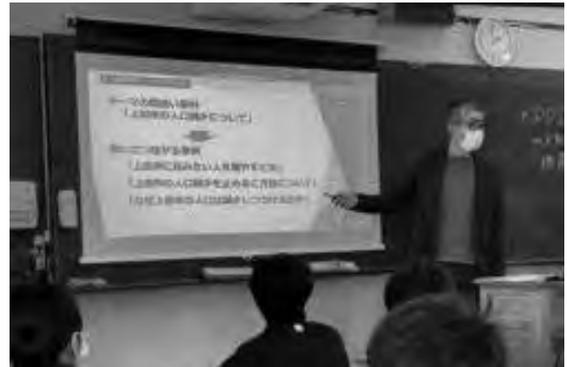
KDDI 地方創生推進部マネージャー横幕秀明さんによる講演と学年一斉かつ HR 単位でのワークショップを2回企画した。5月には「ワクワク探し」を提唱していただき、9月末には集めた「ワクワク」から課題を見出し、問いの立て方に至る課程を実践してみた。

(3) 日時

第1回 5月6日(木) LHR時

第2回 9月27日(月) 5時限

GS I の授業内(授業交換による一斉授業)



(4) 参加者

1年生全員

(5) 実施内容

(第1回) 「進路選択への第一歩! ワクワクを探そう!」

将来の自分の進路選択にも関連して、自らが持つ様々な関心事を書き出し、そこから自分のなりたいニーズを見出し、自分がどうなりたいかを模索することの重要性を指摘した。

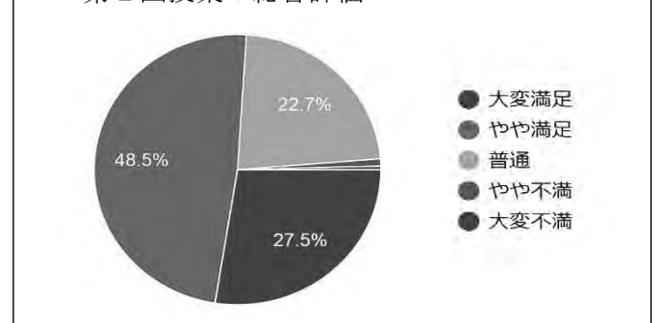
(第2回) 「課題研究テーマの見つけ方」

4カ月間に集めた「ワクワク」を素材として、自分が関心を持つキーワードを抽出、さらにそれを分解して、解決したい「問い」を立てることまでの道筋を説明した。

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・課題研究のテーマを決める際に「誰かのためになること」ということも大切だと知って、私が追究したことが誰かの役に立つものになればとてもやりがいのあることだなと思いました。
- ・自分の知らない世界に触れることができた。とくに、隣の人と自分の考えたテーマ(仮)を分解したものを見せあったことで、「そういう目線もあるのか」と思うことができた。
- ・「広く考えず、実現が現実的な課題を見つける」という言葉が今回最も印象に残った。小さくても課題解決に一步踏み出すことが重要だと思った。
- ・ワクワク集めによって今社会が抱えている問題について知ることができた。また、キーワードを分解することでテーマを身近なところまで引き寄せることができたのでためになった。

第2回授業の総合評価



(7) 評価と考察

課題研究は、ややもすれば壮大なテーマに関する「調べ学習」となりかねない。KDDI 横幕さんは、自分の将来の夢や、身近な関心事と結びつけて問いを立てることの重要性や、壮大な問いを立てることの予防策も語ることで、生徒の不安を取り除いてくださった。また、IRでも今年度、全クラスで1人1回は時事問題に関する新聞記事を報告する活動を展開し、GS授業との連携ができた。その際に、今年度から全員が持つようになったタブレットPCが大いに役立った。

II 文理融合のカリキュラム開発

7 JICA * ICAN 連携による国際理解教育 「世界が 100 人の村だったら」

(1) ねらい

連携機関 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所と共同して作成した、国際理解教育カリキュラムの学年行事である。様々な疑似体験を伴うワークショップや講演を通じて、世界の構造やその矛盾、さらには国際協力の現場を実感し、グローバル課題解決に向けた学習の機会とする。

(2) 概要

講師 木島 史暁氏 (JICA 国際協力推進員)

直井 恵氏 (WWL 海外交流アドバイザー、NPO 法人アイキャン代表)

場所 1 年各 HR、第 1 体育館

(3) 日時 10 月 7 日 (木) 第 5・6 時限

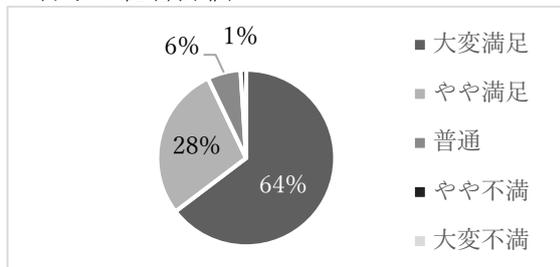
(4) 参加者 上田高校 1 学年生徒

(5) 実施内容

各ホームルーム教室において、2 年生を進行役としてワークショップを実施した。年齢、性別、宗教、所得、居住地域、言語などを記した「役割カード」を各人が持ち、様々なテーマ別に集団を作り、世界や国内の現実の疑似体験を行った。続いて、学年全体場で講師の方の講演を聞き、グローバルな視点から平和や人権について考察を深めた。

(6) 生徒の感想・アンケート

ア 行事の総合評価



イ 本日のワークショップで気づいたこと

- お金がないと嫁としての価値が下がり殺されてしまうというインドの結婚制度が衝撃的だった。
- 字が読めなかった時はヒヤリと不安が襲ってきて、文字を読めない不利に気付かされた。
- 5 秒に 1 人が飢餓で亡くなっているのに、日本の食品ロスが世界の食料支援の 2 倍もあることに驚いた。
- 私たちにとってはただのワークショップの一環だけれど、世界には私たちが体験したことが一生続いている人がいるということに気づいた。

ウ 世界の格差を解決する方法

- 先進国の技術を伝えるなどの支援やフェアトレードの商品を買う。
- 募金に積極的に参加したり、食品ロスを減らすなど身近なことから行う。
- 先進国から一方的に支援を与えるのではなく、先進国と途上国が互いに良い影響を及ぼす。
- まずは世界で起きている格差について知ることが 1 番大切だと思うので、新聞や本などで調べる。

エ 本日のワークショップの全般的感想

- SDGs を世界のこととして考えるのではなく、「ジブンゴト」として捉えるのが必要なのだと思った。
- 日本に住んでいるとなかなか実感が湧かない国際問題について、ワークショップを通じて可視化することで、国際問題に対する意識を更に高めることが出来た。
- 言葉が読めない、お金がないことから引き起こされる命の差別はあまりに残酷であり、知らないフリをしてはならないと気づくことができた。
- わかりやすく楽しい時間を過ごせましたが、内容は重く、考えを深められる時間になった。

(7) 評価と考察

1 学年人権平和教育を兼ねて実施した。前半の各クラスにおけるワークショップでは、昨年度この講座を受講した 2 年生が司会進行を担当した。先輩によるメンター制度は生徒間においても定着しているため、学年を超えた取組として今後も継承していきたい。後半の講演では、ウガンダにおいてボランティア活動に従事された木島史暁さん、フィリピンの社会問題に取り組む直井恵さんを講師に迎え前半の解説も踏まえてお話いただくことで、生徒がグローバルな諸課題について関心を持つ契機となった。

II 文理融合のカリキュラム開発

8 JICE との連携授業 「地域に暮らす定住外国人との共生について考える」

(1) ねらい

日本で暮らす定住外国人の抱える課題、「外国人就労・定着研修」事業、さらには外国人支援の取組を支える現地連絡調整員の業務について理解を深めるとともに、グループごとのワークショップを通じて、地域社会で暮らす定住外国人との共生について考察を深める。

(2) 概要

外国人就労・定着支援研修を担当されている4名の現地連絡調整員の方からご講演いただいた。

講師 ウラコワ マハバット氏（キルギス出身）
原田 エリオ 知博氏（ブラジル出身）
脇田 ルリコ氏（ブラジル出身）
国吉 文子氏（ブラジル出身）

場所 1年各HR教室（14日実施クラス）、自宅からオンライン接続（15日実施クラス）

(3) 日時 2月14日（月）、2月15日（火） 3時限～6時限

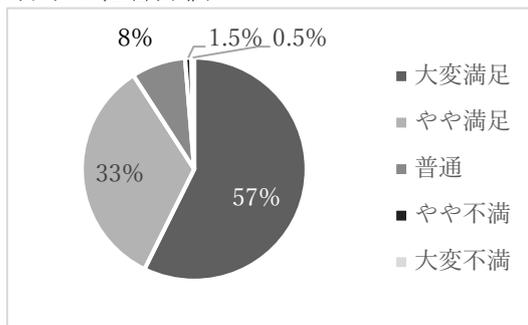
(4) 参加者 上田高校1学年生徒

(5) 実施内容

4名の講師が2つのクラスを担当し、時間、のべ8回にわたって講演やワークショップを実施した。生徒は「地域に暮らす定住外国人との共生のために今自分ができること」を考察した。

(6) 生徒の感想・アンケート

ア 行事の総合評価



イ 地域で暮らす定住外国人の状況について

- ・上田市に住んでいる在日外国人の人数が多くその中でもアジア系の人が多いことに驚いた。
- ・外国人だというだけで部屋を貸してくれなかったり、働けないという現状を知った。
- ・文化の壁、言葉の壁、制度の壁、心の壁が定住外国人を苦しめていることに気づいた。

ウ 現地連絡調整員の方の講話より

- ・外国ルーツの方が日本に馴染めるようにするだけではなく、その人たちの文化も大切にして、維持していけるようにすることが重要だというお話がとても印象に残った。
- ・外国人に対して、無理に英語で話しかけるより、簡単な日本語ならわかるので優しく日本語で話しかけたほうが良いということが分かり、固定観念を覆された。
- ・もっと外国人の人が住みやすい日本にするために、私たちの心がけが大切だと思った。

エ 地域に暮らす定住外国人との共存のために、私たちが今できることは？

- ・外国人だからと差別するのではなく、同じ人間として平等に接すること。
- ・困っている外国人がいたら声をかけて易しい日本語やハンドサインを使って説明する。
- ・留学生や他国籍の生徒の母国の文化や言語を学ぶ機会をつくる。
- ・地域にいる外国人と挨拶を交わすなど、日々の繋がりやコミュニケーションを大事にする。

(7) 評価と考察

一般財団法人 JICE（日本国際協力センター）の支援を受け、コロナ禍を考慮してオンライン形式での実施となった。講師の方々と生徒は直接対面できなかったものの、1人1台ずつタブレットPCで接続していたこともあり、質疑応答の時間に積極的に質問が出された。本授業は、日本の人口の約2.4%を占めるものの意外に気付きにくい在留外国人の現状を、生徒が自分ごととして捉える機会となった。

III より深い学び（探究的な学び）

1. 県内フィールドワーク（1学年）

（1）ねらい

- ・長野県、特に上田市近隣の企業・研究機関と連携し、地域でのフィールドワークを通して、SDGsに関連した課題の解決方法を考え、社会に発信していく。
- ・連携企業・研究機関の最先端の学問や技術に触れるとともに、自らのキャリアプランの形成とこれから始まる課題研究の基盤とする。

（2）概要

クラスを2つに分け、上田市の企業・団体計16コースを設定した。総合的な探究の時間の枠組み内で実施した。

（3）日時 9月15日（水）

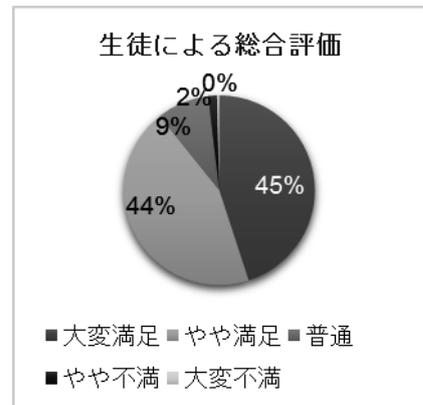
（4）参加者 上田高校 1学年

（5）実施内容

事前学習として、研修先の方に考えていただいた、SDGsや企業の社会貢献に関連した課題について、グループ毎解決策を考えた。また、研修先と連絡を取り合い、それぞれの解決策を深めた。研修当日は、考えた解決策を企業・団体の方に発表し、アドバイスをいただいた（オンライン実施）。事後学習として、個人でレポートを作成した。

（6）生徒の感想・アンケート

- ・SDGsを達成するために、農家だけではなく私達消費者が積極的に関わっていくことが大切だと知った。消費者がSDGsを意識した生活へシフトしていくことで、農家も持続可能な開発に向けての取り組みの幅が広がると思った。（研修先：有限会社ウッドベルファーム）
- ・日なた堂ベーカリーさんで行っている国産物の使用や、化学物質を使わないこともSDGsの課題の解決につながるということが分かった。（研修先：日なた堂ベーカリー）
- ・文化と言うのは国と国だけではなく地域と地域、学校と学校、家庭と家庭、世代と世代など解像度を上げることによって全てが文化の違いになることがわかった。（研修先：上田市多文化共生推進協会）



（7）評価と考察

今回はすべて上田市の企業・団体に協力していただいた。身近な企業・団体の課題解決に取り組むことで、自分たちの生活に関わる新たな気づきが生まれた。また、自身の課題研究のテーマを考えるきっかけとなった。事前学習として、実際に企業を訪問したグループやオンライン等でやり取りをしたグループと、発表当日に初めて画面越しに対面したグループに、差がでてしまった。担当教員や企業による裁量も残しつつ、ある程度決まった型を示しながら実施できると良かった。生徒の中には、他の会社とフィールドワークをやっている人の様子を知りたいというものもあり、校内で共有できる機会がとれると良い。限られた時間の中で、事前学習・発表練習・情報共有等、何に重きを置くか考えつつ、より充実させた活動にするため、その都度工夫していく必要がある。

<研修先および取り組んだ課題>

1組	<p><u>VALUE BOOKS</u></p> <p>世の中で変えたいと思うことはどんなことか？ それが今の状態である原因は何か？ どうしたら変えられるか？</p>	<p><u>コムパックシステム株式会社</u></p> <p>①輸送包装分野において、環境保護、SDGs達成に貢献するために、お客様にどのような商品開発、提案ができるのか？②これまでの梱包資材以外の用途でダンボールという資材を活用してSDGsに貢献できることは何だろうか？</p>
2組	<p><u>マリモ電子工業株式会社</u></p> <p>「SDGsに役立つ工業（電気）製品を考えてみよう」SDGs 17の目標達成に向け、どんな工業製品の開発が考えられるか、アイデアを出し、その実現性を探る。</p>	<p><u>株式会社見える化</u></p> <p>外国人共創社会の中、外国人労働者（アジア）の皆さんは何故日本に来て働いているか。</p>

III より深い学び（探究的な学び）

<研修先および取り組んだ課題>

3組	<p><u>シスラボ・スエヒロ</u> 中小企業の環境への取り組み ・なぜ大企業と中小企業の環境への取り組みに差があるのか ・中小企業の環境への取り組むべき課題と提案 ・中小企業のSDGsへの取り組み方の提案 ・中小企業のゼロカーボンへの取り組み方の提案</p>	<p><u>(有) ウッドベルファーム</u> 1. 日本では、肉類やコメ・野菜等の食料生産のための原料・燃料を輸入に頼っている部分が多い。この状況下でどうすれば持続可能な農産物生産を行えるか。 2. 農業現場では休暇の取得が難しい。また、生産物の販売価格等も自分で決めることが困難なため収益率が低く、農業に取り組む人が減少している。このような労働条件・労働環境を改善するにはどうすればいいか。</p>
4組	<p><u>日なた堂ベーカリー</u> 生徒たちがキッチンカーのオーナーだったら、地域のどこで、どんなパートナーたちと、どんなイベントを開催するか？ そこでは何を提供するか？ そしてそれはなぜやりたいと思うのか？ SDGsのどのゴールの推進につながるのか？</p>	<p><u>小柳産業株式会社</u> 1. 日本で排出される廃棄物の種類 2. 廃棄物のリサイクル(再利用)方法 3. これからの産業廃棄物処理業界のあるべき姿をSDGsとからめて検証 4. 産業廃棄物処理業界が魅力的な産業になるために必要なものは何か(若い人は何を求めるか) 5. 小柳産業(株)ができる社会貢献活動とは</p>
5組	<p><u>シナノケンシ株式会社</u> 当社が展開する4つの事業分野(①車載分野、②自動化分野、③医療分野、④環境分野)について、それぞれの分野ごとにSDGsに絡めた課題を考え、解決策を提案する。</p>	<p><u>一般社団法人ローカルカラー</u> 1. 企業の掲げる「SDGs」を達成するために現場で働く人たちの「SDGs」に対する意識を高めるためにはどうすればよいか。 2. 地元のお店を利用してもらうにはどうしたらよいか。</p>
6組	<p><u>上田市多文化共生推進協会 [AMU]</u> 1. 多文化共生(文化が異なる人同士が共に生きていく社会)では、一人ひとりの市民(私)として何が必要か。 2. 上田に暮らす外国籍市民が抱える問題にはどういったものがあるか、(自分が海外で暮らすと考えた時、何が課題となりそうか)インタビューを通じて考える。</p>	<p><u>株式会社インターサポート</u> 1. 「SDGs」達成のために「保険」ができることは？ 2. 魅力ある「保険代理店」とは？ 3. 中小零細企業にBCP(事業継続計画)策定や、「健康経営」を普及させるために「保険代理店」ができることは？ 4. 若年層や高齢層の交通安全意識を高めるために「保険代理店」としてできることは？ 5. どのような「保険」があれば安心か？</p>
7組	<p><u>株式会社アトリエデフ</u> 1. 食品に関わる問題: 普段口に入っている「小麦粉・チョコレート・牛肉」が我々の口に入るまでに、どのような過程を経ているのか。 2. 竹林に関わる問題: 竹林を、何に活かすことができるか。 3. エネルギーに関わる問題: 毎日使っている電気はどこからきているのか。</p>	<p><u>上田プラスチック株式会社</u> 大課題: SDGsの観点から、10年後の上田市の理想像を考える 「環境課題」「社会」「経済」×「ダイバーシティー」 「素材としてのプラスチック」 大課題に向かって、自分たちが「今できること」「できていること」「やりたいこと」、社会に「やってほしいこと」</p>
8組	<p><u>NPO法人 上田市民エネルギー</u> 1. 『公共施設のエネルギー性能についてー上田市新庁舎から考えるゼロカーボン』上田市新庁舎のエネルギー性能、機能などについてヒアリングし、これまでの建築物との違いや2050年までにゼロカーボンにするにはどのような工夫が必要か考える。 2. 『上田高校のエネルギー性能についてー教室から考えるゼロカーボン』</p>	<p><u>上田ガス株式会社</u> 1. SDGsの目標達成に向け、地域の課題および上田ガスができる地域貢献について考えよう。 2. カーボンニュートラルに関する項目について調べよう。調べた事項と低炭素社会・脱炭素社会の結びつきを考えよう。(項目: 分散型エネルギーシステム/スマートエネルギーネットワークなど)</p>

III より深い学び（探究的な学び）

2 探究の日（2学年）

（1）ねらい

- ・自ら考察した課題を他人と意見交換し、広い視野で再度試行錯誤する。相手とのコミュニケーションをすることにより、今まで気が付かなかった点に気づいたり、新たな発想を得たりする。
- ・先生や友だちなどから助言をいただくことにより、探究を一層深めるきっかけをつくる。
- ・自身のキャリア（進路）を見据え、興味関心のある分野について探求を深める。
- ・台湾の文化や歴史を学びながら、世界に目を向けるきっかけをつくる。
- ・オンラインでも活動や発表ができるスキルを身に着ける。

（2）概要

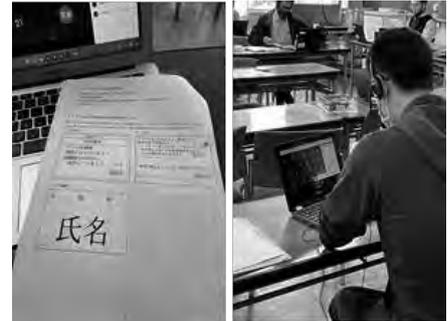
第1日目はオンラインで課題研究中間発表会、
第2日目は登校し台湾のリサーチ活動を行った。

（3）日時

9月14日(火)、9月15日(水)

（4）参加者

2学年 318人



（5）実施内容

第1日目

- ・AMは自宅で午後の発表準備、資料集め、台湾リサーチを個人で実施。
- ・PMは自宅から Google classroom 上にある発表会のグループに接続し、オンライン上で中間発表会を行った。（詳細は以下に記載）

第2日目

- ・登校して活動した。台湾リサーチと進路講演会を実施。

中間発表会内容

事前に生徒は発表項目①、②、③や、研究の概要を発表できるように準備。

A~Lまで研究内容別に全12カテゴリー、そのなかで1~5グループに分かれる。カテゴリーごと以下のように発表と質疑応答を行った。以下1回のセッションを3~4回繰り返した。

時間	担当グループ	内容	備考
5分	1	作成した用紙を用いて研究発表	グループから1人指名します。聞いている人はメモ。
2分	2	発表者の発表項目①「研究の概要」について感想・アドバイス・自分に活かせそうなこと、など発表	
2分	3	発表者の発表項目②「研究の手法」について感想・アドバイス・自分に活かせそうなこと、など発表	
2分	4	発表者の発表項目③「難しかったこと」について感想・アドバイス・自分に活かせそうなこと、など発表	
2分	5	発表者、それぞれの感想、全体を聞いて、感想・アドバイス・自分に活かせそうなこと、など発表	
2分	先生	全体へのアドバイス	

（6）生徒の感想・アンケート

- ・似たような研究をする生徒と自分の研究や比べて、自分に足りないものを見つけることができた。2月の本番に向けて根拠のある発表になるように材料を探したいと思った。
- ・基本的にいつも自分の感想をもっている状態でいられた。率直に楽しかった。
- ・他者がどのような方法で研究を進めてきたのか今まであまりわからなかったので大変参考になった。

III より深い学び（探究的な学び）

- ・オンラインだったけれどみんなわかりやすく発表していて良かった。また、ひとつの課題に対して自分とは違う視点で質問を言っていたので、そういう捉え方もあるのか！と思い、良い刺激になった。
- ・発表者や感想を話した人の意見が自分に活かせることが多く、自分の論文の問題点も分かり良かった。
- ・一人の発表を聞かせてもらうだけでもとても勉強になったが、その発表に対して意見などを出し合うことによって、より一層考えが深まっていくことが実感できたので良かった。自分と似たような研究をしている人がいることがわかって、共感できることとかも沢山あったのでとても良い機会になった。
- ・自分の研究に圧倒的に経験やインタビューなどの活動がないことを思い知らされた。オンラインだと自分のマイク感度が弱いようで相手に聞こえるように話すのは難しく、こういうツールでの発表の難しさを感じた。発表者の話し方、構成、内容はとても為になるもので、諸問題を考える良い機会だった。
- ・一年生にもみてもらいたかった。
- ・学年に同じテーマの論文を書いている子の発表を聞いて、もし時間があつたら同じテーマの子と意見交換する時間があれば嬉しいなあと思った。
- ・データや数字を用いた人の発表はより分かりやすくなると思った。ゴール(解決しなくてはいけない課題など)を決めてからどうすれば達成できるのか、何が必要なかを逆算して考えていくことは今後の人生にも役立つと思った。また、一人の人にインタビューすることも良いが、何十人、何百人もの人に聞くことによって偏るところとなく考える事ができるようになると知った。これからも今日他の人の意見や発表を聞いて考えたことや新しい発見を自分の研究や今後の人生に取り入れていきたいと思う。

(7) 評価と考察(先生方より)

ア 企画、準備段階について

- ・生徒も先生方もクラスルーム作り、meet の活用など勉強になる部分が多かった。
- ・時系列に詳細に計画されていて、各担当が進行しやすかった。
- ・突然の企画変更にもかかわらず、最大限のことができたと思う。

イ 9月14日(火) PM 中間発表会について

- ・対面でできればよかったかもしれないが、今回のスタイルもやる価値は十分あった。中間発表会というものが今までこれほど大きな規模でできなかったのが実施できたこと、それを可能にした先生方のご協力とご理解が大きかった。
- ・思った以上に生徒は質の高いプレゼン、質問ができ、次に期待したくなった。
- ・コメントを出してもらおう中で、同じカテゴリーということもあり、同じようなテーマの発表もあり、相互に意見交換したり、自分の研究内容の一部を紹介したりなど、こちらが思っていた以上に生徒同士がグループ内の発表に関心を持ち、積極的に発言していて、とてもよい中間発表会になったと思う。オンラインでの実施ではもったいないくらいの状況だった。
- ・話し方、発表の仕方などについても意見してくれる者もあり、項目以外の指摘もありよかった
- ・とても充実した発表会になっていた。ほぼ全員が発言し、内容に深化が見られた。
- ・オンラインではどうなるかと思っていたが、多くの方は真正面から課題に取り組んでいて、そのことが画面越しにも伝わってきた。聞いている教員側も面白かったし、生徒も刺激になったと思う。
- ・次第に慣れ良くなった。生徒はしっかり考えていた。次回やれば互いにもっと良くなると思う。
- ・生徒がファシリテーターをできればなと思ったけど、まずは教員がやってみないと無理か。
- ・発表を聞いているとまだ上手くまとめられていない生徒もいたので、やはり「先生にプレゼンする」「友だちに聞いてもらってチェックをもらう」など徹底して他者からフィードバックをもらえるようにすれば、省察できるのではないかと思う。

ウ 9月15日(水)について

- ・与えられた課題を与えられた時間の中でチームで協働してどのように進めるか、その実践のひとつの場として昨年に引き続き時間を設けてもらっている。あまり教員が指示を出さず生徒たちに時間の使い方も含めて考えさせる、こういう時間も生徒に必要な時間かなと思う。
- ・講演会の内容が小論文の書き方にとどまらず、ものの見方や考え方などを教えていただけだったので、課題研究や今後の自分の生き方などについてももう一度見つめなおす時間になったと思う。

エ その他

- ・2日間とも充実した内容であり、SDGs に対する認識の深化も見られたと思う。

III より深い学び（探究的な学び）

3 第1回アカデミックプレゼンテーション

(1) ねらい

海外研修体験者を中心とした生徒のプレゼンテーション能力の向上と、WWL 事業の一般への公開

(2) 概要

テーマ 「世界から、地域から、課題解決を考察する」

日時 4月17日（土）12時30分～13時45分

場所 上田高等学校 会議室

助言者 直井 恵氏（海外交流アドバイザー）

(3) 発表内容

- ① NZ 留学体験記
- ② ヒューマンアクトインマニラ研修報告
- ③ ポストスタディプログラム研修報告
- ④ 発展途上国の現状と私たちにできること

(4) 聴衆のアンケートや、助言者の講評より

- ・日本だけで想像するだけではなく、実際に現地を知ることは大事だと感じた。
- ・様々な分野のプレゼンを聞くことができ、行動力と、自分で考えて伝える大事さを学んだ。
- ・今まで留学は自分には向いていないと思っていたけれど、今日の話聞いてとても興味がわいた。
- ・もっと聴衆とコミュニケーションをとっているとさらに良かった。

(5) 評価と考察

この行事は本来、公開授業 PTA 総会にあわせて実施され、中学生や保護者、新1年生などに本校の WWL 活動を紹介していくものだったが、今年度はコロナ禍のなか、校内の生徒、発表者の保護者対象の企画となった。3月のスタディツアーが全て中止となったため、オンラインを利用した活動の報告、留学体験報告が行われた。参加生徒は意欲的に取り組み、質疑応答も活発に行われて、学校全体にも活力を与えることとなった。



4 第2回アカデミックプレゼンテーション

(1) ねらい

自らの活動を地域のなかで広く発信することを通じて、グローバルとローカルの視点から課題解決を考察する気運を醸成していく。

(2) 概要

テーマ 「世界から、地域から、課題解決を考察する」

日時 10月9日（土）12時30分～13時45分

場所 上田高等学校 会議室

助言者 直井 恵氏（海外交流アドバイザー）

(3) 発表内容

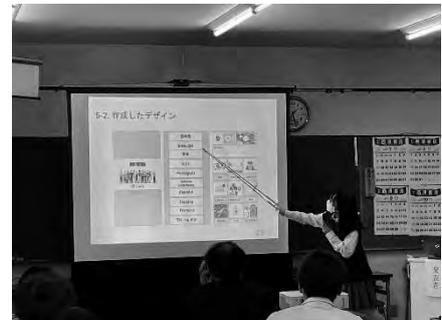
- ① 民話と演劇
- ② 外国ルーツのこどものための日本語教室
- ③ 上田市の顔国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ

(4) 聴衆のアンケートや、助言者の講評より

- ・3つの発表とも熱のこもったもので感動した。すべての発表がこれからの人生に活かしていける内容だった。夢を持ってこれからも進んでほしい。
- ・発表はどれも素晴らしかったと思う。もっとたくさんの市民の方々に共有してもらっていい。
- ・3グループともよく原稿を練っており、分かりやすく説得力のある発表だった。
- ・誰かの役に立ちたいという気持ちだけでなく、自分から行動し、誰かの力になっているのがすごくカッコいいと思った。人と人との交流や人前で発表するというのを大切にしたい。

(5) 評価と考察

この行事は、本来夏季休業中の海外体験の発表が軸になって行われるものだったが、コロナ禍のなか、外国籍の方々と交流や支援などの、地域での諸活動を通じて課題解決のために尽力する高校生の発表を軸とした。1年生からは、今年度から研究を始めたテーマについて、現在までの成果の報告があった。海外体験ができない中、いま、ここでできる活動に触れ、聴衆のなかには、先輩の活動に加わった生徒もあり、活動の裾野が広がる契機ともなった。



III より深い学び（探究的な学び）

○午後

探究ワークショップ

13:30-15:20 2030年度の上田高校について考える
Is our School Sustainable? (English Room 1つ、日本語部屋1つ)

Step1 | 2030年の「ミライ」の上田高校に向けて ~「イマ」の上田高校の「ここが変!？」~

Step2 | 「一番気になる」課題の本質を見極める ~5W1Hの視点からの「分解」~

Step3 | 課題に対して私たちができることを考える ~「ミライ」を創造する挑戦

Step4 | 考えたアイデアをもとに、「ひとつこと多いキャッチコピー」を考える

○外部よりオンラインで管理機関、連携校等より接続あり



↑午前中のポスターセッションの発表の様子。発表者、聴衆ともに自宅からオンラインで繋いで、画面を共有しながら研究発表が行われた。

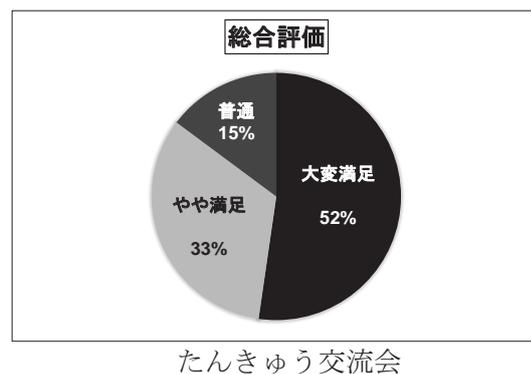
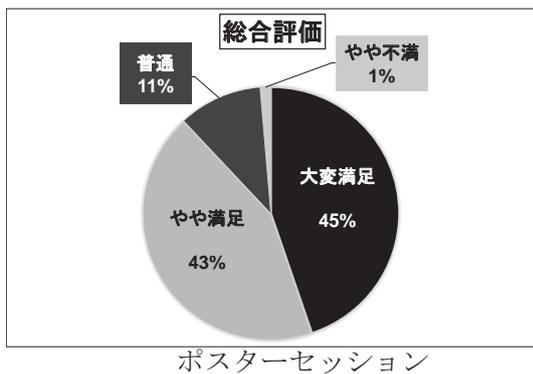


↑午後の探究ワークショップの様子。本校生徒に加えて、連携校から参加の生徒、職員、管理期間の方も含め熱心に意見が交わされた。

III より深い学び（探究的な学び）

（3） 生徒の感想，アンケート

- ・自分の興味のある内容について今どんなことが行われているか、今後どのようにすればよいかなど知ることができた。
- ・アドバイスなどを先輩自身から積極的に教えてくれた。司会者の先輩がいろいろな人に発言権を与えて全員が均等に話せる空間でとても良かった。
- ・どの発表も深掘りされた内容で、実際にアクションを起こして課題解決に取り組んでいた2年生もいて、自分もこのようにまとめていきたいと思った
- ・先輩方の発表は、図やアンケートを適当に利用し、わかりやすい構成になっていたので、説得力がとてもあった点。
- ・これからの1年生の課題研究に向けての姿勢に大きく有効となるものがあり素晴らしかった。
- ・オンラインでしたが、だからこそコロナ禍のこの状況の中でも1人1人の表情を見て話し合えたのはとても良かったなと思います。
- ・今後の探究活動のヒントになるととてもいい機会に参加してよかったです。
- ・英語でディスカッションするのは楽しかったし、他の人の考えを英語で理解するのも楽しかった。楽しかった。



（4） 評価と考察

年間の WWL 諸活動の集大成を発信する行事として企画されている。今年度は感染予防対策のため本校を会場に、完全オンラインで、web 会議ツールを利用した開催となった。構成も昨年度までの、プレゼンテーションとポスターセッションの形式から、ポスターセッションとディスカッションの形式に変更した。

午前中のポスターセッション、交流会では、各自家庭からオンラインで繋ぎ、カテゴリー別グループの Room でポスターセッションを行った。各 Room では1年生と2年生の混合グループが編成され、それぞれの発表についての質問、意見交換を行った。話し合いを通して多角的な視点が身に付けられた。

午後は複数のグループに分かれて探究ワークショップを行った。10年後の上田高校をテーマにグループごとにアクションプランを考えた。連携校の生徒職員、管理機関からの参加者も交えて、熱心な議論となった。「ENGLISH ROOM」も設けられ、オンラインを併用した交流も為された。

行事が制約される中、工夫をしてこのような行事を行うことには大きな意義がある。

IV 国際的な学び

1 上田高校の海外研修の概要

(1) ねらい

探究活動を通して世界のグローバル課題を学ぶなかで、研修先の国・地域の特性や諸問題へ視野を広げるとともに学際的な学びを体験する機会とする。同年代や異なる文化的背景を持つ人びととの対話を通して、多様な価値観に触れ、リアルな現場を見ることによりグローバルな視点から自身の探究課題を捉え、かつ身近な地域でも活動する意欲・行動力を育成する研修プログラムを目指す。

(2) 本校の海外研修・海外交流の概要

台湾研修旅行(2年生全員)

総合的な探究の時間の一環として、2年次の秋に全員が台湾を訪れ研修を行う。台湾と日本に共通する社会課題について、大学や医療機関、地元企業などを訪問し、台湾の実情を見聞し、意見発表を行う。現地の高校生との交流や、活気ある台北の街を散策するなど異文化を体験する。



現地の高校を訪問しプレゼン交流

ヒューマン アクト イン マニラ (希望者選抜)

フィリピンで貧相の支援を行う認定 NPO 法人「アイキャン」の活動に参加し、路上の子どもたちやごみ処分場の見学を通して格差問題や環境問題について考える。現地の子供たちや住民との交流を通じて、フィリピンの参加型の自立的な生活向上について学ぶとともに、自分たちにできる支援のあり方について考える。



マニラ首都圏スラム街を見学

ボストン スタディ プログラム (希望者選抜)

ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学および周辺施設の研究所などの学術機関を訪れ、事前にしたプレゼンテーションの指導をうける。論理的構成からなるアカデミックプレゼンテーションの基礎を学ぶとともに、講師との意見交換を通じて最先端の教養に触れ、学問の枠を超えて異分野が協力する学際的研究の重要性を理解する。



MITで講師とディスカッション

カンボジア井戸プロジェクト(生徒による自主活動)

フィリピンでの研修で、社会の格差を目の当たりにした生徒たちが「自分たちにできる支援の形」を模索する中で立ち上げたプロジェクト。SDGsの目標のひとつである安全な水へのアクセスを可能とするために生徒が主体となって行う活動。自らの手で資金を集め、カンボジアのシェムリアップ地区へ実際に赴き井戸を掘り、現地の人々に寄贈する。



カンボジア井戸掘削作業

※今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、現地への渡航が中止となったため、研修はオンラインで実施した。

IV 国際的な学び

2 台湾高級中学オンライン交流

(1) ねらい

台湾高級中学との異文化交流と英語など多言語によるコミュニケーション能力の向上を図る。

(2) 概要

【交流校】 国立苗栗高級中学（苗栗県） 国立科学工業園区実験高級中学（新竹県）

私立延平高級中学（台北市） 台北市立中正高級中学（台北市）

4つの学校に2クラスご分かれ、11月23日（火）勤労感謝の日をメイン日とし、一人一台タブレットを使ってGoogle Meetによるオンライン交流を行った。少人数のグループに分かれて以下の日程で事前打ち合わせも併せて3カ月間にわたり交流を行った。

(3) 日程

8月～9月上旬	台湾交流系の職員顔合わせおよび打ち合わせ（オンライン） 交流校とクラスの決定
9月中旬～11月	生徒グループ分け オンライン接続テストを兼ねたオンラインミーティング（交流内容の相談）【生徒】 自己紹介、学校紹介ビデオの交換（Flipgridを使用）【生徒】
11月23日（火）祝日	オンラインメイン交流日 苗栗・延平・中正 午前グループ（2組4組7組） 10:00-12:00 午後グループ（3組5組6組） 15:00-17:00
12月8日（水）	8組 オンラインメイン交流日 工業園区 13:00-
12月9日（木）	1組 オンラインメイン交流日 工業園区 11:50-

(4) 参加者 上田高校2年生8クラス（318名）

(5) 実施内容（各校の交流の様子）

オープニングセレモニー（メインルーム） ・学校長挨拶・生徒代表の挨拶			
メインセッション（ブレイクアウトルーム）小グループに分かれて交流			
2組6組 【苗栗】	4組5組 【延平】	3組7組 【中正】	1組8組 【科学工業園区実験】
・アイスブレイク ・ペーパークラフト “You teach me, I teach you” 上田からは年賀状（後日互いの学校に郵送）の書き方を教え合う。	・アイスブレイク： Two Facts and One Lie about Me Quiz about Our School ・ペアになったグループで決めたトピックについてディスカッション交流（日本語・中国語講座、学校のユニークな校則・食文化・食事・COVID-19についなど、文化・教育・グローバル課題について自作のスライドや動画を共有しながらプレゼンテーションを行った。）		
クロージング 生徒お礼のことば・記念写真撮影			

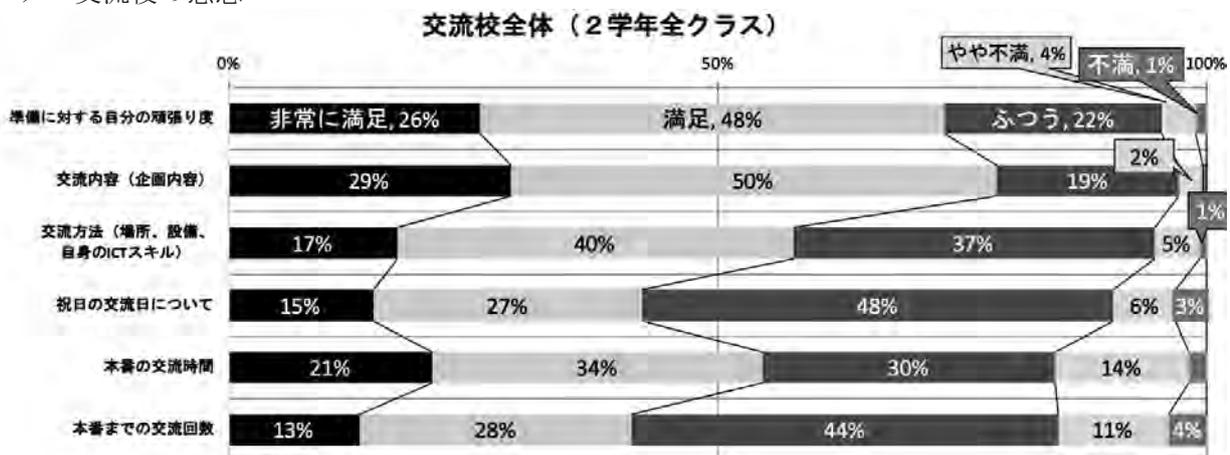
※事前に Flipgrid（教育用動画投稿プラットフォーム）を利用して自己紹介ビデオ・学校のバーチャルツアービデオを交換しながら事前交流を進めた。10月にはペアになったグループと顔合わせと交流日のトピック決めをオンラインで行った。その後メールやLINEなどで連絡をとりながらグループごとメイン交流日の準備を行った。

IV 国際的な学び

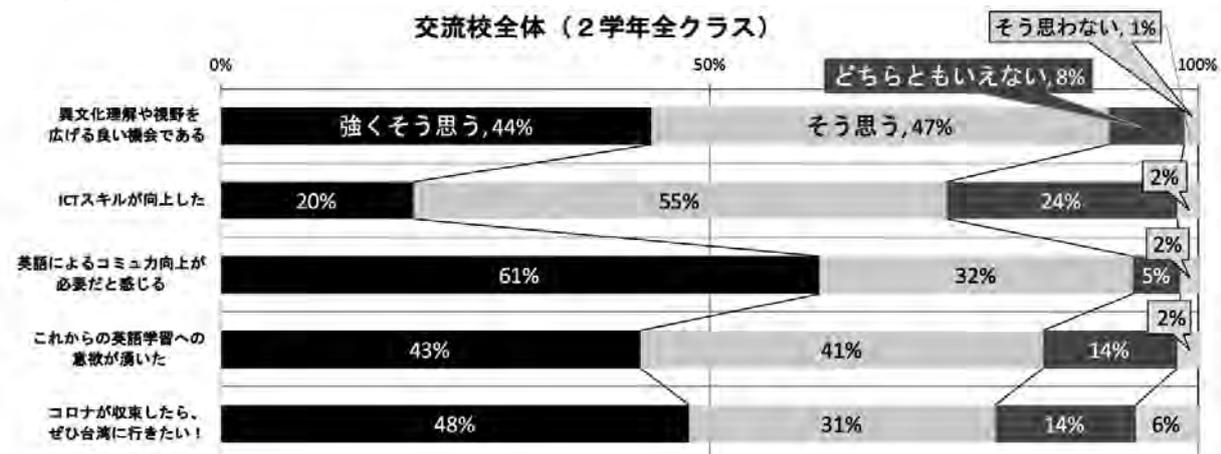


【左上】事前に自己紹介とバーチャルスクールの動画を作成し交換
 【左下】タブレットでおにぎりの作り方を
 中継
 【右】苗栗高級中から送られてきた年賀状

(6) 生徒の感想・アンケート ア 交流後の感想



イ 交流のビフォーアフター



(7) 評価と考察

すべての教室に Wi-fi が整備され、一人一台タブレット端末の利用が可能となったことから、今年はいくつかのグループで交流を行い、一人ひとりがより能動的に関わることができた。アンケートからも今回のオンライン交流の満足度は高く 8 割以上の生徒が「台湾にぜひ行きたい」と回答している。ICT 環境が整備されたことで今まで以上に海を超えた交流が身近になったと感じる。画面越しではあったが、同世代の生徒同士が英語や中国語でリアルに言葉を交わし互いに刺激を受け学び合う機会となった。

IV 国際的な学び

3 香港 高校生オンライン交流

(1) ねらい ・香港高校生との異文化交流 ・英語コミュニケーション能力向上

(2) 概要

香港にある慕光英文書院 (Mu Kuang English School・高校) と本校の1クラスが、コミュニケーション英語 I の授業で、計2回オンライン交流を行った。クラス全体が一堂に会してのオンライン交流であり、撮影用の端末1台、発表用の端末1台、マイク2本を使用。

(3) 日程 6月23日(水)、29日(火)

(4) 参加者 本校1年3組 40人・慕光英文書院 30人

(5) 実施内容

6月23日(水)

・アイスブレイク (20分)

慕光英文書院の生徒が画面共有をしながらタブレットに絵を描き、本校の生徒がそれを見て何を描いているか分かったら、そのものの名称を英語で言う。

・学校紹介 (20分)

それぞれの高校を、スライドを用いて英語で紹介する。(発表とは別に、事前に、町や学校紹介のビデオを作成し、交換。交流前に授業で視聴した。)



6月29日(火)

・トピックプレゼンテーション (20分)

それぞれの観光名所・食べ物について、ビデオやスライドを用いて英語で発表する。

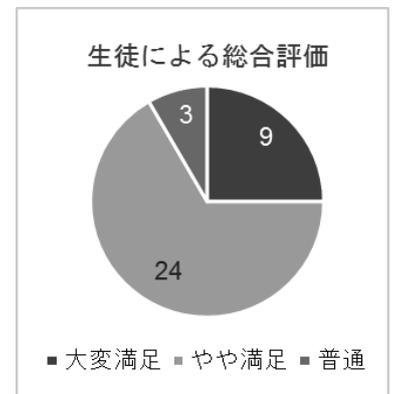
・広東語、日本語の紹介 (20分)

それぞれの言語での、数の言い方や、あいさつおよび自己紹介で使えるフレーズを紹介する。

※学校紹介、トピックプレゼンテーション、日本語紹介は、代表生徒による発表。

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・自国以外の人と実際に関わってみて文化とかいろいろなことが違うことを学べたし、もっと他の国について知ってみたいと思った。
- ・質問などに恥ずかしがらずに答えたほうがよかった。もっと質問すればよかった。教えてもらった言葉をメモなどしていつでも見返せるようにしておけばよかった。
- ・英語の話し方や、スピードや、なまりなどが、日本と違っていて、慣れなくて難しかったけど、楽しかったし、海外に行って勉強したいと思いました。
- ・英語を通して実際に会話ができるという事を知れて、英語を学ぶ事の意味や目標を再確認することが出来た。



(7) 評価と考察

今回の交流では、クラス対クラスで実施をしたが、人前で話すことに抵抗を感じる生徒もおり、なかなか積極的に発言できない場面も見られた。できるだけ少人数での交流にする(グループ毎、1対1)、もしくは、全員必ず発言しなければならない場面を作る等、一人一人が当事者として交流できるとなお良い。また、机を使用せず、椅子のみを並べて交流をしたが、お互いが発表をしているときに、メモが取りやすいようレイアウトを工夫できると良い。

今後やってみたいオンライン交流として、対決形式のゲームやそれぞれの国の遊び(日本では、カルタなど)というものがあった。



私の名前は です
Watashino
namaewa desu
I'm . 我叫 .

日本語紹介発表
スライドの一部



香港の紹介ビデオより

IV 国際的な学び

4 ヒューマン アクト イン マニラ (令和2年度3月の報告)

(1) ねらい

- ・ プログラムを通して、異文化理解、多文化共生、国際関係など多角的な視点でグローバル課題を発見し、課題を分析し、解決策を探究出来る人材を育成する。NGO 団体や政府、企業などの発展途上国における様々な立場での役割を学び、比較して考察する。グローバルとローカルの両面から課題が探究できるリーダー性の基礎を作る。
- ・ 現地で活動するNPO 法人アイキャンのスタッフや住民の方との交流を通して、フィリピン住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ。積極的に意見交換や交流をしながら学ぶ。

(2) 概要

- ・ 事前に1日講演会を行い、事前学習とする。
- ・ 3月の4日間において、現地のビデオ映像を見たり、オンラインテレビ会議システムでフィリピンとリアルタイムでつなぎ、NPO 法人アイキャンのスタッフや住民の方との交流を通して、フィリピン住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ。積極的に意見交換や交流を行う。

(3) 日程

事前研修(基礎理解) (2月中旬 講師来校し講演会)

オンラインセッション (2021年3月17日~20日の4日間 オンライン開催)

(4) 参加者

上田高校 9名(2年7名、1年2名) 野沢北高校 2名(2年2名)

(5) 実施内容

3月17日(水) 12:00-15:00	・オリエンテーション(研修概要、フィリピン概要、自己紹介等) ・アイキャン・フィリピン人スタッフとの交流 ・アクティビティ①
3月18日(木) 12:00-16:00	1、路上の子どもたち ■貧困問題とそこで闘っている元路上の青年たちから学ぶ ・路上の子どもたちのプロジェクト事業地の紹介(ビデオ・パワーポイント) ・ブルメントリット地域散策・家庭訪問実施(ライブ中継) ・「子どもの家」の子どもたちの紹介、インタビュー ・カリエメンバー紹介、アクティビティ②
3月19日(金) 12:00-16:00	2、パヤタスごみ処分場 ■ごみ山からの健康被害や貧困に対し、母親たちが協力して運営する住民組織から学ぶ ・ごみ処分場周辺に住む人々のプロジェクト事業地と背景紹介(ビデオ・パワーポイント) ・地域散策→家庭訪問(ライブ中継) ・住民組織(SPNP・PICO)紹介、インタビュー(ライブ中継) ・フェアトレード商品説明、販売
3月20日(土) 12:00-17:00	3、世界の課題解決に取り組む日本人 ■様々な立場から世界の課題解決に取り組む日本人の話を聞き、キャリア形成における視野を広げる 様々なフィールドで活躍するゲスト3名を呼び、講演及び質疑応答 4、ふりかえり

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・ 講演や交流を通して、国際協力の観点で今まで自分は本当に主観的な考えしか持っていなかったのだと思い知らされた。お話の中で「相手の立場に立つ」ことや「ニーズに応える」という言葉が多く出てきたが、現地で活動してきた方々だからこそその言葉の重さや厚みがあってその重要さを痛感した。この4日間は私にとって人生の分岐点になると思うので、この経験を糧に自分の進路選択をして、いつかは自分の手で困っている人を助け、平和に貢献していきたいと改めて強く感じた。
- ・ 「あたりまえ」の有り難さに気付けたし、家族にもこの経験を伝えられたので良かった。

(7) 評価と考察

- ・ オンラインではあったものの、現地の方とリアルタイムで質問のやりとりをしたり、様子を見たりすることができ、事前に調べて得た知識より厳しい現実があることを痛感できた。
- ・ 生徒たちが考えたことなどを共有する時間が少なくなってしまったことで、自分たちがどのようなアクションができるのかということまで考察できなかった。来年度は今後の行動につなげたい。

IV 国際的な学び

5 ポストスタディプログラム（令和2年度の実施報告）

(1) ねらい

ハーバード大学やMITを有する学術都市ボストンとリモートでつなぎ、グローバル社会で活躍する講師陣に対してのプレゼンテーションを通して英語による学術プレゼンテーションの手法を学ぶ。講師との意見交換を通じて先端教養に触れ、学問の枠を超えて、異分野が協力し合う学術的研究の重要性を理解し、地域規模でSDGsを考え持続可能な社会への貢献の可能性を見つける。

(2) 概要

テーマ：「SDGsで考える持続可能な上田・長野のまちづくり」

講義およびディスカッションテーマ：

- ① 環境、都市再生、災害対策から考える持続可能なまちづくり
- ② 食と健康、多文化共生から考える持続可能なまちづくり
- ③ 歴史とアイデンティティーとの関係から考える持続可能なまちづくり

(3) 日程

【基礎研修】12月～2月 毎週火曜日 【ライブセッション】3月17日～20日（4日間）

(4) 参加者 10名 上田高校7名（1年） 篠ノ井高校3名（1年1名、2年3名）

企画協力および研修指導：蝦名 恵氏・猿橋 あや子氏

(株) BOSTON BRIDGE to Higher Education

(5) 実施内容

1日目：ボストン白熱教室 in 上田高校 開校式、講義：「学術都市ボストンとは」

2日目：講義：Getting Lost Finding Myself—My Dream & My Future の発表

講師：ダニエル・ボアーズ氏（パインメナーカレッジ ELT 総括責任者）

3日目：講義：UEDA and SHINONOI Students and their Future-Designing for a Better World

講師：ポール・ルケッツ氏（建築博士 元MIT教授 Paul Lukez 設計工房主宰）

発表①：Revitalizing Unno Shopping Street-Unique approach via renovating alleys-

発表②：Self-sufficient Electric Supply System-Use of Local Resources-

4日目：テーマ：Role of Dietary Intake and Lifestyle in Depression

講師：マリアン・ファービッド氏（ハーバード大学公衆衛生スクール Research Scientist）

発表：Mental Health Support Network in Ueda High School

-Psychological issues revealed by COVID-19



(6) 生徒の感想

- ・ 「新しいアイデアは知識のため池から浮かんでくる」という先生のことばに、「今勉強していることが直接将来の夢に繋がらなくても、知識のため池を作るために勉強する」と考えたらこれから勉強を少し頑張れそうな気がしました。
- ・ Paul先生の講義では、感激しっぱなしだった。考えもしないアイデアはどこから生まれるのだろうと思った。コロナで空白になるはずの4ヶ月がとても充実したものになった。
- ・ 「自分の力で少しだけ世界を良くしよう」ということばに、今まで漠然としていた夢がより具体的になったような気がします。

(7) 評価と考察

今回は篠ノ井高校からの生徒も参加し、学術プレゼンテーションの基礎講習からライブセッション本番まで3ヶ月間の研修を行った。リアルタイムでの講師による講義と対話を通して、学際的な学びと学問とは何かを知り、自分の生き方についても考える機会となり、参加した生徒にとっては、刺激的で充実した4日間になったと感じる。

IV 国際的な学び

6 海外留学・進学セミナー

(1) HLAB 懇談会・サマースクール (オンライン)

ア 開催期日 8月13日(金)～8月17日(火) 5日間

イ 内容

メンターによる講座、社会の第一線で活躍している方による講演・パネルディスカッション、大学生や社会人とのディスカッション、答えのない問いに対して参加者同士が協同して創造性を発揮するワークショップ等

ウ 参加生徒の感想

私はHLABを通して絶対的な答えなどないということに気づきました。私は今までたった一つの絶対的な答えをどんな時も答えようとしていたのでその気付きは私にとって衝撃的なものでした。

また、HLABではかけがえのない人たちに出会えました。特に、共に過ごす時間が長かったHOUSE11のファミリーたちは、5日間しか一緒にいなかったのにものすごく信頼できて、尊敬できて、大好きな人達です。これもHLABがとにかく素敵な場所だったことを表していると思います。

私のこれからの目標は、HLABでの経験を「いい経験だった」で終わらせず、HLABに参加したことではっきりした、やりたいことに向かって進んでいくこと、そしてHLABで学んだ考え方や、できたつながりを大切にしていくことです。きっと、進むべき道がわからなくなったら、最高に暑い夏に何十枚も書いた裏紙を見返して、あのとき語り合ったすべてを鮮やかに思い出すのでしょうか。宝物をたくさんくれたHLABに私もいつかメンターとなって帰って来たいです。(1年)



当日の様子

(2) 留学フェロシップ海外進学・留学講座 (オンライン)

ア ねらい

グローバル化が加速する社会において求められる豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を涵養するため、多様な価値観に触れる機会を設定し、高校生に国際的な視野を持たせ、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材の基盤を形成する取組の一環として、海外大学の学生や留学経験者等による海外進学・留学講座を実施する。

イ 実施期日 第1回 7月24日(土) 13:30～16:30

第2回 7月25日(日) 9:30～12:30

ウ 講師 NPO法人留学フェロシップの海外の大学に在籍する日本人学生

エ 本校参加生徒 11人

オ 内容

- ・日本人の海外大学生による海外進学及びグローバルな学びに関する講話・ワークショップ
- ・海外進学等に関する個別相談

(3) 中国文化大学進学セミナー (オンライン)

ア 実施日時 5月27日(木) 放課後

イ 参加者 本校教員3名

ウ 大学の特徴

- ・陽明山の恵まれた地理的環境
- ・中国文化に溢れる文化的環境
- ・多様で充実したカリキュラム
- ・華語課程が完備、無料受講可能
- ・国際性を磨く教育環境 等

エ 留学生のデータ (2020年度)

留学生数：1,326名 日本人学生数：88名 (学部生64名、交換留学生24名)

オ 外国人学生受け入れ

全学部：華語能力試験 TOCFL 基礎級 LEVEL 2 資格証明、中国漢語水平試験 HSK 3 レベル

国際・外国語学部 グローバルビジネスプログラム：入学時制限なし。TOEIC640点を卒業の条件とする。

V 高度な学び

1 松尾ゼミナール

(1) ねらい

SGH 指定期間から継続する、国際的に活躍できる人材を育成することを目的に、世界的に活躍する方の講演を聞く企画である。今回はアフリカでサル研究のフィールドワークも経験して、進化論のみならず科学と人間のかかわり方に造詣が深い佐倉統さんをお招きし、探究学習のヒントを伺う機会ともした。

(2) 概要

講師 佐倉統さん（東京大学大学院情報学環教授、科学技術論、進化論専攻）

演題「知は力なり？——科学技術を使いこなすには——」

コロナ禍につき、講師の自宅と全 HR をオンライン会議システム Zoom を用いて、これに向けて組織された生徒の実行委員会の司会進行により実施した。

(3) 日程

5月24日（月）5時限、6時限

(4) 参加者

全校生徒



(5) 実施内容

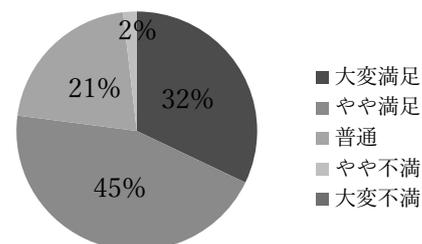
佐倉先生は、学部時代に文系専攻だったものの、大学院ではサル学や進化論を研究、さらに次第に科学と社会の関係へと研究対象を広げていった自らの経歴を紹介しつつ、将来の学問研究において文系理系の垣根がさほど高くないことや人間関係の大切さを語った。また、コペルニクスから近年の AI の発達に至る、主としてヨーロッパの近代科学の発展を概説するなかで、本来科学と哲学は一体のものだったこと、さらには科学が本来世の中に役立つことを意識したものだということを強調された。

そのうえで、「科学を使いこなす」うえで、「科学知」と「生活知」の橋渡しが大切であること、知ることと日常生活のなかで適切にそれを用いることは別物であり、何よりも学問を日々の生活のなかで自分事として勉強しよう、と生徒に語りかけた。

(6) 生徒の感想・アンケート

- ・科学の本来の意味と社会の認識がずれている部分があると感じたので、今回の話の内容が広まるといいと思った。
- ・科学は常に社会のためにあり、研究者の好奇心・利益のために追求するものではないと思った。
- ・「資本主義が高まるからといって、自分達の生活が良くなる訳ではない」という言葉が心に沁みました。
- ・学校は文理の区別をつけない総合型クラスを作るべきだと思う。

松尾ゼミナールの総合評価



(7) 評価と考察

SGH 指定期間中は、主に国際的に活躍する方を講師としてきたが、今年は生徒の探究活動の活性化や文理融合教育を意識して、文理双方に視野を広く持ち、発信活動もしている佐倉さんを招いた。生徒にしてみれば、画面越しの講演でなじめない部分もあっただろうが、終了後のアンケートでは、科学の役割や自分の進路に関して、建設的なものが目立った。生徒主体の運営は、一般生徒にとって講師をより身近に感じる機会になったと思われる。

V 高度な学び

2 1年生課題研究入門講座

(1) ねらい

本講座の目的は、社会で活躍する上田高校の卒業生の講演を聞くことで、生徒が①社会には様々な職業があることを知り、②いくつかの職業について理解を深め（魅力・大事な価値観・現実など）、③自分の価値観や信念とある職業において大切にされている価値観や信念を比較し進路選択に生かすこと、④講演の内容と自身の課題研究を関連させながら、社会にある課題と向き合うことであった。

(2) 概要

日程 2021年10月28日(木) 第1部 13:20～14:25 第2部 14:35～15:40
参加者 上田高校1学年
講師と講演内容 本校の卒業生を講師としてお招きし、1部2部で2度講演をお願いした。講師(12名)と講演内容は以下の表の通りであった。

講師	演題
押金美和(デザイナー)	3つのワークショップを通じて考える「人は何のために働くのか」
山浦善樹(弁護士 元最高裁判官)	弁護士の仕事はなぜ楽しいのか(法律学のすゝめ)
茂田敬幸(茂田社会保険労務士事務所)	社会保険労務士という仕事を知っていますか?
グレート☆無茶(信州プロレスエンターテイメント・長野市議会議員)	未来と自分は変えられる!
伊藤清志(長野県中小企業振興センター)	日本一でなくても世界一になれる (上田高校で一番でなくても世界で一番になれる)
山本 崇(上田市内小学校教員)	外国に行こう! ～高校生時代落ちこぼれだった僕が、海外で働いて得たもの～
中澤洋三(信州大学医学部教授)	小児がん・若年がんの新しい“薬”を創る
宮沢紀美(看護師・保健師)	上田市の保健師として働いて～保健師の仕事を紹介します～
清水 茂(信州大学工学部教授)	信州大学工学部での教授人生 ～ 橋梁工学との出会い
菅沼雅徳(東北大学大学院助教授)	最先端人工知能(AI)技術の紹介と10年前の自分(高校生)に伝えたいこと
宮崎純一(青山学院大学経営学部教授)	サッカーとの出逢いが私にあたえてくれたもの
丸山玄則(朝日新聞社文化くらし報道部)	スマホの情報、本当に正しいの? 報道記者が必要とされる理由

(3) 生徒の感想(生徒の感想から「ねらい」と関わりのある記述を抜粋)

- ・講師の方も今までいろんな仕事をし、経験をして今の仕事に就いたと聞き、今まだ仕事を決めつける必要はなく、悩みながら選択していった良いのだと感じた。
- ・スポーツとの関わり方は、「やる」だけでなく、「観る」「支える」も入っていること。自分はスポーツをやる側しか考えていなかったが、支えるという立場は自分がスポーツができなくなったときに関わるチャンスなので、生涯関わっていきたい。
- ・CAR-T細胞の治療のお話がおもしろかった。今、この瞬間にも何かの研究は進んでいるのかと思うと、ワクワクする。
- ・どんな大学の学部に入っても何にでもなれる。一見関係ない学問でもどこにでも生かせるという話が面白かった。

(4) 評価と考察

感想から、本講座を通じて生徒が、様々な職業に就くことができる可能性を見つけたり、講師の職業について理解を深めたりしたこと、進路についてこれまでの考えが変化したことが分かった。また、社会の課題解決に資する研究に興味を持ったり、学際的な視野を手に入れたりした生徒がいたことも分かった。社会で活躍している本校の卒業生の話を実際に聞くことで、進路選択や課題研究に対する意識を高めることができたと考えられる。

Take Action— 課題研究から発展した生徒たちの様々な自主活動



カンボジア井戸プロジェクト Facebook



中学生学習支援ボランティア



外国籍市民
交流プロジェクト



教室の断熱DIY



フードバンク



MeETree
-高校生のサードプレイス



商店街活性化イベント



外国籍市民のための他言語アプリを市長に提案



多世代が行き交う商店街づくりプロジェクト



エンカル消費を広めるための小学生イベント



教室の寒さを改善 断熱DIYプロジェクト

VII 特色ある取組

校外における研究発表

- (1) エシカル甲子園 11月書類審査
主 催 徳島県教育委員会 徳島県
参加者 2年生2名 1年生1名
概 要
エシカル消費の推進に向けた取組について、地域にとどまらず、全国、世界をフィールドに、高校生等のしなやかな感性と発想で「新しい生活様式」を踏まえてできる実践を募集し、特に優れた取組発表について表彰する。地元の商業施設で5月に行ったエシカル消費イベントを企画・運営した3名の生徒がその取り組みと今後の展望についてまとめた資料でエントリーした。審査の結果、本選進出には至らなかったが、先輩から引き継いだプロジェクトをより発展させるために、これまでの自身の活動を振り返り探究を深める良いきっかけとなった。
- (2) WWL×SGH 探究甲子園
主 催 関西学院大学 大阪教育大学
参加者 2年生1名
概 要
WWL事業とSGH事業等で取り組んだ探究活動の成果を発表する。今年度からより世界に広がる学びを意識し、SDGsという言葉を目録に置き、海外との比較や現地を訪問した際の情報収集のみならず、地球課題のSDGsについてより深い探究活動を展開することに重点が置かれた。本校からは「難民選手団が抱える問題と私たち—難民の受け入れに必要な意義」についての研究を行っている2年生が応募した。
- (3) マイプロ長野県 Summit (高校生学びのフォーラム長野)
期 日 12月11日(土)～12日(日) 9:00-17:00 Zoomによるオンライン開催
主 催 長野県教育委員会 (協力:マイプロジェクト関東事務局)
参加者 2年生4名
概 要
自分発の探究に取り組む高校生たちの学びの祭典として、県内の各校の「総合的な探究の時間」や各教科で行われている「探究的な学び」を通して取り組んできた探究的活動の成果を学校の枠を超えて発表し、学び合い、生徒の主体的な課題の発見や解決に向けて試行錯誤しながら探究していく楽しさを共有するとともに、他者なフィードバックから自分のプロジェクトをブラッシュアップする機会にする。本校からは「商店街再生」「ユニバーサルデザイン」「ジェンダー平等」「教職員の働き方改革」をテーマに探究を進めている2年生4名が自身の研究発表を行なった。
- (4) Learn by Creation NAGANO プレーヤーズコネクト 2021
期 日 12月18日(土) 13:30-15:00 ZoomとYou tube ライブ配信
主 催 Learn by Creation NAGANO 実行委員会
参加者 2年生3名
概 要
「生徒が語る! 高校最前線: 違いを味わう特色ある学び」というテーマで県内から上田高校・須坂高校・白馬高校の学校法人奈良育英学園 育英西中学校・高等学校の生徒と教職員がそれ地域や多様なステークホルダーとの連携など、高校の中に留まらない様々な形で展開されている学び主体的な取り組みについて紹介。本校からは課題研究から発展し、地域や県外の高校生とともに自主的なプロジェクトに取り組む2年生3名の生徒が自身の活動について発表を行い、プロジェクトを通じた人々との出会いや困難、自己の成長について語った。

VII 特色ある取組

(5) WWL 全国高校生国際フォーラム

期 日 12月19日(日) 13:00-16:00 Zoomによるオンライン開催

主 催 文部科学省、国立大学学校法人筑波大学(WWL 幹事管理機関・SGH 幹事校管理機関)

参加者 2年生1名

概 要

全国の WWL 等などの指定に通う生徒たちが、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決に向けた学びを英語で発表するとともに、全国の高校生とアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生が、発表テーマに関する SDGs の 17 目標に関して英語でディスカッションする機会を通じてつながり、今後のネットワークを作る機会とする。本校からは2年生1名が“**Highly Sensitive Person- How Schools can Better Support HSPs and Increase their Wellbeing**”というタイトルで生まれつき非常に感受性が強く敏感な気質を持ったひとたちに対する理解と学校生活でどんな支援や工夫ができるかについての発表を行い、全国の高校生との意見交換を通して、自身の課題研究を深化させる良い機会となった。

(6) ゼロカーボンシンポジウム in 信州上田

期 日 1月7日(金) 13:30-15:00 会場：長野県工科短期大学 (You tube ライブ配信有)

主 催 長野県上田地域振興局

参加者 2年生2名 1年生1名

概 要

社会変革・経済発展とともに実現する持続可能な脱炭素社会づくりを基本目標とし、2050 ゼロカーボン実現を目指した2030年までの行動計画であるゼロカーボン戦略を策定した長野県がゼロカーボンとは何かについて上田地域でゼロカーボンを自分ごととして実践・行動する契機となるよう本シンポジウムを開催した。本校からエシカル消費の理解を促進するための活動をしている2年生2名と1年生1名が5月に実施したイベント活動や校内におけるゼロカーボンにつながる取り組みの可能性について発表し、登壇者とのパネルディスカッションを行い、高校生目線で身近なことから始める取り組みについて発信する機会となった。

(7) 第1回学生ゼロカーボン国際会議

期 日 2月22日(火)～25日(金) 17:00-19:00 Zoom ウェビナー開催

主 催 長野県 カレリア応用科学大学 東フィンランド大学 リベリア専門学校ほか

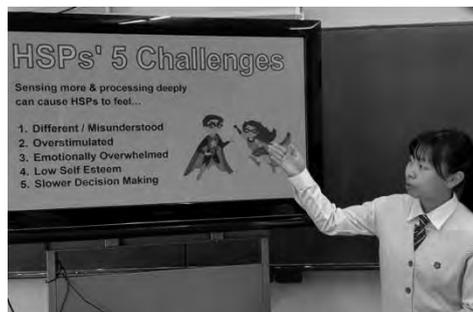
参加者 1年生1名(プレゼンターとして参加)

概 要

気候変動や環境問題に関心のある長野県内の学生および世界中の学生が集まり、「気候変動」「サーキュラーエコノミー」「マイクロプラスチック」「森林資源」という4つのテーマについて世界各地の専門家と学生がオンラインでプレゼンテーションやディスカッションを行う。第1日目には、気候変動をテーマにスペイン、パキスタン、北マケドニア共和国からの報告が行われ、この会議の実行委員メンバーの一人でもあり、12月に教室の断熱DIYを企画した1年生が自身の取り組みについて学生プレゼンターとして発表を行った。



マイプロ長野県 Summit



WWL 全国高校生国際フォーラム



第1回学生ゼロカーボン国際会議

1 文理融合のカリキュラム開発

(1) 学校設定科目「探究」(探究科)

現在は、探究科に学校設定科目「探究基礎」・「探究実践」を置き、「総合的な探究の時間」にこれらをプラスして探究活動を週3コマ実施している。令和4年度からは普通科も「総合的な探究の時間」を1年次に週2コマ設定する。すべての教科に「探究」の横軸を刺す教科横断のカリキュラムを実施し、併せて進学型単位制へ移行する。

2 より深い学び(探究的な学び)

(1) 松本市×縣陵＝「信州学」【1年】

地域の課題を見つけて解決に向けて探究する「信州学」を松本市の協力を得て年間を通じて行った。松本市に探究活動の窓口を置いていただいたことで、各部署とスムーズにつながる事ができた。

4月28日(水)	探究科1年:松本市内ロゲイニング(市内の指定した場所を制限時間内に訪問し、仲間と協働的に地域の課題を発見する。
6月3日(木)	探究科1年:松本市役所の総合戦略室・移住推進課・地域づくり課・人権男女共同参画課職員より松本市の現状についての説明。
夏休み	探究科1年:松本市の課題について探究するため、グループでフィールドワークを行った。市役所への聞き取り、地元企業へインタビューする等。
10月7日(木)	探究科1年:「信州学」中間発表会ポスターセッション
12月6日(月) ～8日(水)	普通科1年:県の東・北部方面へ出かけ、コース別でフィールドワークを行った。主に企業や研究機関、NPO等。新聞形式で探究成果をまとめた。
12月14日(火)	探究科1年:「信州学」発表会。松本市の伊佐治教育長以下、市役所職員40名が参加。ポスターセッション及び代表者によるスライド発表。
1月27日(木)	普通科1年:「信州学」発表会

(2) 北陸研修旅行【2年】

- ・探究科2年:10月20日(水)～22日(金)
- ・普通科2年:12月7日(火)～9日(木)

本来は海外研修の予定であったが、コロナ感染拡大により国内での研修旅行に切り替えて実施した探究科・普通科いずれもSDGsに基づく各自の課題に関するフィールドワークを、石川県金沢市を拠点に、福井県・富山県にて行った。探究科は最終日に金沢流通会館にてその成果を発表し、北陸ESD推進コンソーシアムコーディネーターの池端弘久氏から講評をいただいた。

3 国際的な学び

(1) 多文化共生フォーラムの実施(8月29日)

8月29日、信州大学グローバル化推進センター教授 佐藤友則先生のご指導の下、松本市多文化共生プラザ及びNPO法人中信多文化共生ネットワークの



御協力を得て実施。2回の事前学習を経て、松本市内在住の外国由来の人々60名と、本校探究科34名がディスカッションを行い、多文化共生について理解を深めた。この時の経験をもとに、上記北陸研修にて金沢市の多文化共生施策と比較したほか、12月の「全国高校生フォーラム」において、多文化共生のための課題解決策について英語でプレゼンテーションを行った。

(2) ネパール・オンラインスタディツアー

オンラインでネパール・カトマンズ市（松本市の姉妹都市）と結び、ネパールの課題解決に取り組むPBLプログラムで、昨年に引き続き実施。地元でネパールの教育支援に携わるグローバル教育支援センター市川博美先生、国際NGOプラン・インターナショナルやJICA駒ヶ根のスタッフによるワークショップ等の事前学習を経て、2月5日にはネパールの人々へのインタビュー等を行い、課題発見・解決のプロセスを学ぶ。カトマンズ市の高校生とのオンライン交流も予定。今年度は共同実施校の諏訪二葉高校から1名、屋代高校から2名の生徒が参加した。

(3) 信州大学+マレーシア・プトラ大学との連携事業

信州大学グローバル化推進センター准教授 永田浩一先生・助教 仙石祐先生の御協力のもと、マレーシア海外研修の代替プログラムとして、探究科2年生がプトラ大学の学生とSDGsについてのディスカッションを行った。

(4) 海外大学進学講座の実施

(5) 海外留学・留学生受入れ

- ・フランスからの留学生が7月末で帰国。11月からマレーシアの留学生を受け入れている。
- ・3年生3名が8月より長期の留学に出発（行先はスウェーデン、フィンランド、ドイツ）。

(6) 留学支援プロジェクト

生徒の発案で松本市内に設置した「寄付型自動販売機（売上の一部が留学支援金となる）」により、1年間に集まった寄付金約10万円を、海外留学に出発する生徒に贈呈した。

4 高度な学び

(1) 能登海洋実習（大学や研究施設との連携）

信州大学理学部湖沼高地教育研究センター、金沢大学環日本海域環境研究センター、一般社団法人 能登里海教育研究所等との連携により実施。湖（陸水）と能登半島九十九湾（海水）での最新研究や、陸水と海水の生態系の特徴などを網羅的に学び、生徒自身が水界生態系に関する課題設定を行い、能登半島における2泊3日の海洋フィールド実習でその課題についての実験、検証を行った。その成果を日本比較内分泌学会・日本動物学会中部支部大会等で発表した。



(2) 東京大学金曜講座

東京大学教養学部の高校生対象の公開講座を希望者がオンラインで受講した。

- ・前期：4月16日（金）～7月16日（金）まで全13回 参加生徒のべ87名が受講
- ・後期：9月24日（金）～1月28日（金）まで全13回 参加生徒のべ45名が受講

5 主体的な学び

(1) 生徒会オンライン交流会・オンライン文化祭

昨年に引き続き、文化祭の運営をテーマに、本校生徒を中心に県内の生徒会役員とオンラインで結び、意見交換を行った。

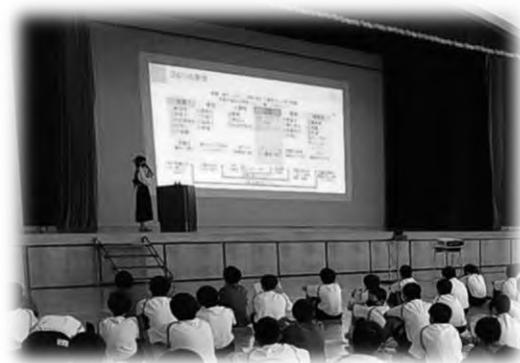
本校は今年度もオンラインを活かし、対面での行事を併用する「ハイブリット型」の文化祭を実施した。コロナ感染対策マニュアルを生徒が作成するとともに、感染予防に最大限の注意を払って時差式展示・発表見学や分散型後夜祭など、苦勞の末に考え出した方法で予定通り実施できた。

(2) 中学生とのオンライン座談会

コロナ禍で授業公開が中止となったことから、中学生にもっと高校生活について知ってもらおうと、中学生とのオンライン座談会を企画、1年生がファシリテーターとなり、高校の学習・部活動の様子や受験勉強へのアドバイスなど、グループごとにブレイクアウトセッションで座談会を実施した。

(3) 中学校との「探究」連携

松本市内近隣の清水中学校へ夏休みに学習ボランティアに出向いたほか、探究成果発表のアドバイスを生徒が行った。また、探究科1年生が安曇野市三郷中学校に出向き、「探究とは何か」について中学生に向けたワークショップを行った。二つの中学校の生徒には、3月に本校で開催される「中信地区探究フェスティバル」にて探究の成果発表を行ってもらう予定である。



6 その他

(1) 成果の普及

本校が先進的に取り組む ICT 活用や探究活動について多くの学校から視察いただくことで、第三者の目で、再度自校の取組を振り返ったり検証したりする機会となった。

- ・ 県内からの視察：8校
- ・ 県外からの視察受入れ：宮城県2校、長崎県2校、静岡県1校
- ・ 教育委員会視察：松本市教育委員会、長崎県教育庁 ICT 推進室、青森県教育庁高校教育課
- ・ 本校主催 ICT 研修会：全県から中学校3校含む21校46名が参加

(2) プラットフォームの活用

- ・ 「マイプロジェクトアワード 2021 長野県 Summit」にて、2年生生徒の個人探究活動が長野県教育委員会賞を受賞した。
- ・ 県議会議員との意見交換会

校長会が主催する「主体性を育む交流会」に参加した本校生徒3名が、ICTの活用やコロナ禍での校行事の在り方等、交流会で出た意見をまとめ、県議会議員に向けプレゼンテーションし、その後意見交換を行った。

須坂高等学校

1 文理融合のカリキュラム開発

文理融合の科目設定までには至っていないが、令和4年度からリベラルアーツ型「単位制」を導入し、3年生の選択科目として「自由選択(1単位)」を設け、受験に必要な科目にとらわれない選択ができるようにする。将来的に、ここに文理融合型の科目の設定の余地がある。

2 より深い学び(探究的な学び)

「総合的な探究の時間」(2年生月曜日6、7時間目)

個人探究+グループ探究で、年度の前半を個人探究として行い、後半をグループ探究としている。最終的には3月に「探究発表会」として、代表者による全校発表を行っている。

3 国際的な学び

「台湾の姉妹校(羅東高級中学校)とのオンライン交流」

年間8回を企画し、全体を通じてのべ300人以上の生徒が関わる活動となっている。

「SAC(須坂アカデミックチャレンジ)2020」

今年度2回目で、11月に1年生全員を対象に実施。

背景の異なる6カ国出身のメンター(講師)から、3日間すべて英語による授業を受けた。



4 高度な学び

「哲学対話」

年2回(7月、9月)、1年生と2年生を対象として対話を大切に活動を行っている。7月は学年別、9月は学年を超えて縦割りでやっている。

テーマは、7月:1年生「学校」、2年生「仕事」、9月:フリートーク

5 主体的な学び

「東京大学金曜特別講義」

「グローバル・キャリア・シリーズ」

「HLAB オンライン討論会」

「主体性を育む交流会 生徒実行委員会」

「古民家プロジェクト」

「全国高校生フォーラム」

長野高等学校

1 文理融合のカリキュラム開発

本校は平成 26 年度から平成 30 年度までの 5 年間は SGH 指定校として、令和元年度から令和 3 年度までは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」指定校として、「グローバルファシリテーター※」育成カリキュラムの構築に取り組んでいる。学校設定教科「SGH」（令和元年度からは「NGP」として継続）を設け、「情報」と「英語」を融合した学校設定科目「英語キャリアプロジェクトⅠ」「英語キャリアプロジェクトⅡ」においてプロジェクト型学習として英語による発信力の養成を目指す。

※ グローバルファシリテーター：グローバル人材として、多様な人とチームを作り、地域の抱える課題の解決に向けた提言ができる人



【写真】 2 年生課題研究発表

2 より深い学び（探究的な学び）

「総合的な探究の時間」を「長野のグローバル戦略を探る（1 年次）」「SDGs から見た長野のグローバル戦略（2 年次）」に編成し、2 時間の授業を連続させた 110 分の授業として 1、2 年次の通常授業の時間割に組み込んでいる。1 年次前半からブレインストーミング体験・ディスカッション講座・インタビュー実践などを積み重ねてスキルを養成、1 年次後半はグループでのフィールドワークに基づく課題研究中間発表を実施。2 年次は個別の課題研究に移行し、フィールドワークを経て最終発表のプロジェクト発表会・課題研究発表会を行い、論文作成につなげる。

3 国際的な学び

1 年次は連携協定を結んだ立命館アジア太平洋大学の留学生と別府市内でフィールドワークを実施する予定。（2022 年 3 月）2 年次は台湾高雄市政府教育局との連携で、7 クラスが現地の 7 高級中学とオンラインで 2 回交流した。事前に作成したビデオを見せながら、会話を楽しみ、国際交流に積極的に取り組む姿勢を育てた。



【写真】 2 年生 台湾とのオンライン交流

3 年次は「グローバルアカデミア国際会議」と称し、ニュージーランド在住の大学教授や台湾、アメリカ等からの参加者とともに「新たなパンデミックに備えた街づくり」というトピックで会議を行った。様々な国の出身者と話すことで、「街づくり」というローカルな話題を多角的な視点から議論することができた。

新型コロナウイルスの影響で、台湾や米国への訪問ができなくなっているが、オンラインを活用し、交流の対象をより広く求めることで、長野に居ながらにして実現できる持続可能な学びの形を追求する。

5 主体的な学び

2～3年次は、各自の研究テーマを外部へ発表する取り組みを行った。これは、生徒自らが参加を希望し、教員のサポートを得ながら準備を進めた。6月に上田高等学校で行われた『北陸新幹線サミット』、8月に大阪大学大学院国際公共政策研究科で行われた“Future Global Leaders Camp (FGLC) 2021 online “に、3年生1名が参加した。また、9月に行われた長野青年会議所主催『NAGANO 高校生政策コンテスト2021 ～きみのアイデアがまちを創る～』におい



【写真】3年生 国際会議

て2年生1名が研究発表を行い、最優秀賞を受賞した。他にも日本政策金融公庫の『第9回高校生ビジネスプラン・グランプリ』に応募するなど、積極的に取り組んだ。外部団体において発表を行うことで、別の視点からの講評・意見を頂くことができ、生徒自身が課題研究をより深めることができた。

長野西高等学校

1 文理融合のカリキュラム開発

1学年の探究学習として、SDGsに関する学習を行い、その一環として地域のお店を応援する「CM制作」を実施し、各クラスでグループを作って取り組んだ。11月からはSDGsを意識しながら、信州学のレポート・動画を作成し、信州の魅力や課題についての理解を深めた。

2 より深い学び（探究的な学び）

学校設定科目の‘Active English’（国際教養科1・2年次）において、英語によるプレゼン能力の向上を目指すとともに、価値観の相違から世界各国で起きている諸問題に目を向け、体系的、批判的思考力や、協働していく力を育むことに取り組んでいる。1年次には身近なテーマから始まり、2年次には外部のスピーチコンテストや模擬国連のテーマに沿って、より難解で抽象的なテーマにも挑戦する。最終的には卒業論文として1人1研究を行い、校内プレゼンコンテストと卒業論文集の執筆を行っている。英語での質疑応答の時間も設けることで、より双方向的な内容となるよう心がけている。

3 国際的な学び

10月に、国際教養科1学年を対象に善光寺ガイド研修を実施した。全国通訳案内士を2名お招きし、実際に自分たちでガイドする時のことをイメージしながら、熱心に取り組んでいた。生徒の感想からは、身近な善光寺に関して新たに発見があったことや、ガイドする際に気を付けるべきことを学んだことが伺えた。



【写真】善光寺ガイド研修

また、台湾の台湾台北市稻江高級護理家事職業學校で日

本語を学んでいる生徒たちとの交流（オンライン）を実施した（2年中国語選択者）。日本語学科の生徒ということで日本文化に興味を持つ生徒も多く、日本語と中国語両方を介して活発にやり取りが行われた。



【写真】オンライン交流（班活動紹介）

4 高度な学び

9月に、国際教養科1学年を対象に信州大学教育学部の小池浩子先生と徳井厚子先生、そして学生の皆さんにオンラインで「異文化理解」の授業を実施して頂いた。ゲームの体験を通して、文化の違いに対する捉え方や反応によって摩擦が起きるということを実感することができた。日常生活の中の問題や、国際的に起きている問題にも通ずる内容であり、貴重な経験となった。1月にも小池先生による「異文化理解」の特別講義を実施した。

5 主体的な学び

12月に、英語合宿を実施した（国際教養科1・2年）。イギリス人講師2名を招き、1泊2日の日程で英語での授業やアクティビティーを行った。1年生はコミュニケーションスキルとSDGsに関するポスタープレゼン、2年生はコミュニケーションスキルとミニディベートを主に扱った。生徒からは「英語で話すことが怖くなくなった」「英語を学ぶことの楽しさを改めて感じた」などの感想が聞かれた。

6 その他

昨年度に引き続き、2学年の保護者懇談会において、生徒が親と担任の前でプレゼンテーションを行った。7月と12月の2回実施することにより、前回のプレゼンについて何が達成できたのか、そして進級に向けて何を頑張るのか、というつながりを意識したプレゼンを行うことができた。発信力や表現力等を身に付ける絶好の機会となった。

篠ノ井高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

「地域との協働」事業に基づいた探究授業を行い、今年度が2年目になる。「地域から未来を知る」を探究学習のメインテーマに置き、SDGsの考えを取り入れた「しあわせ信州創造プラン2.0」をもとに千曲川・犀川流域の歴史、文化、自然、産業、生活、行政など、8つの分類（観点）について河川との関わりから考える学習を進めている。学年ごとにテーマを定め、1年次は「地域、仕事、学問を知る」、2年次は「地域に出て探究対象を県内外・国内外に広げる」、3年次では各自の希望進路にあわせて「自己の探究テーマと上級学校での学びを結びつけ、希望進路をかなえる」ことを目指した。コロナ禍にあって充実した校外活動の実施には至らなかったが、オンライン講演会や県内外における企業見学、



【写真】SDGsカードゲーム

フィールドワーク、校内グループワークなどを活用しながら探究学習を進めることができた。「地域との協働」事業は次年度が最終年度となるため、信州 WVL コンソーシアム構築支援事業の諸活動にも引き続き参加させていただきながら、本校における充実した探究授業の構築を目指したい。

3 国際的な学び

- ・2年生を対象とした本校独自の海外研修（同窓会主催）を今年度も予定していたが、コロナ禍を鑑みて実施を見送った。次年度以降も現1年生を対象に校内準備を進めているところである。
- ・台湾高級中学とのオンライン交流を行い、3名が参加した。お互いの国の食文化や祭文化について紹介しあい、海外の文化を知ることを通じて自国を振り返ることができ、知識を深められた。



【写真】台湾高級中学との交流

5 主体的な学び

探究的な学び、および生徒各自の進路実現に資するため、各種校外学習事業の案内については規模の大小を問わず広く生徒に呼びかけ、希望者は以下に参加した。

- ・2021年度北陸新幹線サミット（2名参加）
- ・JIBUN 発 旅するラボ（2名参加）
- ・マイプロ長野県 Summit（高校生学びのフォーラム長野）（1名参加希望）
- ・地域まるごとキャンパス（25名程度参加）
- ・ヒューマンアクトインマニラオンラインプログラム（1名参加希望）
- ・高校生国際会議実行委員会（6名参加希望）
- ・主体性を育む高校生の交流会実行委員会（1名参加）
- ・ユースリーチ（NPO 長野）

屋代高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

高校1年においては一人一研究、高校2年においては課題探究を行ってきた。コロナの影響で思ったようにフィールドワークを進められない生徒もいたが、工夫して各自の研究を行ってきた。中間発表やクラス内での発表を通して、プレゼンの効果的な作成方法、上手なプレゼンのやり方などについても深めることができた。

3 国際的な学び

高校1年において、国際交流の授業として、台湾の高校生との交流を行った。一貫生、理数科のクラスは英語で交流、選抜生のクラスでは日本語で交流を行った。長野県観光機構の方を通して交流校を紹介していただいたのだが、提携校が確定したのが10月始めで、そこから各クラス3回ずつ交流を行うという予定でいたのだが、4つの高校と同時に日程等のやりとりをすること、相手の学校がそれぞれ希望してくる時間帯がかなりピンポイントでこちらが日程を調整することに苦労したこと、こちら

が比較的時間に余裕がある1月下旬は台湾は学期の変わり目で休み、台湾は比較的フリーだと思われる2～3月はこちらは選抜試験や定期考査でほとんど都合がつく日がない、台湾の方は学期毎の日課が決まるのが直前であるというような事情で、日程調整だけでもかなり苦労した。

実際の交流は現在のところ、全クラス2回ずつ実施した。最初のうちは機器やネットのトラブルでスムーズにいかないこともあったが、Meetに入れた後はどのクラス、どのグループでも楽しく交流ができていた様子で、生徒からも「楽しかった」という感想がたくさんあった。ただ、複数の教室で同時にやっていたため、教員側の体制がしっかり整っておらず、2つ3つの教室を行ったり来たりしながら様子を見るという事態が多々発生し、このような取組を行うにはもっとしっかりとした体制を学校で作らなければいけないと感じた。

コロナの状況で、おそらく3回目の実施は不可能と思われるが、ここまでの2回でも生徒は充実した交流を行うことができていた。

4 高度な学び

理数科では、「バイオサイエンス」「ジオサイエンス」「アカデミックサイエンス」「グローバルサイエンス」など理数系科目の発展的内容を学ぶ科目を導入し、今年はコロナの関係で予定通りに実施できなかったものもあるが、校外に出たフィールドワークなどを実施してきた。

また、今年もコロナの影響で縮小した形で行われたが、全校生徒に希望を募り、つくばサイエンスツアーなどを実施してきた。

5 主体的な学び

2でも述べた一人一研究・課題探究の中で、生徒一人一人が自分の興味のあるテーマを選択し、それについて突き詰めていくという姿勢が見られた。

英語の授業の中では日常的にディベートやプレゼンテーションを行い、自分の意見を発表する機会を多く設けてきた。

上田染谷丘高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

本校では「総合的な探究の時間」を使い、生徒一人ひとりが自らの興味や関心から問いを立てて調査・研究をしたり、また地域の中に入りプロジェクトを企画・実行をする中で、自らの適性や進路について深く知ること为目标として探究活動を行っている。本校の探究学習が、何かアクションを起こすことを大切にしている理由は、本校の校歌の中にある「いざや 学びて 遊ばまし」の精神を大切に、一人ひとりの「好き」から生まれる学びを大切にしたいという願いが込められている。各学年のテーマは以下の通りである。

【各学年のテーマ】

- 1年次：自分を知る・地域を知る・社会を知る
- 2年次：地域のヒト・モノ・コトとつながる
- 3年次：自分と社会をつなげる進路選択



1学年：社会人講演会（13人の講師が様々な分野で講演）



【1 学年】

- 4～6月 自己紹介レポート（自分を知る）
- 7月 社会人講話（地域や社会について知る）
- 10月 菅平 SDG s 研修（社会を知る）
- 11月～2月 探究のテーマを探し、調べる
中間報告会 2 学年との交流会



1 学年：菅平 SDG s 研修



1・2 年交流会

【2 学年】

- 4～6月 探究のテーマ設定（個人 or グループ活動：120 グループ）
実験・調査・アンケート・地域に出て活動する企画を考える
- 7月～12月 企画書に沿って活動 夏休み：探究レポートにまとめる
修学旅行の代替行事：平和学習(松代大本営)のまとめ、発表
- 12～2月 活動報告ポスターの制作 報告会に向けて発表準備
中間報告会 1 学年との交流会 代表：マイプロジェクト参加
- 3月 探究成果最終報告会



松代大本営見学のまとめ発表



ディサービスで高齢者と交流



美を極めるためのメイク体験



LGBTQ+について長大生と交流



タワーレコードさんとコラボ企画



映画の魅力
をみつけ隊！



県立大生と商品開発し隊！



子ども食堂でフードドライブ実施！



活動報告ポスター制作・掲示



シェアサイクルで街を活性化させ隊！



NHK 田中アナと番組作り隊！



ばんとりーソメヤの取り組みが表彰



タブレットで中間報告会！

3 国際的な学び

本校には普通科と国際教養科が併設されており、国際交流などの活動を通して、国際社会の諸問題に対する思考力、情報を的確に発信するためのプレゼンテーション能力、実践的なコミュニケーション能力を養い、豊かな国際感覚を育む教育を行っている。コロナ禍においては例年行っていた海外研修や外国人学生を招いての交流を行うことができず、リモートによる交流が主となったが、国際教養科だけでなく普通科の生徒も意欲的に参加する様子が見られた。

4月 台湾高校生とのオンライン交流

国際教養科3年 姉妹校 台湾国立華僑高級中等学校 2年 台湾国立屏東女子高等学校

7月・長野ビジネス外語カレッジの学生との交流（対面）

国際教養科1年生が、9カ国の留学生18名と、互いの文化や言語について日本語で紹介し合い交流を深めた。

・オーストラリアのブリズベンにある幼・小・中・高一貫校 Calamvale Community College とのオンライン交流

有志生徒20名が互いの学校や文化について英語で紹介し合い交流した。

8月 エンパワーメントプログラム（英語自己啓発研修 3日間）

6カ国（ウガンダ、エジプト、スリランカ、ネパール、パキスタン、ブラジル）からの留学生とオーストラリア人の大学講師をリーダーに迎え、アイデンティティーやリーダーシップ、SDGsについて議論やプレゼンを行うことを通して英語力と発信力を学んだ。有志生徒31名が参加。当初は対面であったが、感染状況を鑑みオンラインで行うことになった。

11月・台湾高校生とのポストカード交換、オンライン交流

国際教養科1・2年生が、姉妹校の生徒とポストカードを送り合うとともに、オンラインを通して互いの文化や趣味について紹介し合い交流を深めた。

12月 ドイツ人学生とのオンライン交流

長沼スクール東京日本語学校で日本語を学ぶドイツ人の学生8名と、有志生徒17名が日本語で交流した。



長野ビジネス外語カレッジとの交流



姉妹校とのオンライン交流



エンパワーメントプログラム

野沢北高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

普通科と理数科の2科で探究的な学びを展開している。

普通科は1年次「探究基礎」、2年次「探究」に加え、3年次でも「探究」を実施している。各学年の内容は以下のとおりである。

【探究基礎】（1年次10月まで）探究活動に必要な「ものの見方や考え方」「コミュニケーション能力」

「論理的思考力、表現力」を養うために、本校オリジナルテキストを用いて様々なディスカッションやグループ活動を行っている。

【探究】（1年次11月～3年）1年次の11月から2年次末まで、「国際」「歴史」「地域」「生命」「芸術」の5つのカテゴリーに関して各グループで課題を設定し、その課題解決に向けて協力しながら

探究を進める。2年次1月の発表後から3年次5月末まで個人で探究を続け、論文を完成させる。それ以降は個人の進路に向けた研究（志願理由書の書き方、面接試験の対策等）、これまでの探究活動のまとめや、大学（上級学校）入学後の探究的な学びについてのリサーチ等も行っている。

今年度から外部サポーターの方々（「6その他」参照）にワークショップや中間発表等で様々な意見をいただき、さらに探究を深めることができた。コロナ禍によりフィールドワーク等の活動時間を思うようにとれなかったが、可能な限りで外部講師の講義や地域との交流を行い、視野を広げた探究活動となった。1月の発表会では情報を整理し、効果的に相手に伝え、お互いを評価しあい、充実した形で終わることができた。ここまでの2年間の探究活動全体を通し、多角的に物事を捉え、視野が広がったと実感し、もう少し探究したいと感じる生徒も多かった。発表会はコロナの影響で外部の参観者の来校を中止したが、プレゼンテーションの様子を映像に残し、外部サポーターを交え、プレゼンテーションコンテストを今後実施する予定である。



- 6月 2学年探求「「本物」に尋ねる」インタビューの仕方ワークショップ実施
- 7月 1学年カードゲーム「SDGs de 地方創生」ワークショップ実施
- 11月 1学年探究基礎「SDGs 地域課題調査」におけるワークショップ実施
- 12月 2学年「効果的なプレゼンテーションの仕方」講座実施
- 1月 2学年探究発表会

理数科では平成6年度創設以来、「課題研究」において自然科学分野の事象を研究（探究）している。1年次前期は普通科の「探究基礎」と同様、探究的な学びの基礎を作り、1年後期から2年次末まで物理・化学・生物・地学・数学の5分野に分かれて、グループで研究を深めていく。2年次の1月理数科課題研究発表会を行い、論文にまとめていく活動を展開している。3年次は普通科と同様に「探究」を実施しており、論文や進路に関する研究を進めている。

3 国際的な学び

海外の大学に進学を希望している生徒の他に、探究を通じて佐久市在住の外国人の方々の困難に目を向けるという生徒も増え、様々な地域の活動に参加している。そこからより良い未来を構築するために高校生である自分たちに何ができるかを考えるようになってきている。

- 7月 2年生留学キャラバン参加
- 8月 2年生H-LAB Obuse 参加
- 11月 2年生佐久市市民活動サポートセンター「サラダボウルの会」参加
来年度の高校生国際会議にむけてのワークショップ等2名参加



4 高度な学び

理数科において課題研究や進路選択の一助となるよう、最先端の専門機関を訪問、実験研究を見学・体験できるプログラムを実施し、科学的見地を広めることができた。高校で学んでいる学問と企業での研究開発や実用化されている商品との繋がりなど様々な事を学ぶ機会となり、課題研究の参考になった。

- 11月 1・2年生スーパーバイザー事
マイクロストーン株式会社白鳥敬日瑚様講演会・座談会
- 12月 1年生信州大学理学部にて PCR 検査実験体験
- 12月 1・2年生信州大学総合人間科学系教授鈴木治郎先生による講演会
- 12月 1年生うすだスタードーム天体観測実習実施
- 2月 1年生エネルギー加速器研究機構・JAXA 筑波宇宙センター研修予定



5 主体的な学び

地域の方と交流したり地元について考えたり、生徒自ら主体的に動くことで見えてきた問題点や課題に取り組む姿が見られた。また校内だけではなく、県内高校生の探究についてプレゼンテーションを見たり交流したりする中で新たなつながりができ、探究を深めていくことができた。

- 7月 2年生5名佐久平地域まるとキャンパス参加
- 7月 2年生2名マイプロキックオフミーティング
- 10月 2年生2名マイプロ中間報告会
- 12月 2年生2名マイプロ長野県 Summit 参加
県民佐久運動広場の再整備を考えるワークショップ参加

6 その他

本校は「未来の学校」構築事業にて、「卓越した探究的な学びを推進する高校」の実践校として指定を受けて2年目である。今年度は生徒たちが協働して自由にディスカッションしたり、調べ学習やプレゼンテーションの練習をしたりできるよう、図書館機能を拡充した探究ステーション(カラーニングスペース)を校内に新たに設置した。また、佐久地域コンソーシアム(仮)構築に向け、「政策」・「科学技術」・「ビジネス」・「市民活動」の4つの観点から外部機関の代表を選出、外部サポーターとして多角的な視点から探究の助言をいただき、さらなる探究的な学びのモデルとなるよう、カリキュラムの研究を進めている。

諏訪清陵高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）

・課題研究に徹底して取り組めるカリキュラムと環境の研究開発

自らが学びたいことを主体的に学習したり、疑問に感じたことを自主的に解決したりする時間として、学校設定科目「課題研究」を各学年に1単位設置。1、3学年は放課後、より深い探究活動を行いたい生徒を対象に、2学年は必修とし、課題解決に向け、グループで協働的、能動的な活動（ゼミナール活動）を行う。また、中間発表会及び発表会で個々の生徒の主体的学習の成果を生徒間に広げる。

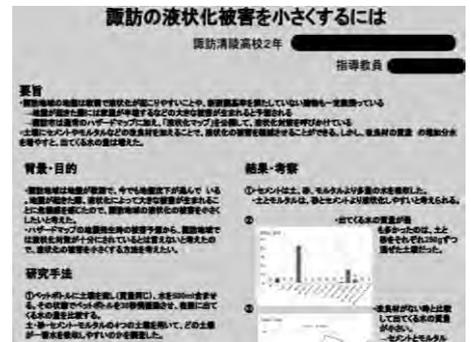
具体的な実施方法としては、1、2学年全員が取り組む学校設定科目「問題発見」（2単位）での探究活動を踏まえ、物理・化学・生物・地学・数学分野や人文・社会科学等、身近な自然現象や社会課題から研究課題を見出し、1年間の研究活動のテーマにふさわしい内容のプレゼンテーションを実施している。3回の中間発表会において、各グループの研究活動について、全員で徹底的な質問、助言、討議を行い、研究活動をより質の高いものにする。最終的には「課題研究発表会」で、全グループがポスター発表を実施（令和3年度は中止）。成果は各種コンクールや学会でも発表する。年度初期に大学の研究者を招いて「課題研究」説明会を行い、研究の例や、心構え、必要な視点などのレクチャーを受け、研究の進め方のヒントを得る。また、課題研究に対するモチベーションを向上させる機会とする。令和3年度から2学年では必修とすることにより、全生徒が探究活動を経験できるようにした。また、全職員をグループの担当教員として配置している。担当教員と生徒はgoogle classroomを基盤とした学習空間「清陵ネット」内でやりとりを行えるため、丁寧な研究指導体制を構築している。



【写真】研究グループ毎に
クラスルームを設定



【写真】成果物のチェックや
今後の進め方を相談



【写真】共同編集で作成したポスター



【写真】研究要綱



【写真】中間発表でのポスターセッション



【写真】ポスターセッション2

4 高度な学び

2021年8月4日(水)～6日(金)信州大学遺伝子解析講座

信州大学の松村英生教授に本校生物室を会場として実施していただいた。

参加者は15名で、県内からは篠ノ井高校、松本県ヶ丘高校、東海大諏訪高校、伊那北高校からもWWL連携校として参加があった。テーマは「16S リボソーム DNA 配列を用いた環境中の菌叢（きんそう）解析」で、初日はDNA解析の歴史や理論を講義していただいた。

2・3日目はグループ毎に持参した環境水からバクテリアのDNAを精製・培養、DNAシーケンサーにかけ、バクテリアの種類や量をデータ化した。一般的にはDNAシーケンスは研究室に設置した大型装置で行うそうだが、2～3年前に持ち運びができる小型の装置が開発されたことで、サンプルを研究室に持ち帰ることなく、現地での解析が可能になったとのこと。松村先生も研究に使用しているという最先端の手法である。今回はNanopore社のMinION(ミニオン)という装置を用いて遺伝子の解析を行った。1日がかかりで精製・培養したDNAが教卓上の手のひらサイズの装置で解析され、データ化されていく様子に皆感動した。

また、データはオンラインで即時に見ることができるため、本校所有のChromebookを1人1台用いてアクセス。解析されたDNA配列をデータベースサイトで照合してバクテリアの種名を特定したり、バクテリアが何種いたのか、それらの系統樹上での位置関係はどうかなどを確認する実習を行った。実験も理論も非常にボリュームのある実習となり、学びを深めることができた。



諏訪二葉高等学校

2 より深い学び(探究的な学び)

○キャリア教育

- ア)内容 課題探究「地元企業を知る」として、諏訪市と合同開催で、学校で地元企業 10 社 20 名による 1 年生対象の説明会を実施。
- イ)成果 ・事前に地元の企業や産業について調べ、地域経済や社会への問題関心をもって説明を聞いたため、事後に新たな質問をすることができた。
・社会人としてのあり方についても説明があり、自分のキャリアプランや生き方についても考えることができた。

3 国際的な学び

○台湾国立嘉義女子高級中学とのオンライン交流

- ア)内容 Google Meet を使い、ESS 部員ならびに 3 年選択英語受講生徒 10 人参加した。交流日前に自己紹介をおこない、当日は学校紹介、文化祭や高校生活についての情報交換を行った。その後、ディスカッションを予定していたが、接続環境のトラブル等により、十分な時間がとれずに残念だった。
- イ)成果 ・海外の生徒とリアルタイムでディスカッションできることが分かり、海外がより身近になった。コロナ禍で海外留学が難しい状況で、国際交流の手段としてオンライン交流は、生徒の海外への関心を高める機会となった。

5 主体的な学び

○フィールドワーク

- ア)内容 総合的な探究の時間で、諏訪湖周辺の水環境をテーマとしている有志 2 年生 15 人が、諏訪湖流域下水道事務所(豊田終末処理場)へ見学。
- イ)成果 ・自分の興味・関心を具体化させ、地域の課題として問題意識を高め、探究の見通しを立てることができた。
・汚水の浄化に微生物が使われていることや汚泥が結晶化処理により人工骨材として利用されていることを知り、循環型社会を実感することができた。
・浄化費用の内訳調査などへの発展的課題設定につながった。

6 その他(特徴的な取り組み)

○中高連携事業

- ア)内容 近隣の諏訪市立上諏訪中学校の 3 年生の夏期休業中の補習(受験対策)の支援に本校 3 学年と 2 学年の教員養成系志望者 31 人が参加した。
- イ)成果 ・卒業後の進路希望につながる活動で、自分で目標を持って取り組んだ。
・中学生の理解不十分な部分の把握や説明方法が新たな課題となった。
・理解して嬉しそうな表情の中学生に、教職希望を一層強めた生徒もいた。

○中高連携事業の拡大

ア) 内容 総合的な探究の時間での諏訪市立上諏訪中学校の関連テーマとの連携。

イ) 成果 ・諏訪湖流域下水道事務所(豊田終末処理場)へ合同見学会を計画したが、コロナ感染拡大期となり、本校単独の実施となった。

・来年度は、合同見学会を契機に、課題設定の動機、情報収集方法、研究発表などについて交流していきたい。

長野県伊那北高等学校

1 文理融合のカリキュラム開発

令和4年度から年次進行で始まる新学習指導要領に合わせて、本校では“学際コース”という新たなコースを導入することになった。“学際コース”では、文理融合の授業を目指して、国語・数学・英語などで学校設定科目を導入し、教科等横断型の授業を行いやすいように教育課程を編成した。

本年度はいくつかの教科で文理融合の授業を行った(例えば、英語と生物)。その一環として、融合授業に関わる研究会を学内で開いた。研究会には福井県の武生高校の先生を講師としてオンラインでお招きし、教科横断の目的や手法などについてご教授いただいた。

2 より深い学び(探究的な学び)

昨年に引き続き、通常時間割の中で総合的な探究の時間・理数課題研究を行った。昨年度よりさらに体系的に探究活動を行うことができたと感じている。前期授業アンケートでも昨年に引き続き、9割以上の生徒から好意的な評価を得ることができた。2学年の生徒は、昨年に引き続きコンスタントに探究を行っているためか、探究に対する意識の高さは昨年以上に感じられる。

3 国際的な学び

信州大学農学部の大学院生であるファローズ氏に講演およびワークショップを依頼した。氏の専門はフードロスの研究であり、その内容を英語で全校生徒に向けて講演していただいた。本校の教室の一つを本部として、有志の生徒約30名がその場で講演とワークショップを体験した。それ以外の生徒はGoogle Meetを利用して、各教室で講演の様子を共有し、ワークショップを行った。来年度以降も全校を対象にした英語を用いた講演やワークショップを行いたいと考えている。



【写真】ファローズ氏によるワークショップの様子

4 高度な学び

昨年度から、1年理数科の生徒を対象に、大学の先生をお招きして“ミニ課題研究”を行っていたが、本年度も続けて実施した。東京大学今須良一教授によるCO₂の測定機を用いた実験、東京都立大学福田公子教授によるニワトリの卵を用いた発生の実験をもとに、グループ別でそれぞれが立てた仮説をもとに実験を行い、その結果について考察した。全10グループを4名の理科教諭と3名の実習担当教諭等で分担して担当し、ゼミ形式に近い形で指導を行った。実験結果と考察の発表会では、教授らにもご参加いただき、ご助言をいただいた。他にも、東京学芸大学相原琢磨講師をお招きし、数学の整数論を学んだ。これらの活動のうち、一部の発表会はWWLの活動の一環として各高校へ配信できるように準備を整えたが、他校からの参加はなかった。

上記のように、本年度から“ミニ課題研究”でゼミ形式を取り入れた。生徒と細やかにコミュニケーションが取れるため、この形式は生徒の成長に非常に有効であると感じられた。またゼミ形式で行う場合、今まで以上に教員間の連携が必要であることも明らかになった。今後は教員の負担が増えない形で、より教育効果がある方法を模索していきたい。

本年度もCPA教養講座を実施した。大学受験から音楽理論まで、様々な分野の講座を本校職員が開いた。WWL参加校の生徒も参加できるように準備したが、他校からの参加希望はなかった。

5 主体的な学び

高校生国際会議の役員として、本校から1名の生徒が参加することになった。

伊那新校の懇話会に生徒代表として2名が参加。いずれも立候補で参加している。内1名は、伊那新校についての探究を1年次の総探の授業をきっかけにこれまで続けている。マイプロに参加し発表したり、懇話会で探究の結果を発信するなどして、積極的に活動している。

2年生においては、総合的な探究の時間における自身の探究テーマに沿った外部の講師に自ら依頼し、校内で参加者を募り講座を開講するなど、学びを追及する意欲を感じさせる生徒も見られた。

伊那弥生ヶ丘高等学校

2 より深い学び（探究的な学び）～5 主体的な学び（3 国際的な学び含む）

2年）「郷土愛プロジェクト（上伊那広域連合事務局）」に支援を得て、13テーマ別に講師（アドバイザー）を派遣していただき、地域を知り、問だてをして、地域に出て何らかアクションを行うことを大切に活動を進めている。

テーマ（活動例など）：地域の施設活用（イベントでのテイクアウト代行販売）、

民際協力（ネパールの人々とオンライン懇談会、地元レストランとメニューづくり）、

モノづくり（経木活用）、

ありがとうプロジェクト（市内小中学校を含めた廃品回収活動）、

地域活性（ケーブルTV番組作成／移住案内セミナーon Zoom）等々

* 高遠ロゲイニング

（国少による「地域探究プログラム」に参加、「地方ステージ」で発表）

→2月3日 発表会（1、2年参加、講師を招いて on Zoom）



←ありがとうプロジェクト ↓高遠ロゲイニング

↓資料整理中



1年) 身近なSDGsをテーマに、「きく、対話する、調べる、課題を発見する」等の諸活動をへて、ロータリークラブからいただいたお題に対し、「分析や問だて、思考、創造」等のグループワークに取り組み、発表会に向けて「表現する」等、「探究的・主体的」な学びの基礎活動を行っている。

- ・**お題**: 「高齢化社会におけるコミュニティ形成？」
「高齢化の進む地域の情報発信？」
「エネルギー需給問題？」
「持続可能な伊那谷をつくるための地域の強み？」

→ 1月27日 HR発表

2月10日 代表チーム発表

(ロータリークラブを招いて on Zoom)

HR発表中→



飯田高等学校

2 より深い学び (探究的な学び)

8・9月にオンラインも活用し、3学年の医療・教育系統への進学を考えている生徒を対象とするワークショップを行った(希望者参加)。講師は健和会病院の福澤深雪様と奈良教育大学教職開発講座教授の宮下俊也様に依頼をした。参加した生徒は医療8名・教育6名と少数であったが、講師との対話だけでなく参加者同士でも意見を交換しあう時間を十分に確保することができた。生徒の感想は以下の通りである。

1 医療

- ①いろいろなことに興味を持ち、色々な人と話すコミュニケーションを大切にすること。
- ②一人一人に寄り添って、その人のことをよく見て対応する大切さ。寄り添って話を聞いてもらえるだけで安心したり落ち着いたりすることがあるから、相手の気持ちを考えて相手に寄り添った行動していきたいと思った。人だけではなく周りの状況などあらゆることにアンテナを張っていきいたいと思った。
- ③看護関係の仕事は幅広い分野で活躍していて、マニュアル通りにはいかない状況でも責任を持ち、任務を全うすることが大切だと思いました。ほんの些細な気づきが患者さんのその後に大きく影響

してくることを考えると常にいろんなことを気にかけておくことが必要だと思いました。

- ④普段の生活からルールを守るなど当たり前のことをきちんとやること
- ⑤目を見てコンタクトをとること。コミュニケーションが大切だと感じた。
- ⑥気づく力をもつ、相手の顔を見て話を聞く、人に寄り添える医療従事者になりたいと強く思った。医療従事者を目指すにあたり、当たり前のことを当たり前にする、これはどんな職業につくとしても言えることだと思うが本当に大切だと思うので日々の生活の中で実行したい。

2 教育

- ①学問を教えることはその科目の知識を深めることはもちろんで、その他にも倫理的に考える人間性を創り、その人の将来を創るという意味でもあるということ。
- ②教員としては、グローバル化 ICT 教育が進んでいく中で、時代に対応した指導能力が重要だと思った。ただ、何よりも大切なのは子供への愛情で、それがあってこそ、これからの社会を創っていく人を育てられると思った。
- ③グループ面接みたいな時の積極性。自分の意見を持ちそれを発言すること。用意してきた言葉じゃなくて、自分の言葉で説得力のある言葉を使うこと。
- ④これからの学校は、「生きる力」を育成するという基本的な観点を重視した学校に変わっていく必要があり、インクルーシブ教育や倫理教育など時代に合わせて変化していく必要があること。また、先生として子供への愛を持ち続けること。

生徒の感想を見ると、開催趣旨としてあげた対話をしながら考えを深めていく機会とするについては、両分野ともある程度ねらいを達成できたと考える。一方、現在の社会状況の中でそれぞれの分野に求められていることなどに目を向けていくに関しては、教育の方は生徒の感想に②・④などが見られたが、医療の方は「実際に現場で働いている方にお話を聞く機会はあまりないので、とても貴重な経験をさせていただきました。」など、今後の医療職に求められることは何かという視点よりも実際に働いている人から話を聞くことができたという点に価値を見出している様子が見られた。

4 高度な学び

11月15日に「未知への挑戦～若手が語る最先端研究～」と題し、総合研究大学院生による授業が行われ、1・2学年の希望者（計77名）が参加した。授業者・タイトル、生徒の感想（一部抜粋）は以下の通りである。

講座	授業者	授業タイトル(上段)・所属(下段)	教室・人数
A講座	岡本 啓	土器から始まるセラミックス史、水素を利用したセラミックスの最先端研究 物理科学研究科・構造分子科学専攻/ 自然科学研究機構・分子科学研究所	30号教室 15名
B講座	西村 瑠佳	ウイルスって実は悪者じゃない?! 生命科学研究科・遺伝学専攻/ 情報・システム研究機構・国立遺伝学研究所	25号教室 21名
C講座	津村 賢宏	理想のAI・現実のAI ―今知っておきたいAI― 複合科学研究科・情報学専攻/ 情報・システム研究機構・国立情報学研究所	35号教室 24名

D 講座	阿部 優樹	加速器で見る世界最小の大きな世界像	31号教室 17名
		高エネルギー加速器科学研究科・加速器科学専攻/ 高エネルギー加速器研究機構・加速器研究施設	

授業感想 A 講座：「セラミックスで水素を自由自在!？」

- ・自分の知らない分野を知ることができて考えが広がった気がしました。
- ・私は将来大学で研究をすることになると思います。そんな時には今日教わったことを大切にしながらやっていきたいです。

授業感想 B 講座：「ウイルスって実は悪者じゃない?!」

- ・今から 3800 万年も昔のウイルスを探し出して進化の過程を調べることが出来るのに驚いた。ウイルスは今まで悪い印象しか無かったけどこの講義で人間に有益なこともあることが知れてよかった。
- ・ウイルスの最先端の研究内容を教えて頂き、ウイルスは人間に悪影響を及ぼすだけではないんだな、と思いました。また、縄文人の骨や歯から DNA が取れることには驚きました。コロナウイルスについても説明していただき、興味深い内容ばかりでした。ありがとうございました。

授業感想 C 講座：「理想の AI・現実の AI —今知っておきたい AI—」

- ・AI は将来人間世界にどのような影響を及ぼすのか、少し怖い面がありそうなイメージがあったが、人間を超える AI は現実には難しい、なぜなら AI にも得意な事が多くあるからなどの発見があった。研究分野をお聞きして、少しユニークさを感じた。人間の感情の変化を AI が正しく表現出来るのか、などとても理解出来るような話を聞いた。・津村先生はとても面白く、あまり緊張せず楽しみながら授業を受けることができ、よかったです。僕は人工知能に関して知らないことが多かったですが、今回授業を受けて、新しいことをたくさん詳しく知ることができました。
- ・夢を持つことの大切さがわかりました。僕は、まだ将来の夢が具体的にはありませんが、今回の授業をお聞きして、夢を見つけていきたいと思いました。ありがとうございました。

授業感想 D 講座：「加速器でのぞく小さな世界」

- ・内容は難しかったが、研究の面白さを感じた。なんとなく知っていたことが意外なところでいきけるということに感動した。
- ・まったく自分の関わりと外れた分野を選んだが、よかった。直線の加速器が岩手県に作られる予定と分かった。普段近くにある光を不思議だと思った。

上記も含め、参加した生徒の感想は概ね好意的なものであった。本校の職員から出た「文系の大学院生による授業もあった方が参加者が増えるのではないか」、「質疑応答に十分な時間がとれないのが残念」といった指摘も踏まえ、次年度はよりブラッシュアップしたものにしていきたいと考えている。

飯田風越高等学校（国際教養科）

2 より深い学び（探究的な学び）

課題研究（2 学年）

1) 目的

グローバル教育のために、まずは自分たちの地域の文化、歴史、社会を学び、自分が育ってきた背景やアイデンティティを理解する。各自テーマを決めて研究し、論文を作成、プレゼンテーションを行うことを通して、問題解決能力や発信力を養う。

2) 概要

1 学期 研究テーマを設定するための特別講義

おひさま進歩エネルギー株式会社 伊藤緑氏

「地球温暖化を防止する自然エネルギー事業による地域づくり」

飯田市役所企画課 小島一人氏「南信州・飯田の魅力ー市役所の仕事から見る飯田市」

高森町長 壬生照玄氏 「地域創生とまちづくり」

飯田市歴史研究所 羽田真也氏 「歴史を知るおもしろさ」

米澤酒造 Nigel Hay 氏 「外国人から見る南信州の魅力」

満蒙開拓記念館 寺沢秀文氏 「満蒙開拓の歴史から学ぶもの」

新聞記者の方によるワークショップを通し、研究の切り口、調査の手法を学ぶ

夏休み テーマに関する調査（フィールドワーク）

2 学期 論文作成 発表のためのスライド作成
グループ内発表 代表者決定

3 学期 課題研究発表会（2月実施予定）



↑ 特別講義

←グループ内発表

3 国際的な学び

1) English Day（1 学年）

グループごとに担当 ALT から出身国について学び、文化に触れる。学んだ国についてプレゼンテーションをする。

2) JICA 駒ヶ根施設訪問（1 学年）

協力隊の体験談やワークショップを通して世界の実情や、日本の国際協力、異文化について学ぶ。

3) 台湾オンライン交流（2 学年）

台湾国立台南高級商業学校とこれまでに 4 回実施。両校とも少人数のグループを作り、Google Meet を使って交流している。

4) ボストンハーバードフォーラム（1・2 学年希望者）

オーストラリアへ 2 週間の語学研修が予定されていたが、コロナ禍により中止となった。代替企画として国内語学研修「ボストンハーバードフォーラム」を 3 月に実施する。内容はハーバード大学生と同卒業生によるオンラインワークショップや派遣講師による対面型の講義。

5) 海外進学講座の実施（希望者）

昨年度よりマレーシアの Taylor' s University とパートナーシップを締結し、指定校推薦枠があることからマレーシア留学サポートセンターによる海外進学講座をオンラインで実施した。生徒 7 名、保護者 1 名、教員 2 名が出席。



【写真】 English Day



【写真】 台湾オンライン交流

4 高度な学び

南山大学 大濱先生特別講義（2学年 2月）

今日の国際社会・開発協力のあり方、参加型地域社会開発についての講義。

5 主体的な学び

スピーチコンテスト（1・2学年希望者）：レシテーション、スピーチ、中学生のスピーチの3部門を設け、英語発信能力を高める機会としている。

6 その他

本校は「未来の学校」構築事業の実践校に指定されている。国際的な教育プログラムの長所を生かした飯田風越高校独自のカリキュラムや学びの指導・評価方法を開発するとともに、海外大学進学を実現するためのプログラムと支援体制を構築することを目標に研究している。

松本深志高等学校

1 より深い学び（探究的な学び）

京都大学ポスターセッション2021（令和4年3月開催）への参加

- ・ 2年生 1グループが、「日本の林業×私たち=未来」を発表テーマに設定して参加予定
- ・ テーマ設定理由：「持続可能な開発」「日本の林業の衰退」「共生」に関して高校生としてどう考えたか、また、私たちが永続的に考えていかなければいけないことは何か、の2つの意味を込めた。

2 国際的な学び

留学キャラバンへの参加

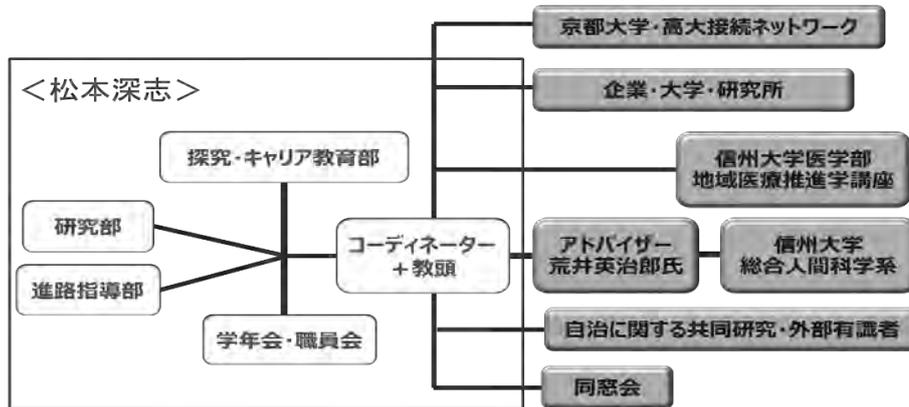
- ・ 7月25日（日） オンライン開催 本校生徒21名、保護者1名参加

3 高度な学び

1 県立高校「未来の学校」構築事業実践校としての取組

土曜午前を活用し、1学年は、信州大学と連携した「信大連携ゼミ」（年間4日）を開催し、2学年は、本校職員（一部、外部講師を含む）が講師を務める「深志教養ゼミ」（年間3日）を開催した。

(1) 「未来の学校」構築事業での連携体制



(2) 「信大連携ゼミ」開設講座一覧

ゼミ	信州大学 担当教員名(敬称略)	専門分野	タイトル	ゼミ概要
A	①荒井 英治郎 ②田村 徳至 ③河野 桃子	①教育学(教育行政学) ②社会科教育(金融・経済教育・消費者教育) ③教育哲学、教育思想史	「問い」との向き合い方を学ぶゼミ	様々な「問い」との向き合い方(データ、ファンリテーション、哲学対話)を学びます。
B	①庄司 和史 ②研 千晶	①特別支援教育、聴覚障害学 ②障害児心理学、教育心理学	人について考えるゼミ	様々な視点から自分も含めた「人」について学び、探究します。
C	小池 洋平	憲法学・比較憲法学(アメリカ憲法)	判例から考える現代の人権問題研究ゼミ	現代の人権問題を考えます。具体的には、「同性婚」「夫婦別姓」「外国人の権利」などのテーマを扱います。
D	勝亦 達夫	建築計画:歴史・意匠、建築学、まちづくり、キャリア教育	建築とまちづくり～まちを見る視点と課題解決	時間、空間、建築でまちを見る視点を学び、自分が暮らす町の歴史や環境からまちづくりを考えます。
E	速水 達也	スポーツ科学	身体の使い方探求ゼミ	あらゆる競技やスポーツの基礎となる基本的な身体運動と、それを構成する要素についての理論を学び実践することで理解を深めていきます。
F	加藤 彩乃	アダプテッド・スポーツ、インクルーシブ教育	グローバル教育ゼミ～世界で求められる視野で考える～	「多様性」や「共生社会」というキーワードに対して、グローバルな視野を持って向き合い、グローバルワークやプレゼンテーションなどを行いながら、考え抜く力を身につけます。
G	仙石 祐	グローバル教育・留学生教育・情報科学	XXをグローバルという文脈からアプローチするゼミ	自分に関心のある事柄を、とにかく「グローバル」という視点から考えます。また、深志生どうして議論してみたり、留学生との意見交換を行います。
H	三澤 透	天文学	宇宙について語り合うゼミ	「宇宙」に関する幅広いテーマについて毎回トピックを選び、事前に調べた内容を発表するとともに、思う存分語り合うゼミです。
I	大塚 勉	地質学	身近な野外の現象から大地の運動と減災を学ぶ	室内での講義と野外での地質観察を行い、大地の運動を考えます。
J	有路 憲一	認知神経科学・神経教育学	バカデミーのススメ～数理のミカタ	とっつきにくい数理(数学と科学)をバカバカしくもマジメに探究します。
K	中澤 勇一	外科(移植外科)、プライマリ・ケア	医学教育モデル・コア・カリキュラムの先取り学習	それぞれの分野のエキスパートの先生方に講演いただき、その後グループレッソンを行います。
L	分藤 大翼	文化人類学	異文化の学び方	自分や他人を理解することの面白さや難しさを文化人類学的な考え方にもとづいて探求します。

(3) 「深志教養ゼミ」開設講座一覧

ゼミ	担当者	タイトル	ゼミ概要
1	国語 百瀬 治	『源氏物語』を読む	教科書でとりあげない「源氏物語」
2	地歴公民 新宮 奈々	ドイツの歴史	現代世の心の中に生き続ける「差別と排除 (prejudices)」 「連累」の考えに基づいて、ドイツの現代史を考える。
3	地歴公民 武田 邦秀	アメリカを中心としたブラックカルチャー	ブラックカルチャーを中心とした、アメリカ近現代史について
4	地歴公民 中村 丈	生きる～東洋思想からのアプローチ	レッツ 倫理!!
5	数学 藤正樹/武智慎 信大院生 矢澤明喜子	数学アラカルト	オリガミクス(折り紙の数学)、整数論、組合せ論的代数
6	理科生物 尾曾清博/湯澤未季枝 外部講師 浦田 慎	ウニの発生	・発生学について、ウニの発生・カエルの発生を学習する。 ・発生現象から、ウニの進化・多様性へと発展的に学習する。
7	芸術美術 中島 翼	造って 遊んで 考えて	「造って考える」ゼミ。どんな課題に取組むにしても、最後まで完成させることを求めます。よく遊び、楽しく創作をしましょう。
8	芸術書道 林 直哉	メディア ミディウム つなぐもの(ワークショップ)	「メディアとは、人と人、人とモノの間で情報を伝達する媒体」を言います。ちょっとした線を描くワークショップを通じて、私たちの生活をとらえなおしてみよう。
9	外国語 大林慎太郎	洋楽で学ぶ英文法	洋楽の中の英文法を紐解きます。「なぜこの場面ではこの文法を用いているのか」、「使用する文法による心情」などを考察、解釈をしましょう。
10	外国語 伴野 大悟	ビジュアルデザイン	ビジュアルデザインの課題への取組を通して自分の伝えたいイメージを工夫して表現することの難しさと面白さを感じましょう。
11	外国語 島山 忠史	語源を探る	英単語の語源を探ることで、本来の語が持つ意味を考え、自分で単語のニュアンスを推測します。
12	家庭 大井 幸代	布を絞り、藍で染めよう	藍染め染色を体験し、持続可能な衣生活について考えてみましょう。
13	OB 29回生 社会学者 大澤 真幸	アニメ・マンガを通して考える社会学	アニメ・マンガを題材にした討論・熟読を行います。午前:風谷のナウシカ 午後:鬼滅の刃
14	OB 65回生 地方裁判所判事補 田中 春香	裁判所ってどんなところ?	裁判所での仕事や、裁判員に選ばれたらどんなことをするのか、裁判所を身近に感じてもらうための講座です。
15	OB 60回生 イラストレーター 新井 美季	環境問題へのアプローチ「選択」について語り合う	【講義】講師が環境問題に関心を持つようになったきっかけ【意見交換】私たちが出来る行動と、その問題点【実証】天然素材・天然アロマでバスボム作り
16	外部講師 信州大学特任教授 遠藤 守信	創造力を育む	学びの意欲の向上に向けた講演・対談
17	信大生 大橋直和/内田佑香/後藤友作	大学生生活を知ろう	信大生と生徒とのグループレッソン
18	生徒自主ゼミ	日本の林業	

2 京都大学学びコーディネーター事業 若手研究者による出前授業

- ・11月30日(火) 放課後 同時2講座開講 本校生徒59名参加(2年生53名、1年生6名)
- ・テーマやその周辺分野に興味・関心のある者、数理系、情報系、医療系の大学を志望する者、京都大学に関心のある者が中心
- ・内容 「通信の安全性を『証明』せよ！」 京都大学大学院理学研究科 南規楽氏
「ヒト遺伝と多様性」 京都大学大学院医学研究科 春山瑛依子氏

3 長野県高等学校スーパーバイザー 遠藤 守信 氏 講演会・座談会

- ・12月11日(土) 本校生徒:22名、他校生徒:1名参加
- ・「深志教養ゼミ」の一環として開催
- ・長野県高等学校スーパーバイザー 遠藤 守信 氏の講演会・座談会を通して、サイエンス やイノベーションの進展及びグローバル社会の現状を理解し、時代が大きく変化する潮流のなかで、新たな価値を創造し、国際的視野に立って社会を変えていくことの重要性を意識する機会となった。



4 主体的な学び

模擬裁判選手権(長野地方裁判所・長野地方検察庁・長野県弁護士会 主催)への参加

- ・3月5日(土) 本校生徒:5名参加
- ・模擬裁判を通して、①事実を的確に把握し、多面的な視点で考える力、②事実に基づいて論理的に構成する力、③分かりやすく他者に伝える力の育成を目指し、支援弁護士、支援検察官、支援裁判官らによるレクチャーを受けて、参加準備を進めている。

WWL 事業の評価と考察

1 生徒によるWWL活動に関するアンケート (拠点校)

(1) 実施日 2月9日(水)～18日(金) 1・2年生対象 回答数 544 (回答率 85%)

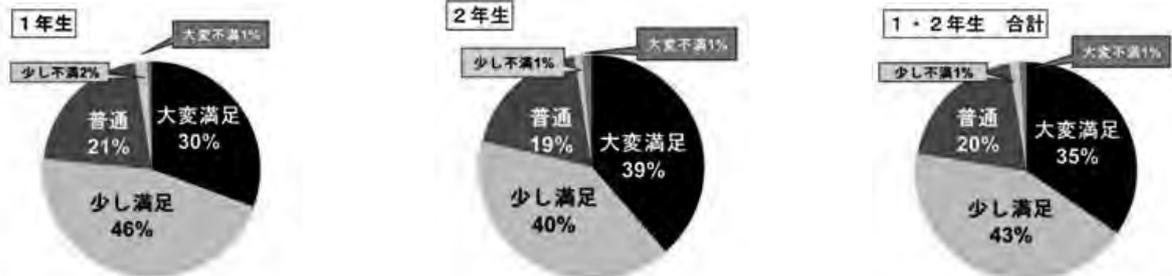
ア WWL活動への自分自身の取組に満足していると感じるか?



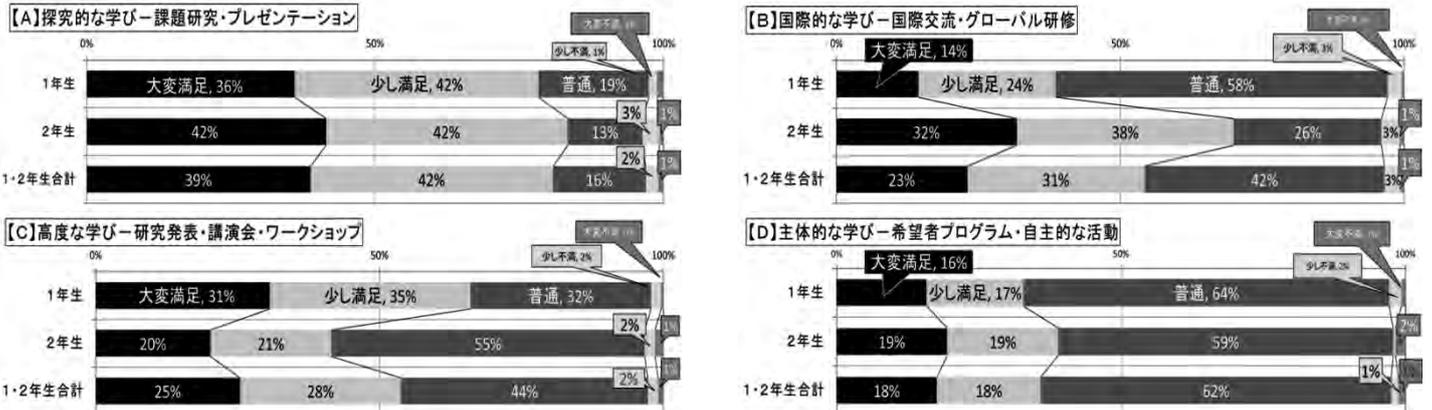
イ WWL活動を通してDDP(ディスカッション・ディベート・プレゼンテーション)スキルが向上したか?



ウ WWL事業の総合評価



エ WWL各行事についての満足度

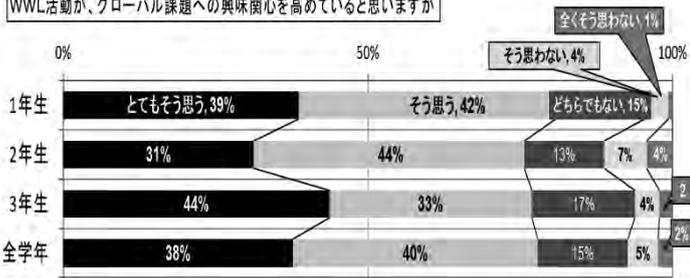


WWL 事業の評価と考察

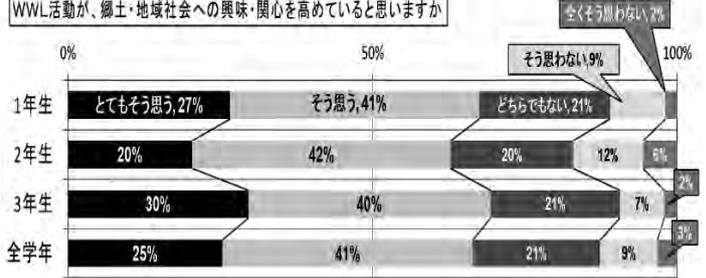
2 WWL活動がどのような能力を高めているかについてのアンケート (拠点校)

(1) 実施日 1・2年生12月 3年生11月 対象：全学年 回答数821 (回答率86%)

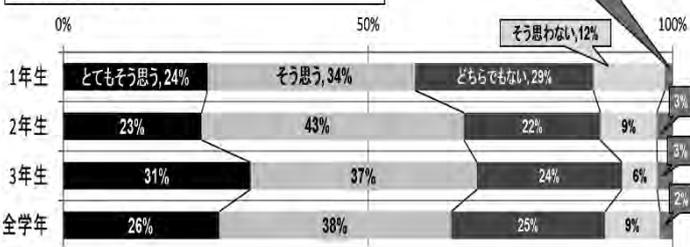
【1】 WWL活動が、グローバル課題への興味関心を高めていると思いますか



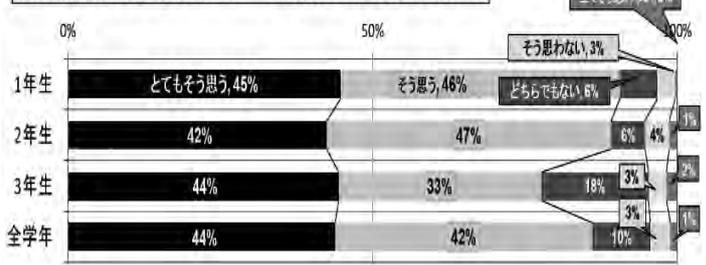
【2】 WWL活動が、郷土・地域社会への興味・関心を高めていると思いますか



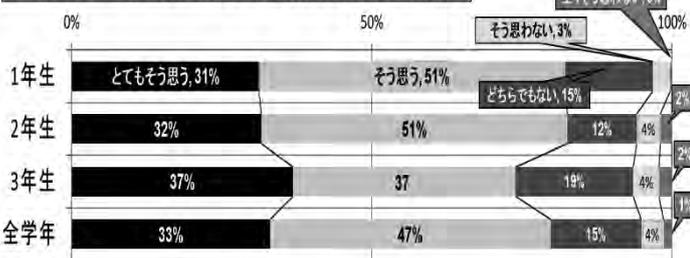
【3】 WWL活動が、日本語や英語等によるコミュニケーション能力を高めていると思いますか



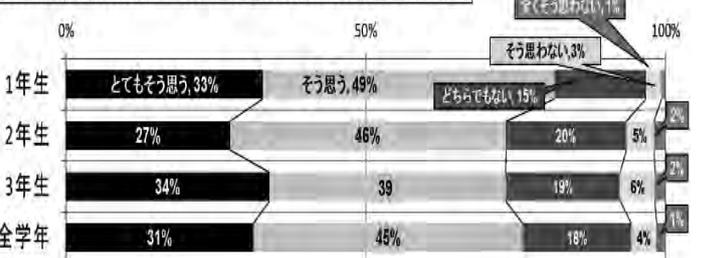
【4】 WWL活動が、情報発信力やプレゼンテーション能力を高めていると思いますか



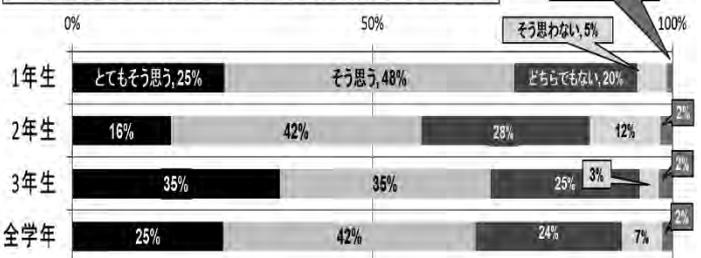
【5】 WWL活動が、情報収集力と論理的・批判的思考力を高めていると思いますか



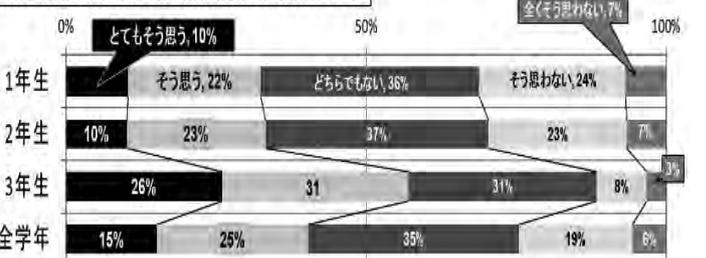
【6】 WWL活動が、課題解決を生み出す創造的思考力を高めていると思いますか



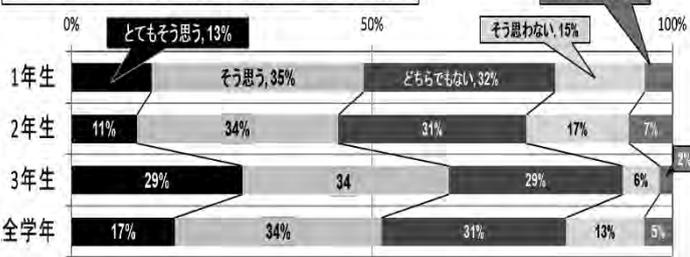
【7】 WWL活動が、他者と意見交換などの協働的思考力を高めていると思いますか



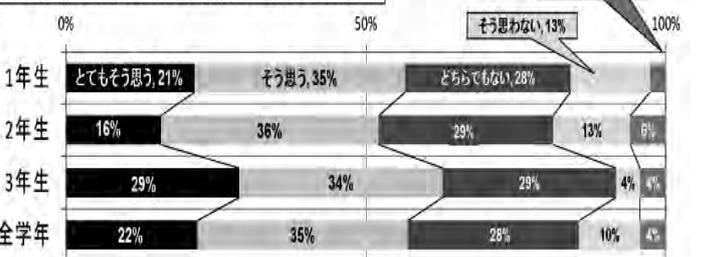
【8】 WWL活動が、海外の人々との交流を高めていると思いますか



【9】 WWL活動が、主体的な学習に対する意欲を高めていると思いますか

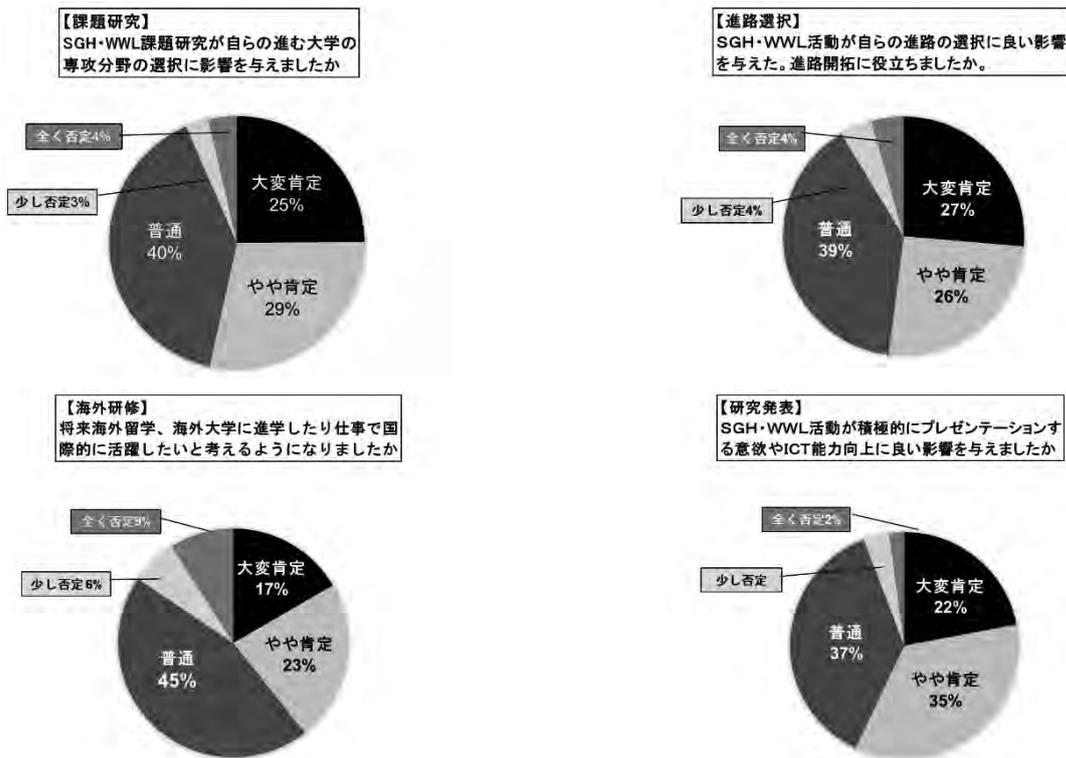


【10】 WWL活動が、進路選択に対する意識を高めていると思いますか



WWL 事業の評価と考察

(2) 3年生への質問項目



(3) 記述回答(1～3年)

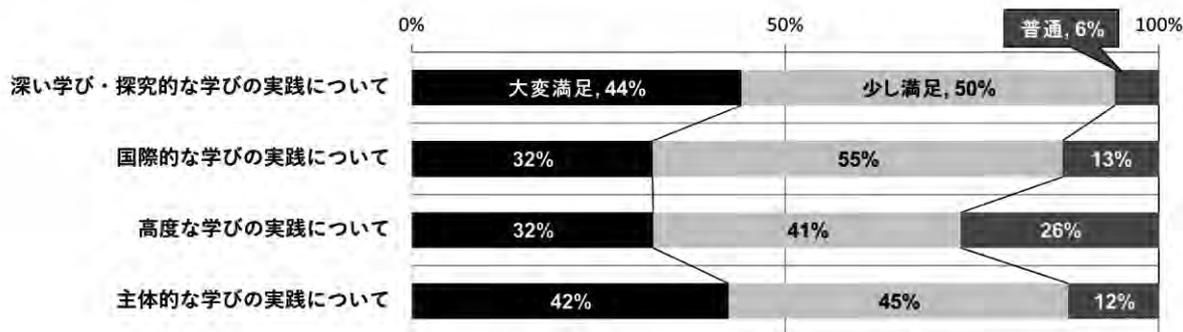
- ・ 自分の進路と課題研究のテーマは少し異なってしまうが、将来どう生きていくのか、何を考えて生きていくのかがはっきりした。
- ・ 将来教師を目指しているので課題の解決策を自分の将来の夢と繋げて考え、今学校で行える事、大学で行える事も具体的に考え、伝える事ができた。
- ・ 今世界で起こっている社会問題に対しての危機感が増した。様々なツールから拾った情報を集め1つの研究としてまとめる能力が身についた。より多くの社会問題に出会い、解決策を考えていける事を今後の自分に期待したい。
- ・ 日常に溢れている「何で?」を、深堀してみるというのは大切だなと思った。元々何に対しても興味があり調べることも多かったが、今回の研究を通してそれらが知識として無駄になっていなかったと感じる場面があった。
- ・ 2年間を通して楽しく探究ができるプログラムにするべきだと思う。
- ・ 他の教科の課題だけでも大変で、5教科の勉強にもっと時間を費やしたいのに、WWLに関する課題が出るととても大変で睡眠時間がとれないから。
- ・ 理解力以前にやっていることが形式的すぎて本来の姿から遠のいていると感じる。
- ・ 2年間ありがとうございました。生徒同士、生徒と先生が「対話」(会話や討論ではなく)できることを期待しております。(3年)
- ・ SGH・WWLの活動が大学に直接結びついたので、まじめに取り組んで良かった。(3年)
- ・ 自分では絶対知らなかったこと、調べなかったことが他の人のプレゼンで触れることができ視野の広がる充実した活動だった。(3年)

(4) 分析・考察

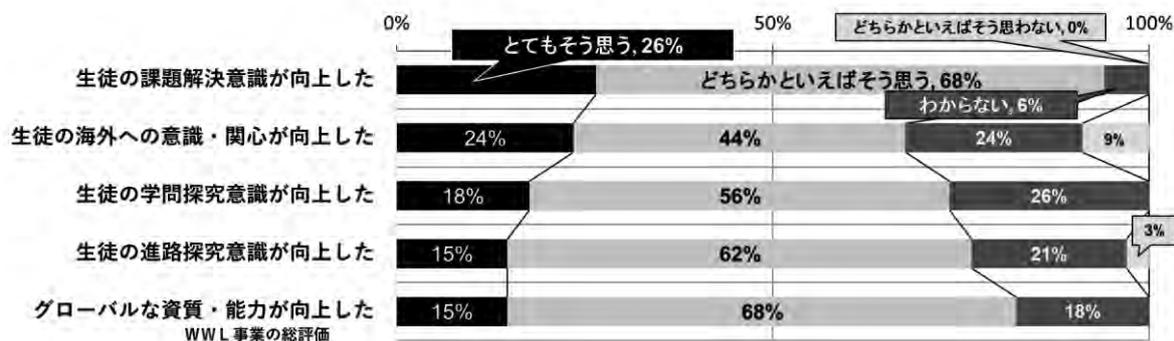
全体としては、WWL行事や探究活動に関しては肯定的な回答が多い。特に課題意識について1年生の8割近くが向上したと回答しており、「問いの立て方」についての授業の効果と感じる。ひとり1台端末の導入による影響か、2年生の9割近くがICT機器を扱う能力の向上を実感している。一方で「探究」の意義を理解できていない生徒への意識づけや生徒が探究活動を行える十分な時間を確保するため、全職員の教育活動における共通理解や指導体制を構築に向けたさらなる研究が必要である。

3 WWL 事業に関する教職員アンケート分析と考察 (拠点校)

(1) 実施日 2月9日(月)～2月18日(金) 全日制職員対象 回答数 34 (回答率 55%)
 ア WWL 活動に対する教職員の分野別満足度



イ WWL 活動を通じた生徒の成長について



ウ 記述回答

- 台湾に行きたかった。オンライン交流では相手校のおかげで楽しい交流ができ、またやりたいという気持ちに生徒はなったと思う。
- 生徒が一人一人活動するのはすばらしいことだと思うが、教員の負担がアンバランスだと感じた。
- 1年生対象の、課題の設定の仕方を教える時間があるのは良かったと思う。
- コロナ禍でオンラインによる取り組みが多く、生徒にはもっと吸収できることがあったのになってしまう。
- 意欲の高い生徒には多くの機会が用意されていることがとてもありがたい。
- GS 報告会午後部をみて、もっと生徒は自主的に動くことができると感じた。
- 主体的・自主的な学びになるよう、仕掛けていくにはどうしたらいいだろうか。
- 問題意識を持たせるにはどうすればよいのか。課題が自ら設定できれば、その後の学びはすんなりと進んでいくのではないか。
- 自治体、国の取組を批判するレポートをみると、自分がどう関わるか(実証)を補ってあげられたらと思う。
- 生徒が探究で何か行うときはある程度教員がチームを組んで取り組むべきだと思う。
- 個人研究の前にグループ研究の機会を設定し、データの集め方、意見集約の方法などスキルを高める取り組みを教科横断的に取り組む必要があると思う。

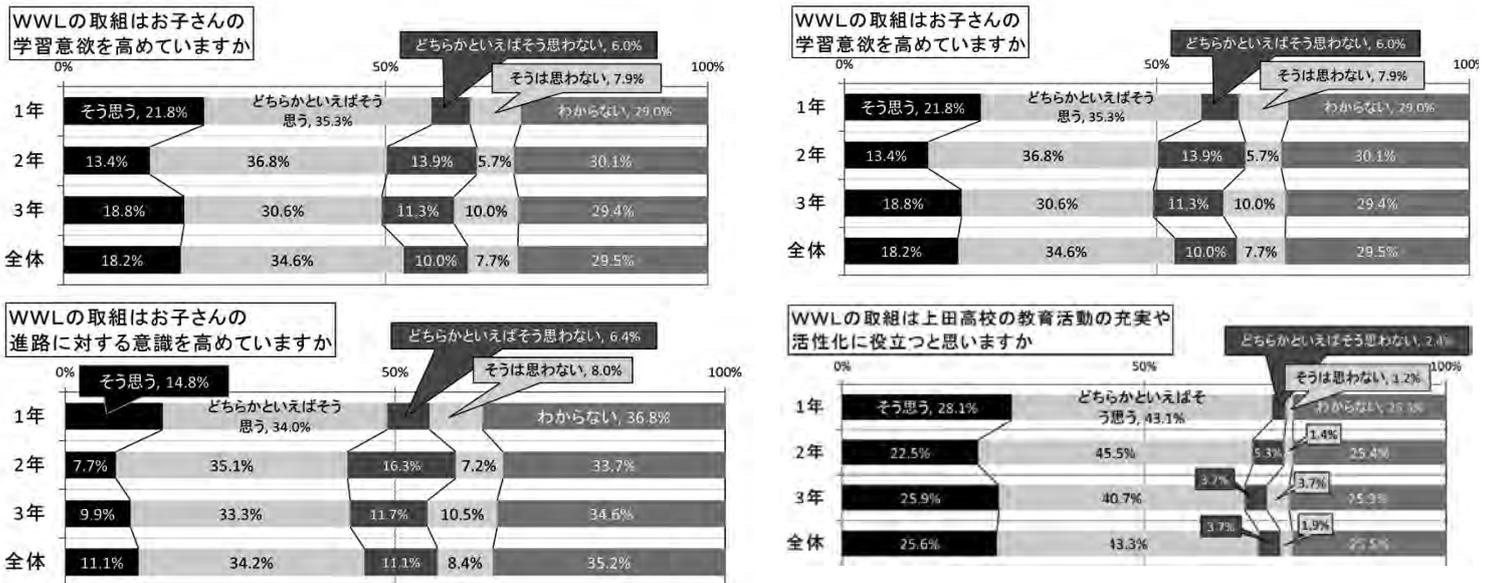
(2) 分析・考察

今年度も昨年を引き続き多くの探究活動や WWL に関する行事の制限や、形態を変えて実施せざるを得ない場面が多かったものの、GS 報告会や台湾高級中学との交流など、オンラインの利用により、結果的に思わぬ効果が生まれ、今までの取組をブラッシュアップするよい機会となった。一方で、海外渡航ができなかったことにより、国際的な学びについては対面での実施を強く望む声も多く、コロナ禍における国際交流の在り方について検討していきたい。職員全員で課題研究指導を行っている効果か、例年以上に生徒の探究活動の指導方法に関する意見が多く寄せられた。本校での課題研究指導も7年目を迎え、改めて「探究」を教育活動の中心に据え、本校での探究を通して育成したい資質能力や生徒が探究活動を通して自己の在り方生き方を考え、進路を選択していく支援の在り方やそのための指導体制について全職員で共通理解をはかることが喫緊の課題である。

WWL 事業の評価と考察

3 WWL 事業に関する保護者アンケート分析と考察 (拠点校)

(1) 実施日 9月3日(金)～9月17日(金) 全学年保護者対象 回答数 629 (65.9%)



(2) 記述回答

- ・全員参加のボランティア活動・社会貢献活動をしてほしい。(きっかけ作りのため)
- ・WWLに指定されていますが、探究心を持って何かに取り組もうと思っても、なかなか時間が取れず、中途半端で終わってしまうと、子供が言っています。
- ・3年生は、コロナ禍でフィリピン・台湾での現地研修、首都圏フィールドワークができませんでした。卒業まで半年しかありませんが、何か楽しい思い出になる行事を是非検討していただきたい。

(3) 分析と考察

全保護者を対象としたアンケートからは、全般的には肯定的な意見が多いといえる。一方で WWL 行事や探究活動とクラブ活動や学習に費やす時間について悩む生徒も多く、探究活動と各教科の内容を往還させ、教科横断的な視点で全職員が連携を図り探究を教育活動の中心とする体制を整えていきたい。

4 GPS-Academic テストによる3つの能力評価についての分析と考察 (拠点校)

(1) 概要 汎用能力として社会に必要な3つの思考力である批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力を測定するアセスメント

実施日 12月18日(木) 1・2年生対象

(2) 1・2年生全体

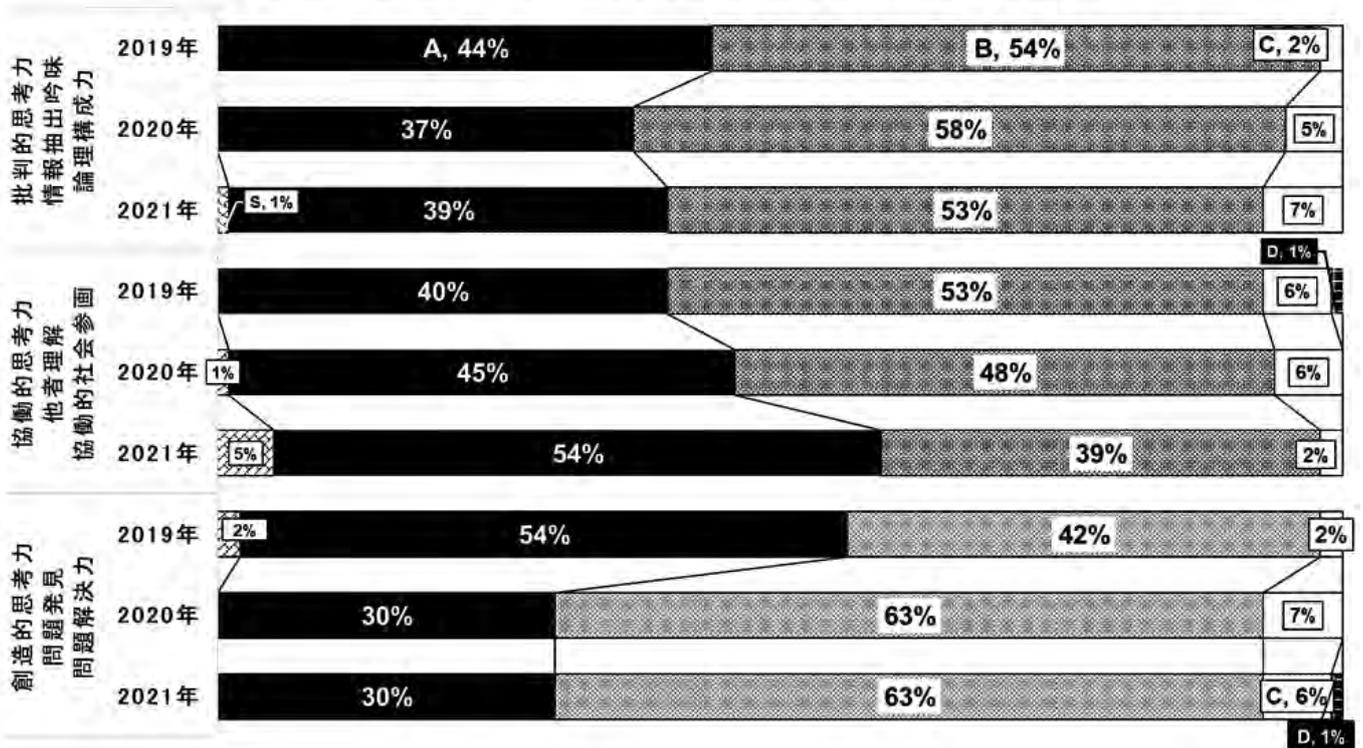
ア 学年全体到達度

到達度の高い順に S・A・B・C・D の5段階で評価 2年生の()内は1年次の到達度

資質・能力	到達レベル		Can-Do
批判的思考力	2年	B (B)	<ul style="list-style-type: none"> ・提示された資料から必要な情報を抽出し、その情報を客観的かつ正しく評価できる ・適切な主張や根拠を提示し、説明できる
	1年	B	
協働的思考力	2年	A (B)	<ul style="list-style-type: none"> ・他者の信念や価値観を理解・尊重しながら一定の条件下で合意形成ができる ・身近な範囲で問題をとらえ、他者とともに解決策を検討できる
	1年	B	
創造的思考力	2年	B (B)	<ul style="list-style-type: none"> ・条件に沿って、よいと思う解決策を選択したり、ほかの事例との関連性を見出したりできる ・問題の枠組みを理解し、解決のための条件を満たし解決策を提案できる
	1年	B	

イ 3つの思考力ごとの到達度分布

1・2年生 3つの思考力ごと到達度度数分布 経年比較



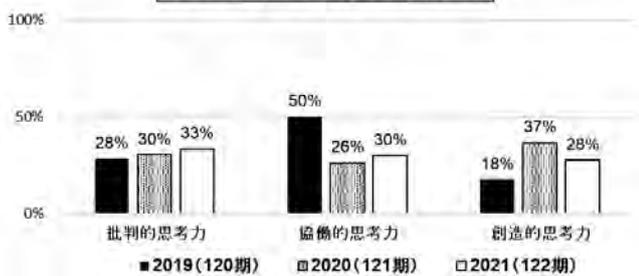
ウ 分析・考察

今年度実施した GPS-Academic テストの数値を、昨年、一昨年を含めた過去3年間の経年変化で考察した。3つの思考力のなかで、批判的思考力はあまり大きな変化は見られないが、本校で力をつけさせていきたいと考えている協働的思考力はS・Aランク層の割合が過去2年は4割台であったものが、今年度は6割弱と大きく増加し、層が厚くなった。一方、創造的思考力は3年前と比べてS・Aランク層が減少傾向を示しており、今後の課題といえる。

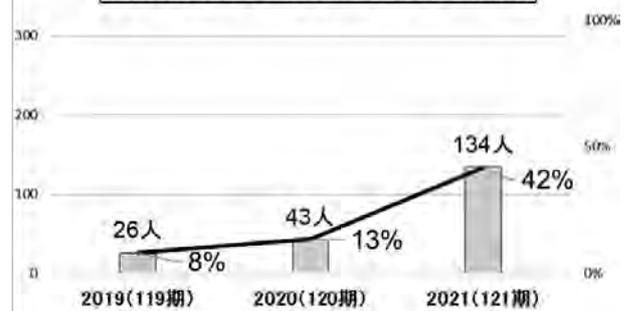
(3) 学年ごとのデータ

ア 1年生 (2021年度入学生) 8クラス 320人

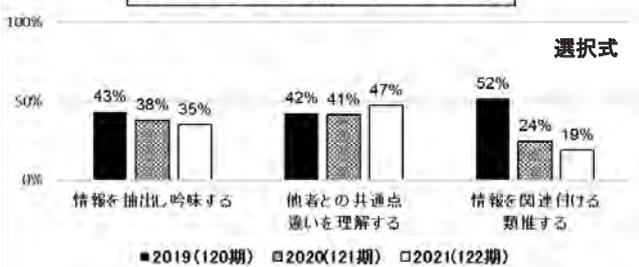
Bレベル以上1年生経年比較



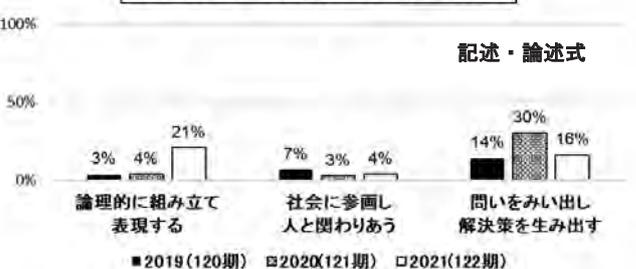
着眼点が出ている答案を書いた人の数と割合



Aレベル以上の割合 1年経年比較

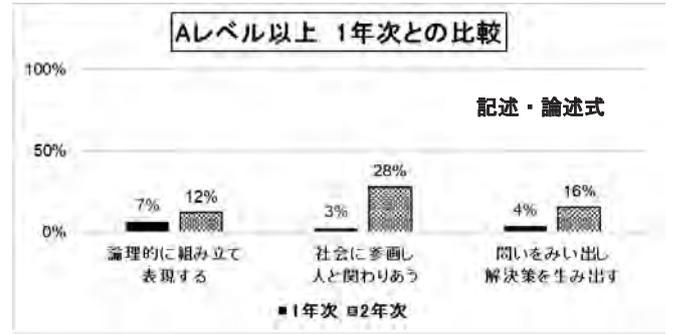
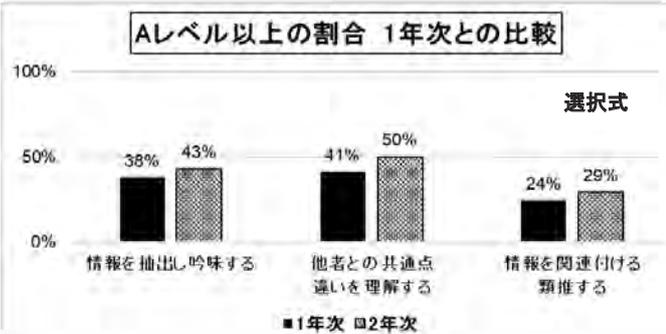
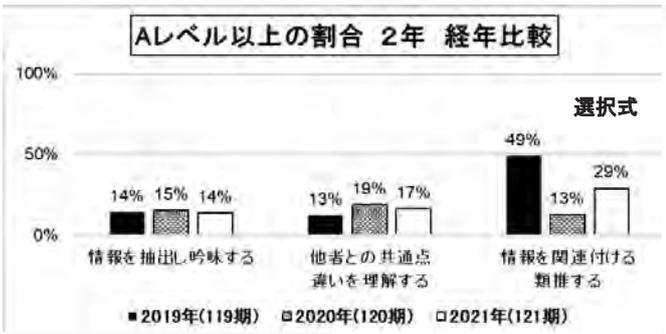
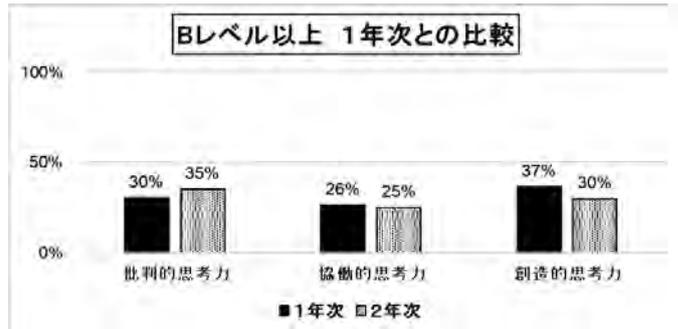
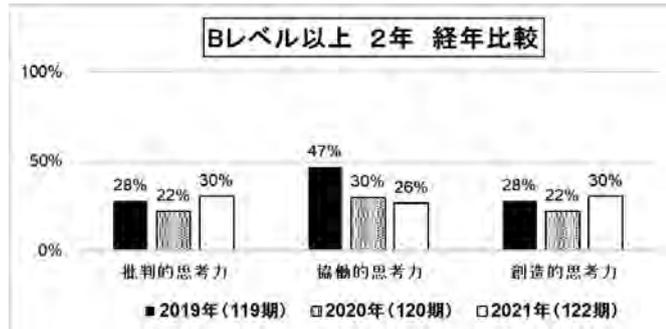


Aレベル以上の割合 1年経年比較



※Bレベル以上：選択式問題の結果からB以上かつ最も評価の高い力を「強み」とし、各力に強みを持っている生徒の割合
 ※Aレベル以上：高校段階で目指したいレベルとして設定している「A評価」に到達している生徒の割合

イ 2年生(2020年度入学生)8クラス 318人



※Bレベル以上：選択式問題の結果からB以上かつ最も評価の高い力を「強み」とし、各力に強みを持っている生徒の割合
 ※Aレベル以上：高校段階で目指したいレベルとして設定している「A評価」に到達している生徒の割合

ウ 分析・考察

学年ごとの経年比較では、1・2年生ともに前年度と大きな変化は見られないもの「着眼点が出ている答案を書いた人の割合」が1年生は29% (43人→134人)、2年生は34% (41人→149人)と昨年度の生徒と比べ大幅に増加した(2年生のグラフは割愛)。また、Aレベル以上の割合を見てみると、1年生では、「論理的に組み立て表現する力」が過去3年間で最も高く、昨年度の2年生では大幅に低下した「情報を関連付け推測する力」が2019年度生の次に高くなっている。学年全体の「強み」と視点から批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力の3つの能力を、到達レベルから見るとバランスは取れているが、高校段階で目指したいAレベル以上の生徒の割合が増えることを期待したい。

Aレベル以上の生徒の割合を「選択式」「記述・論述式」の問題別に比較してみると、2年生においては、「論理的に組み立てて表現する」「社会に参画し人と関わりあう」「問いをみだし解決策を生み出す」の3つの観点で1年次よりかなり向上している。2年間の探究活動の中で課題の設定・情報収集・整理分析・まとめ表現の探究スパイラルを繰り返し身に着けた力であると考えられる。一方で「記述・論述式」で測定される能力が低いことがわかる。自分の考えを言語化し、わかりやすく論理的に他者へ伝える力をどのように育成するかが今後の課題である。

これらの汎用的能力としての思考力が教科学習とも相関がみられる。教科学習で得た知識を探究で生かし、物事の本質をとらえ、解決策を提案する力を養うための生徒への意識づけが重要である。そのためにも問題発見・解決のプロセスに必要な思考力を教科学習、進路学習、課外活動(部活動、主体的な活動)など探究を基盤として展開し、学校の全ての教育活動の中で育てていく体制をどう構築していくかについてより深い議論をする必要があると考える。

理念や目的と往還しながら実践を進める

カリキュラムアドバイザー 内堀 繁利
(長野県教育委員会事務局 高校改革推進役)



Nagano Prefectural
Board of Education
学び応援キャラクター「信州
なび助」©長野県教育委員会
信州なび助

長野県における WWL コンソーシアム構築支援事業は、令和2年度に文部科学省の指定を受け、今年、2年目を迎えた。

くどいようだが、下の枠線内に、本事業の概要を示した。

計画とかプロジェクトの類では、一般的に、まずは理念・目的があり、次にそれを達成するための目標や手法を決めていく。教育の世界に限らないと思うが、進める間に、いつの間にか、最上位の目的がどこかに飛んで、その下の個々の目標を達成することや手段を実現すること自体が目的化していってしまうということが、結構な頻度で起きる。

今年度、管理機関である県教委と、研究拠点校の上田高校、共同実施校の松本県ヶ丘高校、連携校の15校には、昨年を引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けつつも、それぞれの状況に応じた、様々な工夫を凝らしながら、研究を進めていただいた。運営指導委員の皆さんには、大変お忙しい中、会議にご出席いただき、時には温かく、時には厳しく、大所高所から改善に向けた方向性についてアドバイスをいただいた。

詳細は本報告書をご覧いただきたいが、皆さんのおかげをもって、今年度も充実した実践を積み重ね、目指すところに向かって大きく前進することができたと考えている。実践をする際に、あるいはそれを振り返る際に、常に理念や目的を意識し、そこの往還を図ってきた証左である。

本事業の目的は、イノベティブでグローバルな高校生を育成するための高度な学びを提供する仕組み(AL(アドバンスト・ラーニング)ネットワーク)を構築し、将来的に WWL コンソーシアムにつなげることにある。来年度は、いよいよ本事業の最終年度を迎える。これまで形にしてきた様々な仕組みをブラッシュアップするとともに、準備してきた高校生国際会議や大学授業の先取り履修などの新たな仕組みを実施に落とし込み、目的に向けてさらに前進できることを願っている。

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業とは

- 目的：将来、新たな社会を牽引し、世界で活躍できるビジョンや資質・能力を有したイノベティブなグローバル人材を育成するため、高校生へ高度な学びを提供する仕組み(AL ネットワーク)を形成し(た拠点校を全国に配置することで)、将来的に WWL コンソーシアムへとつなげること
- 高度な学びの例：テーマを通じた高校生国際会議の開催
- 手段：
 - ・ これまでの SGH 事業の取組の実績等グローバル人材育成に向けた教育資源の活用
 - ・ 高等学校の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備
 - ・ 高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等との協働 など

※WWL コンソーシアムは、高度かつ多様な科目内容を、生徒個人の興味・関心・特性に応じて履修可能とする高校生の学習プログラムの開発と実践を担うものとして想定されており、将来的に、高校生6万人あたり1か所を目安に、各都道府県で国立、公立及び私立の高等学校等を拠点校として整備し、すべての高校生がオンライン・オフラインで参加することを可能とする仕組みを持つことが目指されている。

(文部科学省「実施要項」より)

令和3年度 信州WWLコンソーシアム構築支援事業
第1回運営指導委員会議事録

期日 令和3年(2021年)6月21日(月)14:00~16:00

場所 オンライン開催

参加者(敬称略)

運営指導委員

参加者 小村俊平、荒井英治郎、坪谷ニューエル郁子、南希成、森茜

欠席者 讃井康智委員(仕事の都合により)

カリキュラムアドバイザー 内堀繁利

学校関係者(拠点校:校長ほか6名、共同実施校:校長ほか7名、連携校:担当者)

教育委員会(今井教育次長ほか4名)

1 開会行事

教育委員会あいさつ(今井次長)

カリキュラム開発拠点校校長あいさつ(北澤校長)

参加者紹介

日程説明

2 議事 取組報告

管理機関

- ・今年度から連携校が4校増加。
- ・昨年度実施した事業を継続しながら令和3年度は高校生国際会議の準備、海外大学生のインターンシップ受け入れ、留学生受け入れのネットワークづくり、探究のプラットフォーム作りに注力していく。
- ・学校間連携として可能なものについては相互乗り入れ、互いに学び合い生徒により良い教育を提供するALネットワークの構築を図る。

カリキュラム開発拠点校(上田高校)

- ・海外研修は春休みにオンラインで実施した。
ボストン・・・他校生の参加
マニラ・・・フェアトレード商品を通じて現地と交流
カンボジア・・・オンラインでも実施はできなかったが、バザーや情報発信などできる活動を継続。毎日みらい賞受賞。
- ・KDDIとの連携授業
- ・令和3年度は校内体制の充実、3年生への支援の充実を行なっていく。
- ・新カリキュラム導入にむけての研究

- ・国際会議に向けた準備

共同実施校

AL ネットワークの目標の達成に向けて取り組むべき6つのこと

「探究し続ける県陵人」

- ・プラットフォームへの参加～探究活動の流れの中に位置付けている。
- ・海外研修/留学生受け入れ/海外大学進学～オンラインで実施。3名が海外に留学。
- ・英語力の向上～地道に指導を継続したことが向上につながった。全国高校生フォーラムで審査委員長賞受賞。
- ・高度な学び～SAP（サイエンス・アソシエーション・プログラム）を利用して生徒向け研修（神戸大学等）、東大金曜講座等のオンライン講座
- ・カリキュラム開発～進学型単位制の導入。全職員で探究を支援
- ・高校生の主体的な活動～「生徒会交流会」
*WWL だから特別にやるのではなく、普段の探究活動と連携した取組。

内堀カリキュラムアドバイザー

- ・事業自体はWWL コンソーシアムというものを将来的に作ることを目的として指定期間内にはAL ネットワークを構築すること。
- ・WWL はおよそ6万人ぐらいの高校生を対象にしてイノベティブでグローバルな人を育てることを目的として、高度で先進的なカリキュラムを開発していく仕組。
- ・本県はこれまでも高校生が参加できるプラットフォームを作ってきているので、AL ネットワークが構築されればWWL コンソーシアムにつなげることは比較的短時間でできると考えている。
- ・評価や教員の研修といった周辺の事業にも取り組みつつ、AL ネットワークとして持続的に用意すべきプログラムを今年度来年度の実践を通じて作っていくことが本年度の課題と認識している。

小村座長 委員からコメントを。

荒井委員 コロナ禍という逆境にめげず取り組んだ成果が生徒の「学びに向かう力」として効果が出ている印象をもった。評価に関してだが、学びの指標の議論やWWL の各種取組をどのように評価していくのかはしっかりと検討していくべき課題。皆で意見交換しながら力を注いでいく必要があると強く感じている。

坪谷委員 AL ネットワーク構築の課題として教員の研修そして評価という話が出たが、例えば評価についても、明確にどんなスキルを育てたいのか、これは非認知能力を含むが、それに対応する客観的なルーブリックを作ることになるだろう。やり遂げる力やパッションを持ってやっていく力であったり、違う意見も受け止める力であったりとかさまざまなスキルがある。それらをそれぞれ設定して、それに対応するようなルーブリックになると思うので楽しみにしている。

森委員 インターネット上で他のグループが展開しているこの取組と比べたときにこの長

野県の最大の特徴というのはこのプロジェクトに入ったからこれを始めた ということよりはもともと長野県のそれぞれの学校あるいは教育委員会の指導の下に長野県全体で取り組んできたことを WWL コンソーシアム構築という文部科学省の大きな構想の中に全部取り込んでコンソーシアムを作っていくことである。新しい計画で新しいことをやっても定着しないが、持続させていくためには日常の活動の中で この課題や新しいプロジェクトに係るようなものを 1 つずつ集約して構築化しているということが行政としてどう行われるか、そういう点でこの長野県のこれはとてもユニークで足腰の強いものになると思う。今年も今まであるものになにか新しい視点を加えてそれが日常においていくような内容が たくさんの学校からたくさん盛り込まれるということを期待している。それらを構築して行くのが私たちの仕事かなと思っている。

南委員 色々やりづらい状況の中で工夫して教員も生徒もやっていることは感心した。

この状況を逆にバネにして面白い取組ができるといいと感じた。生徒自身が事業評価に参加する話が出てきたが、どのような形でやっていくのか関心がある。

小村座長 簡単に 2 つ申し上げたい。1 つが、この 2 年ほどで本当にデジタルの活用が一気に進み、社会の環境が変わったことをしっかり捉えていきたい。2020 年に OECD と文部科学省の研究のプロジェクトで国際会議をオンラインで開催した。最初は、リアルで集まって会議をしないことに反発を受けたが、それから 1 年、2 年近く経ち、オンラインの会議が当たり前になった。リアルだからできることもオンラインだからできることもある。今小中学校では、GIGA スクールで 1 人 1 台端末が進んでこれから日常の学びの中でデジタルを当たり前のように使うことがどんどん増えていく。そういった流れの中で来年国際会議を迎えると考え、コロナはだいぶ終息に向かう流れができつつあるところではあるが、元に戻る話ではなくて、この社会の変化をうまく受け入れて、デジタルだけにこだわる必要はないが、デジタルをどう使うかも 1 つのポイントになると思う。もう 1 つはこのあと何で勝負するかというと 1 つは学校内外への浸透度である。言い換えると生徒にせよ先生方にせよ、いかにして 1 部の人だけではなくて、多くの人にとって当事者意識をもって参加してもらうか、ということ。いろいろな関わり方があってもいい。どっぶり中心として参加して運営に関わるものもあれば、1 部だけ参加でもいい。あの人たちがやっている、ではなくて、皆のものにしていくことが大事。これにより、単なるお祭りイベントではなく、このプロジェクトを経て長野県全体の学びをもう 1 段深いものにしていく機会になると考える。荒井先生がおっしゃったように年に 2 回の会議を節目としつつも、途中で全員が集まるのは難しいかもしれないが、テーマに関係する人たちが集まって深く対話していくことも大事で、こうした場面で色んなステークホルダーの声を集めていくことが重要だと改めて感じた。

荒井委員 資料 7 ページに各校の行事予定があるが、生徒の参加が「可」の行事に関する情報は、生徒がアクセスできるような状態で「見える化」することが大事だと思う。以前

もホームページ等の更新なり、条件整備の話をしたと思うが、情報公開や公共性の担保という意味からも対応いただきたい。

坪谷委員 来年、国際会議を開くということでこのコンソーシアムの取組が日本に伝わっていく、さらに世界に伝えるためには、プレゼンの仕方が重要。どうやったら効果的なプレゼンができるのか、ボディランゲージや声のトーンや速さなどいかに効果的に人を惹きつけるような言葉のスキルがあるのは非常に大切。少し指導すると、子供達はあっという間にプレゼンが上手になると思う。

森委員 参加校も増えてそれぞれの生徒の関心も多様になって学校の関心も多様になったところといえる。コンソーシアムの実験としてのまとめの視点っていうのは持っていた方がいい。その点で SDGs を 1 つのそのマトリックス表の視点に加えることをぜひとも検討してほしい。

議事 分科会

高田生徒実行委員長（北陸新幹線サミットの概要説明）

6月12日に北陸新幹線サミットを行ない、県内及び新幹線沿線にある高校の生徒を中心として課題研究の発表と意見の交換会をしました。当日は対面とオンラインのハイブリッドで長野、東京、埼玉、石川それから台湾、アメリカ、オーストラリア、フランスの高校生 52 名が参加しました。「今を生きる地球市民——変化に適応し持続可能な社会をつくるためのアクションとは」のグランドテーマで全体会と4つの分科会を行ないました。今私たちの周りには新型コロナウイルスや気候変動、貧困の問題、飢餓の問題など様々な問題があってその課題は日々進行したり、私たち地球に生きる人たちの生活を変えてしまうものもあります。そんな課題を解決するために同じ地球を共有し合っている私たち地球市民には何が出来るのか、そして私たち高校生が今やるべき事は何であるのかを考えようという意味をこのグランドテーマに込めました。

当日はまず全体会で基調講演としてベネッセ教育総合研究所の小村俊平さんにご講演いただきました。「未来を創る探究的な学びとは」ということで感じたこと考えたことを大切に。それから対話を大切にしてその感じたことや考えたことを体系化する。そして他者との対話を通じて自分とは異なる物事の見方を知ることが大切だと学びました。

分科会は「環境」「まちづくり」「いのち健康」「post COVID-19」の4つに分かれてそれぞれプレゼンテーションとディスカッションを行ないました。この北陸新幹線サミットを開催するにあたって今年は3月末から北陸新幹線サミット実行委員会を立ち上げてどんなサミットにしたいかを話し合ってきました。そこでディスカッションの時間を長めにやりたいという意見が出て分科会ごとに考えてディスカッション時間の調整をしました。情報公開のためのポスターやホームページも実行委員が作成しました。サミットを運営してみて、何を話し合いたいのかそれからどのように進行すればよ

いのかを考えるのが大変でしたが、実行委員でたくさんの打ち合わせや練習を行っていたのでサミットが終わった後の達成感は大きかったです。また私たちと同じ高校生が何を考えているのかを知るいい機会になると同時に、高校生のみなさんの個人の研究や活動を知ることができてすごく刺激をうけました。

<分科会①>

分科会①より報告

- 第1分科会（高田綾乃）北陸新幹線サミットの実行委員会で1から準備をしたことを褒めていただいた。反省点として司会進行するのに参加者の意見を汲み取ってすすめることが不十分だった。改善しながらやっていきたい
- 第2分科会（佐藤優衣）コミュニティの定義とは？との質問をいただき、分かり合えない人との付き合い方を考えていくこと、多様性を大事にしていくこと、どこまで多様性を受け入れるかななどの問題提起をいただいたので考えていきたい。
- 第3分科会（和泉結生）自分たちのまとめに対して質問や意見をいただいた。高校生が情報発信することや活動に参加することをしっかりやって、それらを身近な人に勧めていきたい。
- 第4分科会（神谷日奈子）ポストコロナに向けてどう経験を生かすかを海外の生徒も交えて話し合った。英語はおろか日本語でもディスカッションはあまりしたことのない状況で、オンラインとリアルのハイブリッドな会議を進めることは難しかった。ディスカッションで伝えたいことを考えて、伝え方を工夫していくことをご指導いただいた。今後活かしたい。

<分科会②>

小村座長 本来分科会の様子をシェアできれば良いが、時間の都合で委員それぞれからコメントをもらいたい。

坪谷委員 長野県の先生方のパッション、生徒たちへの愛情に感心しているところ。実はタブーになっていて、皆が目を逸らしていると感じていることは、身近にある多様性の視点の1つである、経済的社会的属性の多様性である。先程の教員との対話の中で、これに目を向けることを取組に入れてほしいとお願いをしたところ。例えばその経済的な多様性で言うと、日本は今7人に1人の子供が相対的貧困であるという現実がある。このコロナ禍でさらに例えば公立はBYODになっていく中でそういったことが問題になっている生徒もいるのかもしれない。その中でそのスキーム、システムだけではなく、高校生自らが多様性とは国籍や宗教や文化やジェンダーだけではなくそういった経済的社会的な属性の多様性もあると知り、その中でその一人一人が持つ

ている輝く部分を引き出して、それをこれから先のキャリアに繋げていくためにはどう
いうスキームを使っていったらいいんだろうか、どういう風に教育がなっていった
らいいんだろうかという視点から考えていくことができるとしたら長野県ではない
かと期待するところである。

森委員 今後の運営に向けて申し上げたいと思っていることが2つ。1つは今回長野が引
き受けた WWL コンソーシアム構築というこの壮大な教育実験は前回のグローバルハイ
スクール構想を超えてグローバル化というものがすべての子どもたちの身近な問題にな
るような教育の方法を見つけようということにあると考える。つまり前の実験では高校
生ながらグローバル化で突出したリーダーを育てようという側面もあったかと思うが、
今回のこの実験の大きな 眼目というのはどの子に対してもグローバル化、どの子も多様
性の中の大事な1つである、ということを経験としてどうやっていくかというところ
に目的がある。そういう意味では、この1年半の経験はその目標に向かって着実に進
んでいると考える。その大きな要素というのは長野がそれぞれの地域や学校で取り組ん
でいる活動を新しい目で見直してもう一度それを集めてブラッシュアップしていること
にある。これを引き続き押し進めていけば来年にはなかなか良い実験結果が出せるの
ではないか。2つ目は、自信を持ってこの実験を一緒に進めていきましょうということ。

南委員 今日の会議で、新幹線サミットのことや各高校の取組のことを聞いて、テーマは大
きくても学生たちが身近なところで自分に問題を引き寄せて取り組もうとしているこ
とがわかり、いい方向で学びを進めているのではないかなという感想を持った。コミュ
ニティって何だろうとか、多様性とは何だろうというのは非常に難しい問題だが、引き
続きこういったネットワークを通じた中で学んだり調べたりを進めることで、より学生
皆にとって価値がある学びになっていくと思う。それを学生たちがまた評価しつつフィ
ードバックをしてよいものにしていくという流れができればいいのではないか。

小村委員 今後の運営指導委員会、来年に向けて国際会議を開催するという観点で言申し
上げる。OECD の国際会議などにいくつか参加したり、日本で実際に国際会議をホスト
をしたこともあるが、国際会議をホストするのと参加するのには大きな違いがある。
OECD の会議に年2回参加してきたが、国際会議に参加する時に何をするかというと、
毎回日本チームとして、「何を達成したいか」「何を指すか」ということを目線合わせ
をする。具体的には OECD の日本政府代表部つまり出向している日本政府の関係者、文
部科学省、一緒に出席する研究者、学校の先生で、今回こういうテーマで議論がある、
これに対して日本のスタンスはこうで、こういう日本の姿をアピールしよう、日本から
の知恵としてこんなことを発信しようなど、そういう目線合わせをする。これが国際会
議に参加する立場として私たちが努力してきたこと。一方、国際会議をホストするとな
るとこれだけでは済まない。何が違うかというとホストをするということは自分達の国
だけではなくて他国の成果に対してもコミットとまではいかななくても、他国も良い成果

を得られるように応援することが主催者の使命である。ここが大きく違うところ。今日の議論は、参加者としての議論だとすればパーフェクトに近い議論だと思うが、ホストするとなるともう1段深い議論が出てくる。この国際会議に誰が参加してくれるのか、長野県だけじゃなくて長野県以外の人たちにとってどんなことをお土産に持って帰ってもらうのか、ビフォーアフターでどんないいことがあるのか、あるいは長野県に色々な人が集まることによって全体としてどんな新しい発見があるのか、そのデザインこそが今後の後半戦のこのWWLの成果を決めるものと思う。今何が悪いというわけではないが、これからのミッションを問題提起したということ。これは先生方にとっても生徒たちにとっても、自分達だけではなく、参加する全ての人たちにとってどうすればよいものになるか、後半戦に向けて一緒に考えていくことを私からの問題提起としたい。

森委員 来年の国際会議に向けて準備をするという点で 私たちとコンソーシアムがどんな取組をしてきたかも踏まえて行かないといけないので、本来は来年の今頃にまとめればいいことではあるが、今年の秋頃には若干、まとめの目で整理ができるといいと思う。

3 閉会行事

廣田高校教育指導係長あいさつ

<参考>分科会の記録

分科会① 運営指導委員・生徒・教員の対話

第2分科会【まちづくり】

発表者：佐藤 優衣 さん

1 北陸新幹線サミットでの報告

- ・今日のデジタル社会、多様化している社会の中でコミュニティが希薄化してきている。こうした現状で、地域に暮らす外国人などとの接点がなく、お互いに理解がないために様々な問題が生じている。
- ・このような社会の中で相互理解を目的としたコミュニティ作りをディスカッションし、こうした人と相互に理解ができるようなコミュニティや場作りをしながら今日からできるまちづくりを考えていくということになった。
- ・ディスカッションの中で出た意見をまとめ、コミュニティが希薄になっているという現状で、多様性を考え、多くの人から協力を得ながらどのようなまちづくりをしていくかという中で、次のような提言がなされた。
 - ①多様性を他人事ではなく、自分事にしよう
 - ②生徒一人一人でコミュニティを深めよう
 - ③自分で興味があることに参加しやすいコミュニティの場を作る
 - ④些細なことでもいいので意見交換をして相互理解ができる仕組みづくり

こうした場に積極的に関わり、高校生の立場で様々なコミュニティを形成することが重要である。

2 質疑応答

(1) 信州大学 荒井准教授からの質問・アドバイス

荒井先生：佐藤さんにとってのコミュニティのイメージはどのようなものなのか。コミュニティとは地域を指すのか、SNSを指すのか、また高校生はみんな同じイメージだったか。

佐藤さん：学校で提供された情報をもとにイベント等に参加したときに感じたのは、どんな立場でも、年齢でも参加できるような場が大切であるということ。コミュニティは友達ができる場、仲間ができる場であると思う。

また、高校生の中にもコミュニティのとらえ方は様々で、田舎と都会で抱えているコミュニティに対する問題の違いが関係していると思った。田舎であれば人が少なくてコミュニティが弱体化しているから、人を多く集めるようなコミュニティが必要である。都会ではもともと人と人の関わりが薄いからコミュニティが弱体化しているので、人と人をつなげる働きが必要である。

荒井先生：これからのコミュニティのあり方は価値観に違いがある中で、わかり合えない人たちと関わるのが大切である。これが21世紀のコミュニティ作りに大切であるから、そういうことを考えながら新しいコミュニティを作ってほしい。

(2) 国連大学協力会 森 茜 様からアドバイス

森先生：私たちの高校生の頃と現代のコミュニティは大きく違う。20世紀のコミュニティはそれぞれのバブルがあり、そのバブルには見えない壁があってそれぞれが交わることがなかったが、現代は一つのバブルでそこには壁がない。しかし、その中に様々な多様性が存在し、そうした多様性とは何なのかを考えてコミュニティを作る必要がある。その多様性は多岐にわたっているため、なかなか答えが出せない。こうした多様性をしっかり考えたコミュニティ作りが大切なので一緒に考えていきましょう。

3 佐藤さんの感想

- ・まだまだ人生経験が足りないなので、私たちに考えられる事には限界があるが、様々な意見をもらいながら、多様性であるとか、価値観の違いであるとかを真摯に考えていきたい。

分科会4【Post COVID-19】

発表者: 神谷日奈子さん

1 北陸新幹線サミットでの報告

- ・テーマ設定についてー海外の高校生を招待するというので、同時期に世界各国が直面しているテーマを選んだ。
- ・国、地域、個人の3つの大きさに分けてディスカッションを行った。オンライン授業についてのディスカッションでは、人それぞれ合う、合わないがあるということが分かり、個人に合わせた授業が必要であるという意見が出た。
- ・まとめー「今まで普通だと思っていたことは普通ではない。コロナを通して今しかできないことから新たな発見をする。」

2 質疑応答

Q1: オンラインディスカッションを母語以外でするのは相当大変だったと思われる。

どのような所が難しかったか。

- ・2週間前に事前ミーティングをしたが、うまく伝わらなかった。
- ・招待などすべてメールでやり取りするのが難しかった。
- ・ファシリテーターを務めたが、その場にいる人とオンラインの人にバランス良く話を振るのが難しかった。

Q2: 時差に対する配慮はしたか。

- ・当初は時差2～3時間程度の範囲内の高校生に声掛けする予定だったが、フランスやアメリカの高校生にも声を掛けたところ快く応じてもらえた。

3 坪谷委員より助言

- ・文化的背景が違う中でのディスカッションは苦労したと思うが、良い経験になったのではないかと。「場数を踏む事」「慣れる事」も大事なことである。
- ・会議の「実施側」と「参加側」では異なる心構えが必要である。
- ・プレゼンのテクニックも学ぶと良い。「伝えたいことはハッキリと」「誰にでも分かる言葉で」

4 生徒から

- ・反省点が多かったが、これからの生活に生かしていきたい。

分科会② 運営指導委員・教員の意見交換

第4分科会（司会：白鳥敏秀（上田） 記録：大房信幸（飯田））

最初に運営指導委員の森茜様より、「人と違っていいという価値観を身に付けるためには、どのような教育が必要か」との投げかけがあり、それを基に意見交換を行った。

【松本県丘】

- ・探究学習で調べて終わりではなく、実際に作ってみることが大切では。
- ・社会の役に立つことも重要だが、自分で開発を行ったという経験が今後の学びに生きてくるのでは

【篠ノ井】

- ・小さな気付きが大きな可能性につながるかも
- ・生徒の自由な発想を教員がつぶさず活かしていくことが大切

【飯田】

- ・多面的な知識を身に付け、それを活用していく機会を設けることが大切
- ・生徒は実践する過程で成長するのでは

【上田】

- ・県内で同じテーマで探究学習を行っている生徒はたくさんいるはず
- ・教員の役割は生徒がつながれる場を作ること
最後に森様より、以上の意見を「各校の教育プログラムに落とし込んでいくことが大切」との指摘があった。

第5分科会

【南委員】

前半の分科会では高校生が発言することに関してその価値・意義を認識した。高校生らしい発表で、もっと詳しく聞きたかった。新幹線サミットやその報告を聞いて何か議論・コメントは？

【市川（上田）】

生徒達が具体的な議論ができていたと感じる。これはテーマの立て方が良かったためだと思われる。「テーマの立て方」、「振り返り」は大切であり、今後も意識することが重要。

【南委員】

海外ばかりではなく、まずは自分の近くに問題意識を向けることが高校生にとって重要。背伸びせず、まず身近なことから問題を見付けるべき。そのようなコンテンツ力こそが、その後に生きてくる。

【近藤（県が丘、司会）】

そのような観点で、各校の取り組みはどうなっているか？

【倉石（伊那北）】

C P A 教養講座をずっとやっている。今は学内の取組だがこれを外に広げていくことも良いかも思っている。また進学校として、教養の立場からも入学試験にアプローチしたい。

【みちわ（伊那弥生）】

郷土愛プロジェクトを通して、地域を知る機会を設けている。そこからどんな問題意識を持てるか、という期待がある。探究の時間をメインに使っている。講師が来校し、グループ

ごとに活動するスタイルであり、地域に協力してもらっている。

【牧内（飯田）】

他校の活動を参考にしていきたい。今は課題研究では大学院との連携がある。また大学からテーマを貰って研究し、修学旅行時などに訪問し、発表するなどの活動がある。来年の1年生からは時間割内に探究的な時間を取り、しっかりと取り組む。

【南委員】

それぞれの学校の特徴を活かしている点が評価できる。生徒が自分の身近なところから問題を見付け、地に足のついた活動ができることが大切。さらにそこから新しい広がりがあることを期待している。（「ワクチンを打てば、海外に行けるか」という質問に対して）そうならば良いな、というのが集団免疫の考え方であり、その方向に持っていくためのワクチンである。来年10月に海外に行くことは、運が良ければ可能であろう。

令和3年度 第2回信州WWLコンソーシアム構築支援事業議事録

期日 令和3年(2021年)10月11日(月)14:00~16:45

場所 松本県ヶ丘高等学校

参加者(敬称略)(会議会場への直接参加とZoomによるOnline参加のハイブリッド会議で実施。)

運営指導委員

会場参加者;小村俊平、讚井康智、荒井英治郎 各委員

オンライン参加:坪谷ニューエル郁子、森茜 各委員

欠席者:南希成委員(仕事の都合により)

カリキュラムアドバイザー 内堀繁利

学校関係者(拠点校、共同実施校、連携校)

教育委員会(今井教育次長以下3名)

諏訪二葉高校 台湾の高校生とのオンライン交流、探究「広くつながる」を意識して外部と連携
伊那北高校 コンスタントに活動を継続することを意識。地元大学の留学生とのワークショップ
伊那弥生ヶ丘高校 探究的な学びが立ち上がってきたところ。課題を授業改善に結び付けたい。
飯田高校 本格的な探究3年目。対話により学びを深めるワークショップの実施。

管理機関

- ・学校によって取り組む分野に違いがある。ネットワークのメリットにしていきたい。
- ・既存のプラットフォームもALネットワークで広く活用いただいている。
- ・今年度後半は、共通の評価アンケートや留学生受け入れネットワークの組織化に取り組んでいく。

(2)国際会議について

令和4年6月実施

生徒の実行委員会を組織して「高校生が作る高校生のための高校生国際会議」を目指す。

(3)カリキュラムアドバイザーより

- ・連携校が増えてきていて、コロナ禍ではあるが、できることを探して取り組んでいること、一つの学校にとじずに他校や地域や大学などと連携した外に広げていく試みがなされていることは心強く感じる。
- ・この事業は、WWLコンソーシアムの中核になるALネットワークを作る取組である。ALネットワークを中核として、プラットフォームも活用しつつ長野県全体に提供できる仕組みを作っていく。拠点校、共同実施校以外の連携校から声をかけることが出てきたことは良い傾向。
- ・高校生国際会議については、「どう見せるか」よりは、本質的な生徒の主體的な取組としての会議にしていくことに挑戦していきたい。
- ・「探究」と受験勉強は対立するものではなく、探究の先にあるものだという認識が大切と考える。

(4)運営指導委員からのコメント

讚井委員 各校がより良い探究的な学びを作っていくときに、これまでの取組からカリキュラムマネジメントのポイントを俯瞰的にまとめていくことが大切だと考える。4つの観点それぞれに対して、どうしたらより国際的と言えるのか、生徒にフィードバックを与えることで探

究が深まった、などの各学校の good practice をもとに俯瞰的な成功事例の分析のようなものが行われると3年目以降、他校に取組を広げていくときに有益だと考える。

坪谷委員 参加校が増えて、コロナ禍でもできることを模索して取り組んでいるのは喜ばしいこと。探究 vs 教科の学習ではなく、教科学習も探究の延長としてとらえる考え方もよい。英語については、教科の学習とは異なり、母語と対象言語がどの程度の親和性があるのかにもより、英語を日本語話者が学ぶ場合は3000時間必要と言われている。英語が苦手な生徒でも参加できるしくみを作ろうというのはよいことだと考える。

森委員 この WWW コンソーシアム構築支援事業の意図するところは、グローバルな多文化社会の構築に向けて日本はどうかを考える取組と考える。そのことに考慮すると、これまでの優秀な高校だけにおける国際化・国際交流とは異なり、足元から多文化社会をどうつくるかという点に焦点をあてているものと考えられる。その観点から、従来の実績も踏まえた地道な長野県の取組みに感銘をうけた。モデル校や連携校を作るだけでなく、横にも縦にも、学校間にも地域にも輪を広げていこうという信州モデルは、国際化活動の新しい地平を切り開くものと期待できる。

荒井委員 探究の質的水準をどのように高めていくのかという論点があると考え。1つは、個人の興味・関心に焦点を当てて、自己肯定感や自己効力感を育み、言わばキャリア教育として探究活動を位置付けるという一般的なキーコンピテンシーに着目して行われる「体験型探究活動」がある。もう1つは探究活動の高度化という方向性で、「巨人の肩に乗る」というか、先行研究の検討を経て研究基礎力を育成してくような「学術型探究活動」がある。後者に軸足を置きたいと考えているならば、少なくとも先輩や卒業生の探究の成果をアーカイブしていく取り組みを進めてはどうか。例えば、先輩が行った探究を先行研究に位置付けることにして、過去の成果をデータベース化して、生徒たちが検索するなどしてアクセスできるプラットフォームがあるとよいのではないかと。

小村委員 探究とは本来高校3年間で終わる必要はまったくなく、もっと遠大なものを見つけても全然構わない。最も学びにおいて大切なのは「深さ」。探究を中心としたカリキュラムは、改めて深さを大切にしようということだと考える。生徒がいかに深くダイブしたいものを見つけ、実際深くアプローチしていけるか、そこの議論が交換できるとよい。

探究バディは良い企画だが、生徒は自分がわからない途中段階のものを説明するのが苦手。困っているとか、助けてくれと言えるマインドがないが、このWWLをきっかけに探究には終わりはないのだから、発表も途中報告でいい、今ここまで来ているが、ここがわからないと言ってもいい。そうしたら色々な人が助けてくれるというマインドセットになっていくといいのではないかと。実際社会に出たら成果を自慢する人よりもうまく助けてもらう人が活躍する。この探究活動の中で色々な人同士で助けあう制度ができて、生徒が自己効力感を高めていけるような取組になればよい。

3 授業参観

(1) 松本県ケ丘高校「探究」の授業について

- ・探究科4年目。昨年1期生が卒業。
- ・80人の生徒を31人の教員が指導するゼミ形式。(週1回)
- ・1年生の発表に上級生が助言する形式ができてきたところ。互いにとって有意義。
- ・教員の指導力向上が課題。

- ・生徒の助言力を高めることも意図している。
- ・探究の高度化をふまえて、先行研究の重要性を伝え、グーグルドライブに載せた先輩の研究を見られる形にしている。

(2) 授業参観

2年生「探究α」第3回中間報告・助言会

グループで1人ずつ研究の進捗の報告をして、生徒同士で、あるいは教員が助言する。

4 議事② 運営指導委員の助言

<授業について>

讀井委員 探究の学びは本当に広がっている。理想的な学びを学校の中で、しかも生徒同士のフィードバックをしながら実現しているというのは本当に素晴らしいと感じた。ここまでの探究を誰がどう作ってきたのか、その思考過程とブラッシュアップの過程が気になった。これは個人の力なのか、指導担当の先生のアドバイスがかなり効いているのか、生徒同士の助言がどの程度効いているのかというところが気になる。探究は、1回出してみても、それに対して、問いかけをすることによって常に深まっているものだと考えているので、誰が効果的なフィードバックをしているのかということが大変気になった。

もう1つは生徒同士のアドバイスをどう仕組化しているのか。フィードバックはある程度再現性をもって、つまり個人、状況、クラスによってフィードバックの質が変わるのではなく、最低限担保するのであれば、何らかの再現性を持ったフレームワークというか、観点やプロセスを一定に統一する方法もあるように思う。今日のフィードバックは、比較的自由に行われていて、個人差が出がちなタイプのフィードバックの仕方だと感じたが、その辺りは事前に何かインプットしているのか。

最後に、評価シートについては、「評価」でなくてもいいのではないかと。評価は最終的なアウトプットに対して、あらかじめ評価の観点が示されていて、それぞれの観点到点数が付けられてフィードバックが与えられるものだとすると、今、自分のテーマで没入しているこの途中のタイミングで評価ということは行わなくていいのではないかと。むしろ探究が良くなっていく下支えとしての、アドバイスをしてもらえればいいので、そのようなシートの名前に変えてはどうか。

坪谷委員 すべての生徒が積極的にリラックスして授業に取り組んでいる様子がみられた。

現在、自分のワクワクに対して、その課題についてさまざまな学問領域から学際的に探究しているところだと思うが、次のステップとしては、今後深めていきたい学問領域や研究領域、もしくはどんな職業に就きたいのかという選択、つまりキャリアスタディ、進路指導、キャリアカウンセリングにつなげていくことだと思う。資料を読むともうすでに高度な学びや、教育に進みたい子どもが清水中学でボランティアをしたり、他にもキャリアデー、卒論、医療と教育に関わっている講師の方との対話などもそれぞれの学校で行っているのだから、これらを体系化して、高校を卒業した後でどういった進路先に行くのか、進学先に行くのか、なおかつ、その中で自分はどんな学問を学んでいきたいのか、どんな研究をして行きたいのか、どんな窓口からより社会を平和に良い社会にして行くのかということを経験するまでには導いていかなければならない。それを、今やっていることの中に組み込んでやっていけばよいと思う。

森委員 授業風景を見ながらとても大事な事を思い出した。つまり日本の教育の高等化の進行につ

れて忘れてしまった教育方法だ。教え込むのではなく生徒自らの好奇心を誘発して自らの力で学修するという教育方法のことである。自分の興味関心や、知りたいことというのは最初はモノログで始まる。そのモノログをダイアログにして、ダイアログの中から次の深みに入って行くというような学習方法は、昔であれば旧制中学などで、近年では大学に入ったらずぐにゼミに入って、少人数で、同学年学生はもちろん上級生も一緒になって議論し、その中で触発されながら学びが深まっていくという教育が行われていたが、今は一律の教育になっている。長野でこれだけたくさんの個々の子どもの関心を育て、個々の子どもの関心を深め、子供同士のダイアログでそこを深めていくということができていながら、大学教育に移ってしまうと途端にそういう機会が少なくなってしまうことを、問題提起として感じた。だから皆さんが長野でやっているこの教育、好きなことをやればいいんだと、好きなことが自由にやれる環境を作っていけばいいんだということを強く感じ入った次第だ。関心というものは時とともに変わるので、固められた教育方法とか教育環境とかというものをカリキュラムとして作ることが理想だが、なかなかそうはいかない。むしろ子供が成長に伴って変わってくる関心を広げたり深めたりするそういう新しい場をどうやって作っていくかが大事だと感じた。

先ほどの国際会議の準備組織の説明で面白いと思ったのが大学生の「伴走者」。この伴走者がトークパートナーだとすれば、トークパートナーを作るとはとても大事。今度の国際会議で教員は後ろからサポートする。このサポートは結局教えたり指導したりするのではなくて、子供が持っているその関心事を引き出していく、つまり引き出していく役割、それがサポーターだろうと思うが 同時にトークパートナーを作るとするのは良い視点だと思った。

荒井委員 やはり探究する学校は素敵である。生涯探究者の条件があるとするならば、自分が突き詰めたいテーマを徹底的に突き詰めていけることの他に、他者との協働を通じて未知を知る部分があると思う。県ヶ丘がやっているように、縦と横の糸ですね。縦の糸としては、学年を超えてアドバイスを受けられることはとても素晴らしい。横の糸としては、問題意識は違えども、同級生同士でアドバイスし合える文化が根付いていくピアグループ効果が期待できる。さらに「斜めの糸」もあると思う。これは、外部との関係を指すもので、大学生との関わりや異世代の中学生との関わり、更に、2021年4月から松本市役所にユースサポート担当ができた。これは、探究を進める上で困った際に市役所の専門部局を紹介してもらえるコーディネート機能を果たすセクションである。こうしてまさに縦の糸、横の糸、斜めの糸が重なりあうことは重要だと思う。一方、課題としては、先行研究や既存の学問体系にリンクすることも必要である。これに関してはたくさんの書物もあるが、学校でハンドブックのようなものも作れるかもしれない。それぐらい「伴走」という行為は実は非常に高度な能力が求められる。ここは、高校教員にとって探究を進める上での悩みの一つではないか。

小村委員 発表の一部しか見ていないが、素朴にタイトルを見てまた1部のやり取りも見て素晴らしいと思った。日本は教育のことを悪く言いすぎて、メディアでも今の教育はダメだとか変えなきゃいけないというが、少なくとも団塊ジュニアの世代との教育から見ると変わっている。変わったことがいいかどうかという議論はもちろんあるが、明らかに変わってい

て昔ながらのチョークアンドトークではなくなっている。一方アウトカムがどうかというと、今日の生徒を見て改めて凄いなと思った。興味関心の深め方、パソコンスキル、データ分析、プレゼン力、対話力この辺りは僕らの世代よりも1桁2桁高い。生徒たちの様子を見て、日本の高校生の底上げを感じた。その生徒たちを育成する先生たちの関わりが良いと感じた。自分の専門分野でなくても遠慮せずに関わるマインドセットは大事だと思うが、どのように長野県全体に広めていくかが大事。工夫を出し合ったり、好事例を分析して対話してみるような試みをするとういのではないか。

先行研究についての指摘があったが、それに触れるだけでも、「引用リテラシー」が育つことに意味がある。先行研究を学び、それを示すことが引用リテラシーの第1歩である。

3点目として「何を良いとするか」を示すこと。フレームがあることで生徒の考えが深まる。科学的なアカデミックな取組であれば、普遍性や再現性が大事で、仮説検証を盛り込むべきで、地域おこしであるならば、付加価値が大事なので意欲やアクションが大事になるだろう。そのあたりを整理しておくことが、助言する教師にも取組む生徒にも役立つだろう。

発表を聞く側が「何を学んだか」を書くフィードバックシートがあってもいいのでは。生徒同士のフラットな関係の中で助言だけでなく、自分が学んだことを伝えるのもいいだろう。

<国際会議について>

森委員 生徒実行委員会形式は良いことだと思う。これがあると広がりが大きくなると考えられるので、この形式を守ってやってほしい。

坪谷委員 探究については、一つの課題を様々な教科の視点から見ていくことが大事。少なくとも2～3教科の視点から見るとよい。「国際的な多文化社会」を例えば統計学的に見たら、地理学的に見たら、数学的に見たら、歴史学的に見たらどうなんだろうと。色々な学問から問いに対する答えというのは出てくる。複合的に問いを見ることで、生徒が自ら、ワクワクしたり、好きだなと思えることを見つけることができる。大学に入って違う形のスタイルになって、自分はこれだと思ってたけどやっぱり違ったっていうことも往々にしてあるが、その時もまた自分で選んでいく力がついてくる。そういった視点をクリアにするとよいのではないか。

讚井委員 国際会議については、子供たちが創っていくチャンスととらえる視点はよい。プログラミングやICTの領域でも、子供たちの視点が欠けがちというのが、全国的に見られるところでむしろ当事者であったり、国際問題やSDGsについては今の世代だからこそ感じていることを高校生が持っているのであれば、そういった思いがこの会議の構想だったり、内容の部分や運営に関しても反映されていくといいと思う。一方で運営など慣れていことには的確なサポートをすることでこの会議自体が1つのアクションを伴う探究として学んでいくという

学びのイベントとして機能したらいいと思う。

先行研究については、やはり見ていて気になったところがあった。先行研究を入れていること自体は素晴らしいが、同時にその出典は何なのか、本当にそうなのか、というところが気になった。先行研究に関するところだと、データを用いて根拠を持ってくるともって説得力が強い。かなりのサンプル数を取る調査を自分でやることは難しいケースも多いので、数は少ないが、密なインタビューをするという形成データの扱いでも構わないのではないかと。例えばLGBTQの問題であればLGBTQに関しての過去の先行研究や何かしらのアカデミックなデータがアーカイブの中にあるかもしれないので、それらをうまく使っていけるといい。情報Iの中でデータサイエンスが必修になるのでそういったところがうまく探究にも関わってくるといいと思った。

今回の取組を俯瞰して見ると、先生方の関わりがすごいと感じる。先生が口出しをするのではなく、おそらく生徒同士でのアドバイスが出来るまでギリギリまで先生が待つサーバントなファシリテーションと言ったりするが、子ども達の為に先生がサブするというか、気を遣いつつ、出たいところを出さないで我慢するような関わりをしている。その中で子供たちが自由に発言し、自分たちが主体的にシートを集めてこの日に出そうというように、先生が言わなくてもやっているというような学級文化づくり、学校文化づくりをしていることが、1番素晴らしいと感じる。いわゆるメソッドや手法とか学習の内容ではなくて文化というのが子どもたちの将来に非常に大きな影響を与えていくことであろうと感じた。

荒井委員 国際会議に関しては今の方向性でいいかと思う。ただ現実的なことを言うと、完全に生徒だけでと言うよりはそれを適切にサポートするような専門集団や外部事務局のノウハウを最大限活用されることも勧めたい。生徒たちが創っていく教育としてのこのひとつのプロジェクトっていうことの意味をきちんと理解してくれる事務局の方と一緒に伴走していくことが大事だと思う。

2つ目は評価観の磨きが甘いと感じている。探究をさせることに重きを置きすぎて、それをどのように最終的に教育の成果として評価していくのか、その是非を含めてまだ手薄感がある。例えば、鋭い問題意識の下で徹底的に先行研究の吟味を行った生徒と、具体的なアクションを起こして、高校生の居場所を作りたいという生徒がいた場合、いつ、どのようなものさしで評価を行うのかは悩ましい問題であると思う。WWLのネットワークを活用して、こうした不安感も高校教員同士で共有しながら議論していければ、と感じている。

最後に、探究する学校の条件が見取り図として最終的に示せたならば、今回のこのWWLの実は凄い成果の1つとして共有財産になると感じた。

森委員 国際会議についてはまだ内容の骨子案が出てきていないが、「多文化社会」ということについては、だいぶ普及してきた。本当の多文化社会をつかっていくために必要なのは“法の支配”の概念の普及だ。例えば、日本は比較的“法の支配”の概念が行き渡っている国である、又はあった。それは、身分格差、身分制度があった江戸時代からそうだったと思込んでいるが、ごく最近、名古屋の法務局（入国管理局）で起きた難民申請をしてもなかなか通らず、ご飯も食べられなくなってしまった女性がついには亡くなってしまったことをどう受け止めるのか。“法の支配”ということをもっと身近な問題に砕いて見ていかなければいけないよう

なことが私たちの社会にはまだまだたくさんあるということも、多文化社会を考える時には大事だと思う。本当の意味の法の支配とはなんだろうか、法律のルールだけだろうかというようなことを考えてみるという視点が入るととてもいい国際会議になると思う。

小村委員 生徒中心の実行委員会形式は本当に素晴らしいこと。私自身この5年間に3回ほど生徒中心の国際会議を開催してきたが、大変。本番これで大丈夫かなと思うこともたくさんあるが、その子達は本当に素晴らしい。あえて言うと、生徒中心に運営というのは生徒が勝手にやるということではなく、ステークホルダーの1人として大人もしっかり関わるのが重要だと思う。実行するのは生徒だが、助言監督するのが大人ということ。1番大事なのは、意思決定を生徒がすることだと考える。つまり行動は先生が手伝っても良いし外部の大人が関わってもいいと思うが、意思決定を勝手に大人が決めて生徒にやらせるというのが避けるべきことである。おそらく、今後、実行委員の生徒と参加者の生徒の分断が起こると思う。実行委員の生徒は、焦って自分達だけで決めようとするが、なるべくプロセスを開示して色々な人の意見を聞くなどの助言を大人がしていく必要がある。生徒中心というのは実行委員の生徒中心という意味ではないのでなるべく可能な限りすべての生徒が当事者意識を持って、運営者だと思って参加できるようになるというのが大事である。私はリアルで2回オンラインで1回国際会議を開催したが、オンラインの方が100倍楽しかった。参集の開催はゴミや、泊まる場所や、食べるものはどうするか、など対応することがたくさんある。今回ハイフレックスということで両方の苦労があるとなるとちょっと大変だなと思った。

2つ目は、英語での会議について自動翻訳の使用に抵抗があるとの話があったが、使った方がいい。国際会議の場でも、グローバルビジネスの場でも、私の話を聞いてくれてありがとうと褒めてくれる人は1人もいない。極端な話、人の話を聞く暇があったら自分が言うことを考えてちゃんと発言した方が喜ばれる。そういう意味で道具を使ってでも自分の意見を言った方が相手が喜ぶ。勉強になりましたと日本人が外国人に言っても誰も喜ばないので、やっぱり自動翻訳を使ってもいいから自分の意見をしっかりと言うのは大事だと思う。ただ自動翻訳で文章を作っても口で言うのは自分でやるとか、その辺はちゃんとガイドラインを作りつつやる。生徒も、ああやっぱり英語自分でも喋れるようになりたいと思ってくれたらいいなと、そのくらいのメンタリティの方がいいと思う。その上で一度、実際国際会議に参加している人あるいは国際機関の人に国際会議とは何かというレクチャーしてもらった方がいいのではないか。私も英語が苦手な立場でいろんな国際会議に出て苦労したことや、少しでも爪痕を残すことを考えてきたが、その辺りは日本の文科省も国際会議などはナッシングに近いので、彼らもずっと苦労してきたので色々言いたいことや、こうやって工夫してなんとかプレゼンをしたなど、言えることがあると思う。

もう1つ、国際会議で1番大事なことに、バイとマルチの違いというのがある。バイが2国間交渉のことだが、国際会議はマルチである。多文化共生ともつながってくるが、色々な立場の人がいる中で違いの指摘ばかりしても仕方がない。基本的になるべく多くの人みんなが納得して共通の目標になることをデザインするのが国際会議の役割。だから最後共同宣言とか大人の国際会議でも出す。SDGsもそういう意味では共通目標。何のために国際会議があるのかという考え方をしっかり持っていることがアイデアを出す上で重要。みんながワイワイ交流するのはすごく大事だが目的ではない。国際試合の目的はいろんな人が集まった上でみんなが納得できる共通の何かを作ること。法の支配という事が前提だが、そういったことも一度やった方がいいのではないか。

最後に、次をどうするかを考えておかなければいけない。生徒は国際会議当日まで考えればいいが、大人の役割は終わった後を考えること。2回目をどうするのか、ここがないと1回目にも全力が尽くせないし来てくれた人に今後どうするか言えない。それは大人たちで先に考える必要がある。私は広島で広島イノベーションスクールというのをやってオバマ大統領の妹にも来ていただいて国際会議をやった。プロジェクトが終了して広島学園という学校を作ったが、参加した生徒にその後怒られたことがある。「なんで学校なんか作ったんですか。イノベーションスクールを毎年やってくれたほうがよっぽど県の多くの生徒が参加できたのに。」と。これが特定の学校での取組になったらその学校に居る100人とか200人しか味わえない話になるけれども長野県の80校が継続的に参加できる仕組みとして何が成立するだろうかということは並行してやはり大人がしっかり考えていくべき。もちろんそこに高校生からアイデアが出たら素晴らしいが、それも当日を迎える前にある程度イメージすることが重要だと思う。

5 閉会行事

あいさつ（曾根原課長）

事務連絡

令和3年度 第3回信州 WWL コンソーシアム構築支援事業議事録

期日 令和4年(2022年)2月5日(土) 13:00~16:00

場所 オンライン開催

参加者(敬称略)

運営指導委員 小村俊平、讃井康智、荒井英治郎 坪谷ニューエル郁子、南希成、森茜
カリキュラムアドバイザー 内堀繁利
学校関係者(拠点校、共同実施校、連携校)
教育委員会(今井教育次長以下4名)

1 開会行事

今井教育次長あいさつ

委員紹介

日程説明

2 議事①

(1) 令和3年度取組報告

カリキュラム開発拠点校(上田高等学校)

(北澤校長) コロナ禍でオンラインの活用が広がった。それによって交流や企画の幅が広がるとともに様々な変化が生じている。1つ目は、普段ならば行けない、来てもらえないような学校との結びつきができたことが大きな変化だと捉えている。まだ工夫ができるので、今後も研究してまいる。2つ目は、全職員がこの取組に関わるようになってきていることも大きな変化だと考える。上田高校では、2年生の課題研究については全職員が5、6人を担当している。1年生についても同じように全職員が取り組む体制をとっている。関わることで、面白くなる、面白いから工夫をする、工夫するからまたさらにさまざまな面白い意見が出てきて循環ができているように感じられる。3つ目はやはり職員会等で担当から必ずWWLの進捗について報告することで、日常的な取組という雰囲気ができている。4つ目は、生徒が積極的に探究の活動に取り組むようになってきており、さらに一歩進んでアクションも徐々に起こすようになってきている。そして、やはりWWLの後どうするかというところが大きな課題だと考えている。情報の共通テストにおける扱いが大変困っているところでもあるが、その後の教育課程の編成を含めて今後の大きな課題だと考えている。

(市川教頭) 取組の紹介

- ・生徒発案のNPOと連携した教室の断熱工事
- ・上田の街を元気にする「うえわちゃ」
- ・フードバンク
- ・高校生同士が本音を言い合う閉じたSNS
- ・中学校への学習支援

以前は世界全体や、海外に意識を向けている生徒が多かったが、テーマが広すぎると結局拡

散して最後のまとめが分からなくなってしまうこともあり、テーマの範囲を限定したり、方向性について教員とやりとりをする中で地に足がついた研究テーマが増えてきている。

別の取組としては、同窓生にアドバイスを求める仕組みや、オンラインでの海外交流など様々な取組を工夫して行なっている。

共同実施校（松本県ヶ丘高校）

（杉村校長）第2回の運営指導委員会での助言をもとに生徒も切磋琢磨している。今年が一番の進展は、松本市との連携が非常に深まってきたこと。荒井先生の助言もあり、子どもたちも喜んでやっている。

また、県内外の視察が非常に増えた。多くの先生が視察にきて、いっしょに検証するようなスタイルができたように思う。先進的な取組も学ぶ機会になった。

来年度4月から進学型単位制を導入する。WWLの大学の単位取得も単位制ということできやすくなる。また教科情報を単独で立ち上げて共通テストに備えていく。その際は讃井先生の御協力もお願いできればありがたい。中心地区の校長会主催による探究フェスティバルを3月19日に開催。自校や近隣だけにとどめず、広く展開する。引き続き上田高校と協力して、WWLの成果を広く共有していきたい。

（徳永教頭）取組の紹介

- ・オンライン多文化共生フォーラム。100名が参加。10月の金沢研修、12月のSGH、WWLの全国高校生フォーラムへと発展。
- ・ネパールオンラインスタディツアー
- ・金沢大学の協力による能登半島での2泊3日海洋実習。研究成果を日本比較内分泌学会それから日本動物学会中部支部などで発表した。他県の優れた研究発表を目の当たりにして生徒も刺激を受けた。
- ・ICTや探究で視察を多く受け入れたことは、見て頂くだけではなくて第三者の目で再度自分の学校の取組を振り返る貴重な機会になった。
- ・各種プラットフォームへの積極的な参加
- ・全ての授業、学校行事、生徒会活動等ありとあらゆるものが探究を軸にして展開しているということが特徴。

連携校

（須坂高校）未来の学校「信州型グローバルハイスクール」で須坂スーパーアカデミックハイスクールを標榜。生徒が多様性を感じて、様々な人と関われる力がついてきた。

（長野高校）主な取組は課題研究。2年生が個人研究で、テーマを設定して1年間かけて研究。個人で外部の発表会等に参加する生徒も出てきて、精力的な生徒が増えている印象。

（長野西高校）探究学習で地域のお店を応援するCMを1年生が作成。Webで発信。地域の魅力を発見することを意識して取り組んでいる。今年度外部講師を招いた英語合宿や、ラオスからの留学生受け入れも久々にできた。

（篠ノ井高校）篠ノ井高校は文科省の「地域との協働」事業2年目。1年生が長野県について2年生がSDGsをテーマに活動。本年度の大きな特徴は校務分掌に探究係を創設し、今までよりも組織的に校内を動かせるようになった。

(屋代高校) 1年生の全生徒が台湾の高校生とクラスごとに交流。一貫生と理数科の生徒は英語で、他の生徒は日本語で4つの学校の7クラスと交流した。日程調整や接続トラブルは大変だったが、楽しく交流できた。

(上田染谷高校) 国際的な学びでは「台湾交流」「地元語学学校の留学生との交流」「エンパワーメントプログラム」が特徴的。主体的な学びでは、1年生は「自分」「社会」等について学び、2年生は、地域や人と繋がる企画を考え、地域の大人と交流。70ほどの企画が進行中。探究カリキュラムができつつある。

(野沢北高校) 未来の学校「卓越した探究の学びを推進する高校」2年目。佐久地域のコンソーシアムの構築に取り組む。地元の方々の助言で、生徒が、自分の研究を多角的に見られるようになり、ポジティブな面が見えた。探究を通して教員も大きく成長できた1年だった。

(諏訪二葉高校) 1年生：諏訪市と合同開催で「地元企業を知る」講座を設けて、10社が来校。また、近隣の中学校と連携して、教員志望3年生が中学3年生の補習に参加。新たな課題を見つけ、教職への志望を強めた。

(伊那北高校) 教材(主にパワーポイント)を教員の中で共有して誰でもできるようにしている。生徒の作品も教員に共有し授業で用いる。生徒が自分のパワーポイントが使われると喜び、もっと探究を頑張ろうという意識づけになる。

(伊那弥生ヶ丘高校) 郷土愛プロジェクト：地域の支援をいただきながら2年生が中心になっている。生徒が自分の言葉で自分の考えを述べることに至った姿を教員たちが見たことがスタートポイントになる。

(飯田高校) 3年生が外部と積極的に関わることで面接や小論文をより深めたものにしていくことを考えた。次年度から探究が時間割の中に入ってくる。今年行った外部との関わりをより組織化しながら、活動に繋げていきたい。

(飯田風越高校) 国際教養科生徒が2年次に行う課題研究。フィールドを地元の下伊那地域に絞って研究。ワークショップやフィールドワークで課題を深め、それをまとめて発表会を行なう。問題解決能力や発信力が向上している。

(松本深志高校) 未来の学校構築事業2年目。信州大学の先生方による連続講義をオンラインも活用しながら土曜日に実施。生徒たちの反応も良く、学習に対しての価値意識も高まっているという傾向が見られる。

(長野日本大学高校) 2つ絞って紹介する。1つ目は本校の世界部の活動。小学校4年生から高校3年生までの年齢集団が、地元の企業とつながりながら、長野の商材を世界に発信する探究活動。また今後の展望として、探究活動をもとに「好きを学びに」をキーワードに、探究創造学科を導入していく。

管理機関 ネットワークの構築については、当初の11校から現在17校まで増加。今回の会議から飯田風越高校と長野日本大学高校が参加。両校の特色が今後ALネットワークに共有されることを期待。より深い学びについては、各校よく取り組んでいて、地域でアクションを起こすような姿が多く見られるようになってきたことは1つの成果と捉えたい。国際的な学びと高度な学びについては学校で取り組みにくいケースもあると認識しており、管理機関となるべく機会を作りたい。2月に4日間行われる環境政策課主催の国際学生ゼロカーボン会

議は、SDGs 探究サポーターとしての繋がりから生徒の参画が可能になった。国際会議実行委員会には 7 校から 53 名が参加。月 1 回程度のオンラインミーティングで、分科会や基調講演講師を決めてきた。学生・教員・ALT サポーターの支援を得て進めていきたい。高度な学びについては、県立大学および信州大学での先取履修が実現の見込み。高校生向けの講座も企画している。来年度はいよいよ指定最終年度。終了後の自走が求められているところから、あまりお金をかけずにメリットのあるプログラムを確立していきたい。

カリキュラムアドバイザー 午前中上田高校のグローバルスタディーズ報告会に参加したが、生徒が自分の興味をそれぞれ追究していて、様々なテーマにもとづいた探究が見られて良かった。「探究」についての 1、2 年生の話し合いも興味深かった。この AL ネットワークの構築を目的とする WWL コンソーシアム構築支援事業は、かなりのことができていると思う。これまでは広げることを中心にやってきたが、来年度が最終年度で、その先どうするのかということを考えていく必要がある。新たに高大連携の先取履修や、高校生国際会議はあるが、そろそろまとめを行って、その翌年度からどうするかを並行して考えるのが 3 年目。その視点としては令和 5 年以降、どんな仕組みでやるのか、管理機関を中心に学校と連携して考えることが必要。中身については管理機関と各校が相談して、メニューとして令和 5 年以降も残すもの、自分の学校だけで行う以上の意味があるものをプラットフォームのメニューとしてこれからも出せれば学校にとっても意義があると考えている。自分たちの「学校づくり」や「学び」づくりがこの事業を通じて行われることが大事だと考える。事業が終わったら終わりというのではなく、学びとか学校を創る様々な取組が、それぞれの学校や管理機関にとってどんな意味があるのかを見直すのも 3 年目だと思う。3 年目にいい形で成果が出ればいいと思う。

(1) 授業参観

上田高校 午後の「たんきゅう交流会」は希望者プログラムで、対面で全校が参加予定だったが、オンライン実施になり、AL ネットワークの伊那北高校、須坂高校、松本県ヶ丘高校から生徒が一緒に参加している。日本語と英語の 2 つのルームがあり、英語の方には ALT が 6 名ほどファシリテーターとして参加している。

日頃、上田高校では生徒 1 人 1 人が課題研究に取り組んでいるが、助言をする教員の立場からも色々感じる場所がある。グローバル課題を考えて、何か解決策を提案してみようというものの、課題が大きすぎたりして、高校生がすぐにとりかかれるものではないことがある。一方、教員と話してみたいという希望を持つ生徒もいる。実際に社会の課題を分析して、自分たちからできることを考えてみるプロセスを体験することも、グローバル課題解決の第 1 歩になると考えて、初の試みとして企画した。話し合いの中で、課題の本質を深掘りできればいいと考えている。

(2) 運営指導委員と教員の意見交換

「日頃感じているもやもやを共有しましょう。」

グループの記録

A) 校務分掌の役割がぼんやりしている。チームの協力体制が無い。一部教員の負担が大きい。

→・既存の学校組織を利用する（通常業務にしていく）

・個人任せにしない

外部とのやりとりや調整は大変（海外はスケジュールが違うことも多い）

→探究を一つの教科の認識にする。専任が必要。探究をコマ数にカウントできるようにする。「探究学習」を全教員が知る。国での予算措置の可能性あり。負担の源の見極め、マネジメントなど方法の工夫が必要。

B)・「いよいよやらなきゃいけないかな」という状況になってきた。

・引っ張れる先生、中心になれる先生がいることが大事。

・伊那北の共有の取組はよかった。

・生徒も自分の作品が使われると喜ぶし、やりがいにつながる。主権者教育の素材などは好評だった。

・教員の面白い取組も共有することが大事。

・生徒の取組もあまり大きな話にならないで身近な話ができるといい。

C) 大学入試に直結できるのか、という疑問がある。探究と入試が乖離している。

自由進度学習にすると設定時間が少なくて済む。（数学・社会は可能）

探究に浸る事がその先につながる

D)・言いたいことが言えなくなっている（生徒や地域の人に対して）

・観点別評価について（課題の提出など）

・職員の負担について

・コロナの影響がどのように現場に及ぼすのかが心配。

・生徒に提供する内容と、生徒が求める内容のバランス（課題の量など）

(3) 運営指導委員より指導・助言

讀井委員 学校での探究の取組が、社会課題を解決するアクションまで進んだり、商品開発されたり、研究的なものも学会発表していて、高度なところに達していて、その取組が本当に素晴らしいと思った。探究は深めて行けば行くほどその領域専門性が高まっていく。そういった高度な研究とかプロジェクトの伴走を学校の先生がするのはなかなか大変ではないか。その知識面、技術面を含めて難しいと思うが、探究が高度化した時の伴走は各学校で誰が担うことになっているのか。教員が担っているのであれば、自己研鑽して臨んでいるのか。

上田高校 そこが頭を悩ませているところ。1つはなかなか高度化まで持って行けていない部分がある。全職員で関わろうとすると、最初の話としては専門でなくてもいいので、素朴な質問を生徒にぶつけてください、というところからスタートする。そこから生徒の研究がだんだん高度化すると、同窓会のアドバイザー、OBやOGを頼ってみたり、教員がつなげてみたりしている。理系的な方面で弱いところがあるので、他校の取組を参考にしたい。

讀井委員 今日は、地域を越えた取組や逆に地域の方が入ってくる等、さまざまな実践共有があった。長野県内だけでなく、全国的にも示唆がある内容。学校の中で自前主義でやっている専門性の面でも、先生方のリソースの面でも大変なことがあると考えると、各学校で探究のカリキュラムを考えていくことは、学校の中での取組というよりも学校という教育システムをどう拡張するかという、抽象度の高いまさに課題解決を各学校でしているようなもの。

この取組を教育委員会が、国やより広いところに届けることが長野県だけではなく、全国の先生方の助けになるように感じた。

坪谷委員 2年目を迎え、どの学校も充実した探究の学習を行っていて、さすが教育の長野と感じた。来年は最終の年度になってくるので、この探究活動を通じて生徒が自らどんな分野のどんな領域の研究を高等教育で深めていきたいのかを選択できる、もしくはどんな職業を選んでいくことが自分にとって社会をよくするために貢献でき、なおかつ自分の得意を生かせるのか、この選択ができる生徒を育てていくのが最終的なゴールだと思う。ぜひこの探究学習の3年目の最後には、生徒がそうなることを意識して活動を続けたり、制度を作ってほしいと思う。

森委員 今日の事例は、色々な課題や取組が闇鍋やごった煮のように入っていて、面白かった。他の国際志向の学校と違う点は、長野は闇鍋、ごった煮の状況だということ。そのごった煮状況が、人が生きるという意味でのごった煮の課題を全部高校で抱えているということ。この状況は大事にしてもらいたい。一般に探究学習とか課題学習というと課題や探究が定義されがちになる。でも、子ども達を感じているその課題や探究をそのまま使い、場合によっては解決が得られないような議論の仕方も認めるという点で、長野のこの方針は大変素敵な闇鍋だった。

その上で、今日の事例の中に時系列で取り組んでいる例がいくつかあった。高大連携や小中高と繋がっている、中高と繋がっているような時系列でグローバル化の課題に取り組んでいる事例を大変楽しく面白く聞いた。今までは自分の身近な課題をSDGsになぞらえるという課題なのか、それを解決するにはSDGsの何と何に関連するのかという誘導の仕方だっただろうが、テーマという意味でのSDGsあるいはESDと言う分野のスペース、広がりとともに時系列でもそれが整理されていけば素晴らしい教育カリキュラムができていくのではないか。そういう意味で2年目の実験は大変有効だったと思う。

荒井委員 讃井委員の言う「探究の高度化」への対応をどうするのかは、全国で共通する課題である。教育の経験として「探究」を経験することは大事なことだろうが、高度化のプロセスにおける専門分野での知見の担保、先行研究の分析は、今後考えていかなければならない問いである。大学や公共機関や専門機関との連携体制の構築は掲げるのは簡単だが、費用負担面や調整コスト面を学校単位で誰が担うのかという課題がある。大学と連携協定を結ぶことも一案だが、より大きな枠組みでの仕組みも必要かもしれない。

坪谷委員の話は、「キャリア教育」としての探究という受け止めをした。進学や就職という意味の進路以上に広い意味でのキャリアを考えたプレゼンテーションを生徒が行うことは、その生徒に貴重な経験になるはずである。

森委員の話に関連して、今日印象的だった点がある。先ほどのセッションでは英語のグループに参加したが、ALTがエッセンシャルな問いを生徒に投げかけて、辛抱強く対話をしていく様子を見ることができた。そこでの問いは、Bothers: Why is it troublesome?、Worries: What feelings does it give us?、Why: What causes the problem?、Purpose/Value: What is the purpose of our club and homework?といったものである。自分の意見を言い、そこで終わるのではなく、理由が問われているわけだが、応答に窮する子

どもの姿もあった。その理由を考えてみると、1つは英語が苦手だから言えなかった可能性がある。日本語なら伝えられるのに、英語という言語ではまだ伝えられないという可能性がある。2つ目は、概念的な問いに向き合う経験がまだまだ少ないため答えられないという可能性もあった。3点目は、「根拠」をもとに自分の考えを他者に伝えていく経験がそもそも乏しいから言えないという可能性もあったと感じた。それぞれ理由があるかと思うが、英語と日本語の両方を経験することは往還的に「思考」や「表現」を学ぶ重要な機会になるだろうと感じた。物事を「テーマ」としてだけではなく、「概念」としても学ぶことで、共通言語ができてくるのではないかと感じた。

南委員 今日はとても面白かった。ワールドワイドと言って、大風呂敷を広げてしまうと、結局足元をすくわれてしまう、高校生にとってむしろ道に迷ってしまうのではないかという印象を感じていたが、むしろ自分の興味を持つところから、身近な地域などからスタートして世界やSDGsに繋がっていくという視点に学生自身に移ってきているように感じた。

授業参観は、とてもフランクに話し合っていて、高校にある多目的トイレの話をしてしたが、すごく地に足が付きすぎているというか身近な話だったが、そこから、車椅子の学生さんが上田高校に来たらどうするのみたいな話につながっていった。そういう方向で、例えば車椅子で普通に自立して生活をしているような方もいるので、そのような人達が高校に来てくれるようなことをやったりできるのではないかと思った。それに限らず、生徒たちも探究やリサーチが、地に足がついたいい形で地域や社会に広がっていて、彼ら自身の経験や視点も広がっているというような進展を見せているように感じた。

小村座長 今日は、学校という身近なテーマを問うのがよかった。以前、国際会議で、様々なタイプの学校の高校生が対話したが、その時のテーマが学校だった。これからの学校をどうするかというようなテーマだと知識の量に関係なく、皆本気で喋れる。知っている人がいたりなかったりするテーマだと、参加しにくい子が出てしまう。身近なものを扱うのはすごく大事で、ただ身近なものを扱うだけではなくて、難しいものを問うよりは、簡単なものを深く問う。深く問うとは何なのかというノウハウを磨いていくのが、教員のプロフェッショナルとしての役割だと思う。自分たちよりも遠いものや抽象的なものがすごいとか頭がいいと思いがちだが、実は身近なものをすごく深く問うこともできるし、必要に応じて専門知識を持った人の力を借りて話を深めるようなことが高校の中でできる、そういう場にしていければいいと改めて感じた。

森委員 先ほどの南先生と同じグループに参加したが、生徒たちが学校に初めて多目的トイレができたが、できたというだけでどこにあってどのように使われるものかということもすっかりとは教育されていない。認識されないまま自分たちでそれを考えていくよう議論を雑談的に真剣に話していた。身近で、なおかつ知らないものを知らないままで、じゃあどうなのかというような話が、ちょっとしたヒントで議論が深められていく。自分たちの問題だけじゃなくて広がっていくようなことを一緒に体験して、先程の闇鍋という表現が出たのだが、これはとても良いことだと思う。彼女達の議論を聞いていると、言葉としてのバリアフリーやユニバーサルアクセスというのはあるが、実際にそれがどういうことなのかについてははまだ、深まっていないということがよく理解できた。議論が続けられることが大切だと感じた。

小村座長 先程のブレイクアウトルームで出たことを話題にしたい。

大房教諭（飯田高校） 色々状況も変わる中で、やらなくてはいけないことが増えてきているというのはあると思う。その時に、やはり外部との関わりがこれからすごく必要になってくると感じている。ちょうど飯田高校では来年度から時間割に総合的な探究の時間を入れる予定で、担当者として、年間スケジュールを組んでいるが、かなり外部の方と関わっていくことをやってみたいと思っている。その時に、個人ではなくて、組織化していく時にどのようにして行く必要があるとか、やりっぱなしではなく、どう振り返りをしていくか、お話を聞いた内容をどのように生徒自身の問題やそれから社会とつなげていくのかということが、どのようにできていくかが今後すごく大事なことだと思っている。飯田高校でも試行錯誤しながらまたやっていきたいと思う。

神岡教諭（野沢北高校） ブレイクアウトルームで話題に上ったことだが、自由進度学習が通常の科目設定時間よりも少なく済むということで、そのようなことを行っている学校もあるという話を聞いて、面白いと思った。実際に探究でうまく取り入れられないか考えている。本校ではグループでの共同探究を行なっているが、他校との協働については、マイプロに参加した生徒が他校の生徒とつながって新しいことをやろうとしている状況。今日の上田高校の授業参観を参考に他の学校と協働して何かを探究していくことも面白いと思ったので、応用できる場所を探していければと思う。

山田教諭（飯田風越高校） 観点別評価のところについて、皆さん色々とうとうふうにしようか苦労している話があった。具体的に、例えば課題の提出などを評価に入れるのか、コロナの影響で顔の見えないオンラインで色々なことをやったりしているが、そのような状況で本当にどのように評価したらいいのかというような話をした。教科によっても評価の仕方は、ずいぶん変わると思うし、まさにどの学校でも検討しているところだと思うが、なかなか難しいという印象を受けた。

小村座長 ここまでの話を受けて、運営指導委員からコメントを。

森委員 方法論だが、校務分掌の中に探究学習の分担を位置づけたという報告があったが、これからこの運動が地道に広がっていくためには、分掌の中にきちんと位置づけることが必要だろうと思う。もう1つ、課題を整理していく時に授業の中の成果だけじゃなくて進路指導で出た課題を教科の中へ戻していくことを始めたという学校があったが、とても役に立つので、まとめるときの方法論として視野に入れるとよい。

讚井委員 ブレイクアウトルームで出た話の中で、やることがどんどん増えていくという問題に対して対応していかないと、教員が大変である。さらに、実は、生徒も結構忙しくなっているのではないかと改めて感じた。私の専門領域である情報とかプログラミング教育も教科の内容が強化され、共通テストに入ってくる。共通テストの教科が1つ増えるということで、そのようにどんどん増えていくことに対して、どうしていくかをセットで考えていくタイミングだと思う。今長野県で行われている探究的な活動の中で外部のリソースの活用の部分など探究的にやっていることを、例えば情報の授業1コマを使って、うまく一石二鳥の授業ができていくような事例が、今後できてくると思う。探究を深めていくことと同時に、やることを減らす、そのスクラップアンドビルドのスクラップの部分の事例もぜひ長野で作って全

国に先進的な事例として紹介できると全国の先生に役立てられる。

もう1つは、やはり、子どもたちが身近で思い入れを持てるテーマからスタートしていくのがやはり正解だと今日改めて感じた。なぜそれがいいかというと、例えば学校のことを話すことで、本当に変わっていく実感を持てるからだと思う。日本財団の調査などでも自分が社会を変えられる実感が、日本の子どもたちはめちゃくちゃ弱いということがそもそも課題感としてある。身近なところからスタートして、それをアクションで変えていくという体験を積むことが、「探究っていいんだ」、とか、「やっている世界が変わるんだ」という原体験になると思った。その体験を高校の探究で届けられているということが本当に尊いことだと思った。ぜひ、そういった意識面の変化もこれから調査研究をして発信してほしい。

小村座長 最後に、今日生徒の対話の中にも先生が忙しいというようなコメントが出てきたが、このコロナというものも相まって、WWL の最終年度に向けて探究をどう進めていくか本当に先生方の心配ごとが多いと思う。この WWL が終わったあとのことを考える時に、もうこれで終わった、もう何もやらないというのではなく、ここで培ったものを今後もどこの学校も継続、発展していきたいと思ったとき、大切なことは、働き方を変えていくということだと思う。全ての人にとって時間は有限である。今日改めて思ったのは先生方が忙しい、多忙だと言う時に、一体何に時間を取られているのかを、データを残してというわけではないが、見ていくことが大事ではないかと思う。そして、そのかかっている時間をどう減らすことができるのか、あるいは先生方は何に時間を使うべきで、そこに十分な時間を使えているのかを見ていく。やはり先生方には生徒に関わる時間を増やして頂きたいし、できれば連絡調整などにかかる時間は減った方がいいと思う。実際今どんな状況でどれくらい減らせるのか、何をやったら減らせるのかといった具体的な議論がないままで、もっと予算があれば、もっと人がいれば、あるいは分掌を作ったらという話になりがちである。まさにこれは大人の探究だと思うが、根拠を持って周りに対して状況を変えるための働きかけをして行くことが大切である。これくらい時間がかかっている、ここに対してこういう施策をしたいということを伝えていくことが大事。今、国も探究や STEAM を進めるための新しい制度設計をいろいろやっているのだから、伝えていくチャンスと言える。大変だという声は今集まっているが、なかなかファクトがなくて、政策を考えるのが難しくなっているのだから、何に時間がとられているのか、どうすればそれを改善できるのか、あるいは先生方がもっと生徒に関わるために講じていく方策が WWL の取組の中から見えてきて、新しい先生方の働き方が発明されると本当に次のステップが良いものになると思う。

(5) 閉会行事

曾根原学びの改革支援課長あいさつ

信州WWLコンソーシアム構築支援事業令和2年度検証会議のまとめ

期日：令和3年3月2日（火）

参加者：慶應義塾大学総合政策学部 教授 清水唯一朗
拠点校 上田高等学校 教頭 市川格
WWL推進係主任 白鳥敏秀
管理機関 長野県教育委員会事務局 宮下美和

指摘事項と助言

全体的に活発に取り組んでいる印象である。SGHを経て、要求水準が高い中でグローバルな課題に関心があると答える生徒が75%という数字からも生徒も意識を高くして取り組んでいることがわかる。保護者や教員もこの事業を前向きに評価していることが感じられるが、いくつか気づいたことをコメントしたい。

【生徒の自己評価について】

ローカルな問題に関心を持つ生徒が多いのはプログラムに取り組んだ成果と言える。DDPスキルは向上しているが、コミュニケーション能力に不安を持つ生徒が多い。ピア評価を取り入れることで自信をもって自己評価が向上することもある。

【卒業生の活用について】

同じプログラムを経験して大学生になっている卒業生をロールモデルとして活用すると良い。年齢が近いOBOGとの斜めの関係が高校生には響く。

【能力の育成について】

・主体性

自分の主体性は自分では評価しにくい。日本人は自己評価を低くつけがちでもあるので、WWLの活動の中で積極的に評価をし、褒めることが重要である。自主活動は非常にハードルが高いため、活動の背中を押すことも重要ではあるが、段階を下げて声をかけるだけでも効果がある。

・課題発見解決能力

そもそも高校生は課題発見解決のツールを持っていない。授業に課題発見のプログラムを導入してみるのも一案。課題設定の時に、すでにある課題を選んでしまうことが多いが、それらは解決方法もある程度見えてしまうので、オンゴーイングな課題に取り組んでみるのも面白い。だれも正解を知らないので、自分ごととして取り組みやすく、文理問わず様々なアプローチが可能である。

【教員アンケートについて】

多くの教員が関わっている体制、研究に取り組ませようという教員の姿勢はよい。生徒が発表するときに指導教官の名前をクレジットしてはどうか。

【保護者アンケートについて】

大学入試との関係から保護者の理解が得にくいことはよくある。大学の教員がWWLのプログラムについて保護者に伝えるような機会を設けると意義が伝わりやすくなることも考えられる。

【学外との連携について】

連携しているJICEのJDSプログラムで世界の地方公務員と繋がる、OBOGのネットワークを活用する、地域の図書館と繋がる等、活用できるものはしていくとよい。

【教員の負担について】

上記の地域や学外との連携や、生徒に任せってしまうことで負担を軽減できる可能性がある。

【2年目以降の取組について】

先輩の姿を真似することは悪いことではない。まったく同じことをして終わるのではなく、自分が工夫して付け加えたり、その工夫をフィードバックする機会を設けることで主体的に取り組める。学年の中だけで取り組むのではなく、縦の繋がりを意識することで連続性が作れると深まっていくのではない。

長野県教育委員会事務局学びの改革支援課

〒380-8570 長野県長野市大字南長野字幅下692-2

TEL 026-235-7435 FAX 026-235-7495

E-mail: kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

長野県上田高等学校

〒386-8715 長野県上田市大手1-4-32

TEL 0268-22-0002 FAX 0268-23-5390

E-mail: ueda-hs@pref.nagano.lg.jp